地 域 交 流 研 究

2012年度

年報 第９号

目　次

―――― 第9回地域交流研究フォーラム ――――

『フィールド・ノート10周年からみえる未来』

開始及び主催者挨拶 …… 地域交流研究センター長　杉本　光司　4

概要説明 …… 司　会　北垣　憲仁　6

フィールド・ミュージアムについて …… 初等教育学科教授　坂田有紀子　7

『フィールド・ノート』ができるまで …… 北垣　憲仁、別符沙都樹　9

懇話会 …… 司　会　北垣　憲仁　12

登壇者　今井　尚
前田　恵子
前澤　志依
遠藤　静江
青池恵津子
須藤　克昌
小口　尚良

まとめ　社会学科教授　畑　潤

―――― 2012（平成24年度）年度活動報告 ――――

Ⅰ．2012年度の活動について（概況） …… 37

Ⅱ．各部門の活動 …… 39

Ⅱ－１．フィールド・ミュージアム部門

Ⅱ－２．発達援助部門

Ⅱ－２－１．ＳＡＴ事業

Ⅱ－２－２．地域教育相談室

Ⅱ－２－３．地域情報教育

Ⅱ－２－４．地域美術教育

Ⅱ－３．暮らしと仕事部門

Ⅲ．インターフェイスとメディアの活動 …… 70

Ⅲ－１．第9回地域交流研究フォーラムの開催

Ⅲ－２．各種講座の開催

（１）都留文科大学現職教員教育講座

（２）都留文科大学市民公開講座

（３）県民コミュニティーカレッジ講座

（４）総合地球環境学研究所との共催による「第12回地域研連携セミナー」

（５）学級づくりの向上をめざす実践講座の共催

Ⅲ－３．『地域交流センター通信』の発行〔概況と第22・23号〕

Ⅲ－４．科目「地域交流研究Ⅲ」の開講

Ⅳ．地域貢献活動 …… 90

Ⅳ－１．山梨県地域教育フォーラム南都留集会

Ⅳ－２．都留市子ども教室事業

Ⅳ－３．文大ボランティアひろば

Ⅳ－４．まちづくり交流センタープランへの参加について

Ⅳ－５．文大名画座の開催

Ⅴ．地域交流研究教育プロジェクト …… 103

Ⅴ－１．田んぼクラブ　～稲作体験実習の取り組み～

Ⅴ－２．大学周辺山林における次世代の森づくりに関する調査

Ⅴ－３．「谷二ラボ」活動について

第９回 地域交流研究フォーラム

『フィールド・ノートからみえる未来』

2013年2月2日

都留文科大学

都留文科大学地域交流研究センター主催

第9回地域交流研究フォーラム

フィールド・ノート10周年からみえる未来

2013年2月2日 土
13:00～15:30

第9回地域交流研究フォーラムでは、『フィールド・ノート』編集に携わってきた卒業生、地域の読者、教員とともにこの10年を振り返り、『フィールド・ノート』が拓いてきた可能性と課題について考えます。

当日の内容

- ■フィールド・ミュージアムの概要
- ■『フィールド・ノート』について
- ■『フィールド・ノート』への思いを語る
- ■まとめ

参加費：　無料
会場：　都留文科大学2号館102教室
主催：　都留文科大学地域交流研究センター
問い合わせ：　0554－43－4341（内441）
（地域交流研究センター）

開始及び主催者挨拶

地域交流研究センター長　杉　本　光　司

みなさま、こんにちは。

本日はようこそお出で頂き、ありがとうございます。

ただ今、ご紹介にありましたように、本学の地域交流研究センター長を、平成21年の4月からさせて頂いております杉本と申します。私は、情報センター所属の教員として情報教育を担当しております。このセンターとの関わりは、発達援助部門の一つであります情報教育の分野で、地域の小中学校との教育活動を通して参加させて頂いております。また、昨年度から新たに発達援助部門活動の一つとして参加して頂いており、本日も主催スタッフの一人として参加しております鳥原正敏教授を中心とした美術教育の分野と、この都留市をフィールドとした連携プロジェクトをスタートさせております。

さて、当センターも2003（平成15年）年4月1日に開設され10周年を迎えています。そして、以来、センターの年間最大の行事として受け継がれております、この「地域交流研究フォーラム」も、本日、ここに第9回目として開催することができました。今回は、私たち地域交流研究センターにおける三つの活動部門、「発達援助」部門、「暮らしと仕事」部門、そして「フィールド・ミュージアム」部門における活動の一つでもあります『フィールド・ノート』のこれまでの歩みにスポットをあて、センター開設とともに始まり、ただ、ひた向きに今日まで歩き続けてまいりました、これまでの時間を振り返ると同時に、これからの進む道筋について、これまでの『フィールド・ノート』と深く関わってきた方々と共に、集い、語り合うひろばを作ろうということを掲げて開催いたします。

ここに、当センターの年報の創刊号を持ってまいりました。このなかに、第一回「地域交流研究フォーラム」におけるプログラムのなかで、地域交流研究教育プロジェクト報告として、当時、センターの特別非常勤講師として北垣憲仁先生の「フィールド・ミュージアムと『フィールド・ノート』の実践」と題した報告文が掲載されております。

本日のこのフォーラムの開会にあたって、先ず、このなかの一文を是非皆様に紹介しておきたく、ここに読ませて頂きます。

『フィールド・ノート』は、センターの「フィールド・ミュージアム」部門の機関誌で、今年（2005年）で創刊4年目をむかえる。この活動はセンターの事業としても位置付けられている。この冊子編集が、「フィールド・ミュージアム」部門への学生や教員の傘下の受け皿としての機能を果たすだけでなく、地域との新たな交流を生み出し、学生自らが自己の生き方を問い直す契機となっているなど積極的な意味を持つことが、編集に参加した学生や交流した地域の人々の声を通してみえてきた。こうした冊子編集の取り組みが生み出す効果は、「地域に根ざし、地域を探求する」センターの活動の持つ方向性とも大きく重なるものであり、その役割や効果の検討は博物館のみならず大学教育のあり方を考えるうえでも重要な意義があると思われる。[*1]

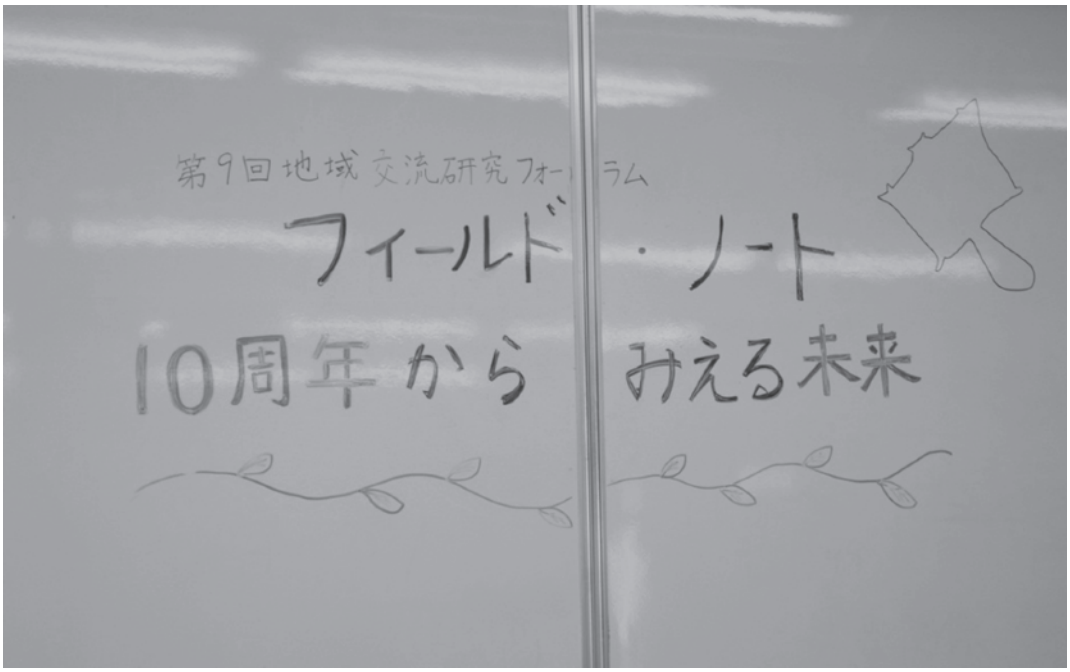
2001年10月、北垣先生を含めた5人で始まった、『フィールド・ノート』の歩みが、今日、こうして10周年を迎え、その創刊時のメンバーのお一人でもある今井尚さん、また、歴代編

集長の一人でもある前田恵子さんという編集者側の方々を代表してお話頂くことも楽しみにしています。また、都留市にお住いで、これまで『フィールド・ノート』を力強く支援して頂いております、遠藤静江さんと青池恵津子さん。更に、教育現場でご活躍頂きながらも、フィールド・ノートと深く関わって頂いております小口尚良さん、須藤克彦さんにもお話頂けるとのこと、そして、現在の編集長の一人として前澤志依さんにも登壇者として参加頂けるとのこと、皆様には深く感謝いたします。

本日ここに、第9回地域交流研究フォーラムを開催できますこと、これまで地道に成果を積み重ねてこられた関係者の方々のご努力、そして本日この会場においで頂きました皆様を始め、力強く支えて下さいました多くの方々に対して深く感謝する次第でございます。

これからの時間、ともに集い、大いに語り、感動して頂き、そして、お帰りの際には、フィールド・ミュージアムや『フィールド・ノート』の持つ力、強い力を大いに感じていただければ幸いです。

それでは、第9回地域交流研究フォーラムの開催にあたっての始まりのご挨拶とさせていただきます。



《引用文献》
*1 都留文科大学地域交流研究センター編（2005)、「フィールド・ミュージアムと『フィールド・ノート』の実践」、『地域交流研究年報創刊号』、都留文科大学、P.23, l.24～l.33。

第9回地域交流研究フォーラム　概要説明

司　会　北　垣　憲　仁

例年、センターのフォーラムというのは、向かいの2101教室を使って行なわれるのが通例なのですが、発言者と来ていただいたみなさんとの距離がちょっと遠く感じられるようなつくりになっていますので、今回はぜひ顔の見える小さな教室でやりたいということで、この教室を設定いたしました。わたしたちはできれば直接取材をし、直接観察をし、ということを大切にしていますので、みなさんと直接意見が交換できるような場所設定をしたい思いで、このような場所にさせていただきました。今日の大きな流れですが、このあと、『フィールド・ノート』が機関誌として位置づけられているフィールド・ミュージアムの活動についての説明。それから、『フィールド・ノート』がどのような過程でつくられているのかということを簡単にご紹介したうえで、先ほども紹介がありましたが、今日の発言者の方々にそれぞれの立場からご発言いただきます。その際に、みなさんからもいろんなご感想を聞きたいので発言が終わりましたら、どんどん感想でかまいませんので発言していただければと思います。間に1回休憩をとりますが、その休憩の際にはぜひ、うしろにある展示を見ていただければと思います。これは今日の日に備えて学生がつくったものです。テーブルの上にもあると思いますが、そこには製作者の名前、それからちょっとした思いですね、一言のコメントが書かれています。それからもうひとつ、『フィールド・ノート』だけではなくて、地域にはさまざまな小冊子、ミニコミ誌があります。『フィールド・ノート』以外にもそういった創刊が試みられてきました。そういった一連の資料もうしろに展示してありますので、ぜひお休みの時間にご覧いただければと思います。

最後にはみなさんから自由に発言していただきたいと思います。今日の大きなテーマは『フィールド・ノート』をこれから課題も含めて、未来に向けてどのような可能性があるか、課題も含めてみなさんと意見交換できればと思います。今日はよろしくお願いいたします。

これから始まりますが、その前に今日は本当にあたたかい交流をしていきたいと思いますので、参加者のみなさま、一言で構いません、名前だけでも構いませんので、自己紹介していただければと思います。よろしくお願いします。

当日は、実際に参加者のみなさまに自己紹介をしていただきました。
年報では割愛させていただきます。

教室のうしろの展示①

教室のうしろの展示②

フィールド・ミュージアムについて

本学初等教育学科教授　坂田　有紀子

北　垣：　みなさん、どうもありがとうございました。このメンバーでフォーラムを開催、進行させていただきます。次に、『フィールド・ノート』がフィールド・ミュージアム部門、地域交流研究センターのなかの部門の一つなのですが、そのなかの機関誌という位置づけで発行しております。フィールド・ミュージアムっていうのは、いったい何なのかっていう概略を、今日は責任者である坂田の方から説明していただきたいと思います。

坂　田：　すみません。マイクがないと緊張してしゃべれないのでマイクを使わせていただきます。責任者ということで、北垣さんから「フィールド・ミュージアムについてしゃべりなさい」と言われまして、人前でしゃべるのが苦手なんですけれども、僭越ながらフィールド・ミュージアムとはどういうものかということを、みなさまの前でお話ししたいと思います。それで、フィールド・ミュージアムとはどういうものか、みなさん、もちろんよくご存じの方もいっぱいいらっしゃると思うのですが、わたしがフィールド・ミュージアムにかかわるようになって、たぶん6、7年ぐらいになるんですけれども、フィールド・ミュージアムってなんだろうってずっと考えていました。最近、ようやく少しずつわかってきたんですけれども、私の解釈しているフィールド・ミュージアム、もちろんそのフィールド・ミュージアムは決まったものではなくて、おそらく人それぞれでもっているイメージがあると思うんですけれども、とりあえずわたしと部門で共有していると思われるフィールド・ミュージアムとはどういうものかっていうことをお話したいと思います。

フィールド・ミュージアム、この和製英語みたいなものを直訳すると、「野外博物館」とか「自然博物館」ていう意味になります。その意味も野外で自然のはたらきや生きものの生態を学ぶというふうに一般的には考えられています。ですから、取り扱うジャンルは、「自然」になるわけです。「自然」を取り扱ったものが多いわけです。それに対して、都留のフィールド・ミュージアムの特徴はどういったところにあるかと言いますと、これはみなさん『フィールド・ノート』を読んでいるとお感じになっていると思うんですが、自然だけではなく、地域に暮らす人々の昔ながらの暮らしの知恵とか技とかそういう地域の生きた文化とかそれから歴史、それらを含めて地域全体が生きた博物館であると、そこからいろんなことを学んでいきましょう、という考え方でやっています。人の暮らしのあり方、それから自然と人との関係について謙虚に学んでいこう、そういう姿勢でわたしたちはやっているつもりです。これが最大の特徴です。簡単にこれまでどういうふうにフィールド・ミュージアムが歩んできたかっていうのをお話しします。

フィールド・ミュージアムは、本学の名誉教授である今泉吉晴先生が提唱、実践してこられ、北垣さんをはじめ、多くの学生のみなさん、それから地域の方々がかかわって実践してこられた活動で、30年の長い歴史があります。そういう点では、おそらく元祖フィールド・ミュージアム、これは都留発祥と言ってもいいのではないか

と思っております。その内容が、ムササビの観察会からはじまり、ムササビの保護活動、エンカウンタースペースという今泉先生と北垣さんがずっと提唱・実践してこられたエンカウンタースペースを用いた本物の動物たちと触れ合う空間というものを使ってみんなで動物を観察するとか、ビオトープとか、地域の自然観察会とか、ということを展開してきています。こういうものを通して本物の動物たちとの出会いを楽しもうという、そこからいろんなこと、感じたことをみんなで共有し、交流を深めていく実践です。自然についてだけではなく、人と自然の関係について学ぶのですが、スタート当初はこうでした。それから、『フィールド・ノート』の活動が活発になるにつれて、自然だけではなく、地域にある人の暮らし、文化歴史というものもだんだん領域のなかに含まれてきまして、現在は地域全体が学びの宝庫という考え方のもと、フィールド・ミュージアム活動を行なっております。そのなかの一環として『フィールド・ノート』はあるんですが、実は一環ではなくて、『フィールド・ノート』っていうのは、このフィールド・ミュージアムの考え方や活動を包括するひとつの媒体であり、一部であり、かつすべてである、そういう位置づけになっているんじゃないかと考えています。フィールド・ミュージアム活動は、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、元学長で、非常に高名な教育学者でいらっしゃる大田堯先生が28年ぐらい前に提唱されました。「都留地域博物館構想」と偶然、非常に一致しています。大田先生は埼玉の方でフィールド・ミュージアム構想を立ち上げて実践されていらっしゃいます。最近は、埼玉のフィールド・ミュージアムと都留のフィールド・ミュージアムで交流も行なわれております。それから、全国的にも都留のフィールド・ミュージアム活動というのは非常に高く評価されておりまして、学生のみなさんはあまり感じないかもしれませんが、フィールド・ミュージアム、それから、『フィールド・ノート』は日本のなかでも非常に地域から学ぶ、生きた博物館活動ということで注目を浴びていることをお伝えしておきたいと思います。自然から学び、自然と人が共存する地域社会の探究をフィールド・ミュージアムは目指しています。堅苦しく言うと、こうなるのですが、地域の皆さんと一緒に活動を実践していかないと意味がないと思います。意味がないというより、地域の人々から学ぶことの方がかえって我々は多く、今日も参加している方から、大月の岩殿山のふもとにニホンカモシカがいるという情報をいただきました。そうやって、我々大学の教員の狭い知識の範囲ではとてもカバーできないことを地域のみなさまから本当に生活や自然に根ざした、根付いた生の情報を教えていただき、我々も学ぶことが非常に多いです。その点で、こうやってみなさんと一緒に今日は近い距離で忌憚なくお話ができることをとてもうれしく思いますし、みなさんにも楽しんでいただければと思います。

それでは、これぐらいでよろしいでしょうか？わたくしの方から「フィールド・ミュージアムとはどういうものか？」っていうことをお話させていただきました。ありがとうございました。（会場　拍手）

『フィールド・ノート』ができるまで

北　垣：　はい、どうもありがとうございました。次は『フィールド・ノート』っていうものがどうやって、どういう過程を経てつくられているのかっていう、制作の一部をみなさんにちょっとご紹介しようと思います。というのは、『フィールド・ノート』は今現在年4回発行されているんですが、非常に多くの時間を学生のみなさん、地域のみなさんが使って、1冊の冊子をつくり上げていきます。本来ならば年何回も出したいところですが、1回1回が非常に時間のかかる作業を通してつくられています。それでは、ご紹介したいと思います。

先ほど説明がありましたが、この冊子をつくるという作業がフィールド・ミュージアムと言いますか、博物館活動そのものに近いと言いますか、そういったものの要素を含んでいるということを今日ご紹介したいと思います。

『フィールド・ノート』は、地域交流研究センターの発足から10年、ほぼ歩みをともにしてきたとご紹介しました。実は、その前から試みをしていまして、ちょっと見えにくいのですが、これは授業で使っていた資料の一つです。2000年に発行されたものですが、『フィールド・ノート』という言葉のもとはここから来ています。生物学の世界では野帳とかですね、いろいろ言われます。これは正式な言葉ではないんですが、それを使いながら、野外で経験したこと、あるいは感じたこと、それらは忘れやすいのでとにかく記録を取って、そして、授業で学生のみなさんと共有しようという思いでつくりました。そのときには地域の自然をとにかく丁寧に観察して、記録をして、いろんな人とそれを共有しようという思いでつくり始めたんですが、今の『フィールド・ノート』はこれを大きく越えていくという形になっています。当初から、現在のような『フィールド・ノート』を想定して活動していたわけではなくて、いろいろな人に支えられながら今の形があることになります。学生のみなさんとそれから市民のみなさんにも加わっていただけるようになりました。そんな編集のところを特徴としています。そして、現在は年4回、各400部を発行していることになります。これは大学からきちんと予算が付いている機関誌としての活動です。ただし、わたしたちは自主的に、また自発的に活動することを保障されていまして、そのなかで大学生たちは自分が思ったような表現をそのなかでしていこうという取り組みをしています。地域の方々からいろんなことを教わります。これが取材の風景のひとコマですけれども、この人に聞くと「おもしろいんじゃないか」とかですね、あるいは取材はできないのだけれども、こういう人に聞くと「結構いいかもしれないよ」という紹介を受けたりしながら、その人の許へ直接伺って、取材を繰り返していきます。あくまで取材のテーマは学生のみなさんの個人の関心を中心に組み立てていきます。ですから最初からうまくいくこともあれば、うまくいかないことも多々あります。取材をして帰ってくると、今度はみんなで取材の内容の報告や課題について検討をする時間があります。週1回夕方に設けている時間に行なうのですけれども、編集会議を行ないながら、はたして自分のやってきた経験というものがうまく伝わるかどうか、あるいは課題は何かといったこと、その課題を解決するにはどうしたらいいかを相談していきます。それを誌面につくっていくわけですが、いきなり誌面ができるわけではありません。誌面のなかに織り込んで

いくんですけれども、大切なのはそのなかにある内容です。学校に出すレポートとは違って、人に読んでいただくことを想定しますので、学生はここで非常に苦労をしてきます。これは校正をしている作業ですが、校正は全員で行ないます。ですから1回自分が出してしまうと、いろんな人の感想や意見がここのなかに書き込まれていきます。ほぼ原形をとどめないくらいの書き込みがここで出されます。おそらくこれが一番、編集作業のなかで時間がかかり、大変な作業になっているんだと思います。わたしも、そばでずっと見ているんですが、ここにかける時間が一番長い時間となります。これは学生の原稿ですけれども、こういうふうに赤が入っています。これは一人ではなくて、たくさんの人の手がここで入っています。決して本人の文章を否定したり、あるいは書き換えたりというものではなくて、「ここがいい」とか、「ここ、ちょっとわからない」とか、そういった素直な感想を書き込んでいきます。自分が最初書いたものがいいと思っても、人から読んでもらうと、全く伝わらないことを最初に感じる瞬間が誰にもあります。そして、その原稿をもとに誌面をつくっていくんですが、何回繰り返してもこういうふうな赤が入っていきます。ここが本当に苦しむ場面ですけれども、このあと誌面が大きく変わっていきます。こういうふうになるんです。これが完成なんですが、前につくった誌面とは大きく内容が異なっていきます。一番右上のところに、ちょっと見えにくいとは思うんですが、「校正」という言葉が入っていると思います。そこに「13」という言葉が入っていると思うんですが、13回繰り返したという回数になります。13回繰り返し、いよいよ完成へこぎ着けたというような形で完成にもっていきます。これは今日来ている今年入ったばかりの別符さんの原稿ですが、別符さん、これは相当苦しくなかったですか。

別　符：　すごくしんどかったです。（会場　笑）

北　垣：　どういうところが大変だったか、教えていただけますか。

別　符：　この記事はわたしが初めて書いたもので、初めての取材でもあったんですけれど、なんというか、自分の経験したことをそのまま、思った感情がそこにあるのはわかるんですけど、それを言葉にするとき、ぴったりくる言葉を考えるのがすごい難しくって。人に伝わる文章はこういうものなんだなとかそういう「はっ」とさせられることがすごい多くて、書きたい言葉が出てこなくてもどかしい感じがすごい強くて、ひとまず、しんどかったです。

北　垣：　完成したときはいかがでしたか。

別　符：　なんか、完成したんだっていう喜びよりはやっとここまでこぎ着けたんだなとか、放心状態に近いというか、そういう感じの気持ちの方が強かったです。

北　垣：　はい、ありがとうございます。だいたいこんな過程を経て、完成へとつながります。みなさんの前のテーブルの上に置かれている原稿の一つ一つが長い時間をかけて、繰り返し、繰り返しみんなの目を通して書き直しをされたうえで、完成しているということになります。それが終わると今度は終わりではなくて、読者のみなさんに届ける作業をしていきます。読者の方々に届けて初めてそこで一連の編集が終わるということになります。みなさんからもあたたかい言葉をたくさんいただくのですが、そのあたたかい言葉が、次の編集に向けての大きな支えになっていると、わたしはそばにいて感じています。こういうふうに誌面を通してだけの活動だけではなくて、直接市民の方々と一緒にものを見たり、あるいは感じたり、そういったことをメインにもってくる活動もしています。たとえば、自然観察会もそうですね。まだスタートして間もないのですけれども、地域の方々と自然を一緒に見る、あるいは観察する。それを通して地域の方々から学ぶ。また、それを『フィールド・ノ

ート』に表現していく作業もしています。『フィールド・ノート』のメンバーはなぜか農作業が大好きで、地域に出ては農家の方々といろんな作業を一緒にしていますが、そういった方々との交流を通していろいろな情報を届けて、そこの経験をまた『フィールド・ノート』に書く。そして、みなさんに届ける。という作業をしています。そういった成果を冊子だけではなくて、このような駅での展示物にかえて、みなさんに知っていただくという活動も始めたところです。これは富士急行線の都留文科大学前駅の駅舎ですけれども、お帰りの際に立ち寄ることがありましたら、ぜひご覧いただければと思います。こういった一連の作業は先ほどフィールド・ミュージアムという言葉がありましたが、まさに博物館活動そのものと言いますか、そういった要素をたくさん含んでいることがわかります。お亡くなりになりましたけれども、平塚の博物館に勤めてらっしゃった、浜口さんという方が学芸員の仕事というのはこのような分野があるのか、ということを書いておられます。一つは調査、研究して資料を集める。そして、資料を整理して保存する。それを展示する。教育普及の活動をして、市民のみなさんと一緒に何かをつくりあげていく。あるいは地域の魅力を引き出していく。再発見するという仕事ですね。それから出版活動。そういった広報活動、ご覧になってわかるように、こういった活動の一つ一つがフィールド・ミュージアムのなかでは、『フィールド・ノート』に言葉として記憶し、それをみなさんに伝える、またみなさんから返していただいたものを一緒につくりあげていく学芸員の仕事を多分に含んでいると、わたしは感じています。今日はみなさんからいろんなことを伺いながら、今後こういった活動をどういうふうに展開し、広げて、実り豊かなものにしていけばいいかということを考えていきたいと思います。ありがとうございました。（会場　拍手）

第9回地域交流研究フォーラム　懇話会

北　垣：　それでは、発言者の方に登壇していただいて、それぞれの立場で『フィールド・ノート』について語っていただこうと思います。最初は、1人5分くらいですけれども、これまでの『フィールド・ノート』の読者として、あるいはそれぞれの立場としてどういうふうに感じていらっしゃるのかを、簡単に話していただこうと思います。それでは、発言者の方、申し訳ありませんが前の方にお願いいたします。（会場　拍手）

今日は、発言者の方々に無理を申しまして、それぞれの立場でご発言いただこうと思いますが、それぞれの発言者の方が発言されたあとに、みなさんの方から何か聞きたい、これが聞きたいということがありましたら、自由に発言していただければと思いますので、よろしくお願いします。この発言が終わりましたら、1回休憩をとりたいと思います。それではご紹介します。最初に今井尚さんをご紹介します。先ほどの自己紹介のところでありましたけれども、最初に一緒に『フィールド・ノート』を立ち上げたと言いますか、やってみようと、全く先のことは読めずに、つくってみようと一緒に始めました。あのときは教室が非常に狭かったですね。

今　井：　そうですね。

北　垣：　機械はどんなものを使ってました？

今　井：　当時はiMac（アイマック）*1という、初代のiMacが出たばっかりで、ようやくパソコンを使ってこういった作業が一般、常識的な値段でできるようになってきた最初の時代だったので、本当に試行錯誤でした。

北　垣：　ありがとうございます。そういう環境のなかで最初は立ち上げたのですけれども、非常に苦労もあったと思います。手探りの状態でいろいろ試行錯誤しながら進めたのですが、そのときの思いも含めてちょっと語っていただこうと思います。よろしくお願いします。

今　井：　ご紹介いただきました、今井尚と申します。よろしくお願いいたします。わたしは2002年に比較文化学科を卒業した卒業生です。卒業が2002年ということで、『フィールド・ノート』は今年で10年ですから、わたしがこの雑誌にかかわったのは本当に最初の立ち上げのときだけであって、そのあとは今いらっしゃる編集部のみなさんがこれを育てて、ここまで完成させていただいたという思いです。ですので、卒業以来毎号届くのを見る、毎回封筒を開けるたびに少しずつバージョンアップして、みなさんお感じになられているかもしれませんが、「今回はフルカラーになったんだ」とか、毎回その驚きがすごく楽しくて、今はもう売っている雑誌とそんなに変わらないクオリティーになっていて、本当に驚くばかりです。わたしは今、朝日新聞の子ども向けの新聞、

『朝日小学生新聞』という新聞をつくっていて、記者をしております。取材をしてものを書く仕事がやりたいなと思っていて、『フィールド・ノート』での活動は一番基礎的なところを学んだ経験であったなと思っています。学生のみなさんに、ぜひ伝えたいと思っていたのは、この活動がとってもいろいろな要素を含んでいて、もし編集とか、記者になりたい、ものを書く仕事に就きたいと思ってらっしゃる方がいたとしたら、すごく実践的な経験だと思うんです。ものを書きたいとか、ものを書く仕事に就かなくても社会に出ると、会社のなかでいろいろな発表をしなければいけなかったり、プレゼンをしなければいけなかったりという経験がすごくいっぱい出てくると思います。自分のアイデアをわかりやすく、人にわかるような形で提出する機会が本当に多くなってくるので、そういう能力を身に付けるには実際につくるしかないと思うんですね。それを毎回、年4回という課題があるわけですので、それに向かってつくっていく、この繰り返しの作業がいかに実践的かっていうのは本当に感じました。自分のころ、わたしがかかわっていたころは、うしろのテーブルの一番左の辺りにあるわら半紙でできたような雑誌だったんです。どうつくっていいのかわからないので、毎回「どうしよう」っていうことの繰り返しでした。北垣先生も含め、当時のメンバー数名もコンピューターの使い方もわからないし、どう写真を貼り付けたらいいのかもわからない状態で。ただ、それがやっていておもしろかったんですけれども、どうやったら売ってる雑誌みたいなものがつくれるんだろうか、そしたらもっと本格的になるのにっていうことをですね。当時は予算もありませんでしたので、カラー写真を載せたいと思ったら、限られた予算のなかでどこから出していくかとかですね。そういうアイデアをみんなで出し合うという感覚を選んだんじゃないかなと思います。今こうやってコンピューターになって、もっと効果的にやれるのではないかと毎回工夫されていると思うんです。そういうふうな試行錯誤を繰り返すということが非常に大切になってくると思います。わたしは卒業したあとに、ものを書く仕事に就きたいなと思っていました。ですが、当時は就職氷河期と呼ばれていて、就職することはすぐにできなかったんです。ただ、就職氷河期だということを逆手に取って、就職できなかったので、「今大変な時代だよね。」と、周りは言ってくれましたのでそれをいいことに、自分でも『フィールド・ノート』のような活動をずっと続けたいって、自分でも雑誌をつくるしかないなと思いました。それで、自分は自然、生きものよりは旅とか冒険が好きだったので、『旅と冒険』という雑誌を自分で卒業後もつくっていました。今、うしろに座っていらっしゃる西さんとか、西丸さんもOBになっても自分の媒体を立ち上げてつくり続けていて、そちらも拝読させていただいているのですが、継続して、関連する雑誌社の仕事に最初就くことができました。その後、転職をして今は新聞という仕事をしていますけれども、やっていることは基本的に変わらないと思っています。ですので、形は変われども、この活動の延長線に社会のものを人にプレゼンする力につながるのだろうなと思っています。ごめんなさい。まとまらなくって。申し訳なかったです。（会場　拍手）

北　垣：　ありがとうございました。それでは、何か質問等はありますか？手短によろしくお願いいたします。よろしいでしょうか。あとに自由発言の時間もありますので、そのときに質問、もしありましたらよろしくお願いします。

それでは次ですが、前田恵子さんです。前田恵子さんは卒業が2007年で、途中で2年間、一緒に編集の作業をしました。途中で編集長にもなりましたが、本当に朝から晩まで授業のないときは編集室で作業している姿がわたしには非常に印象に強く残っております。今日は東京から来ていただきました。よろしくお願いします。

前　田：　ご紹介に預かりました、初等教育学科卒業の前田と申します。わたしは2004年から2007年で、2年生のときに紹介を受けました。そのとき、木造40年くらいの共同のアパートに住んでいて、南京錠の鍵（カギ）だったのでいないということができず、ドアを開けたら、突然先輩から「とりあえず明日この場所に来い」と言われて行ったら、そのまま入部という形になっていて、気づいたらそのまま2年間いたという、今井さんとは対照的に「何で入ったの？」、そういう動機も何もないまま、ただ興味がありそうで、なんとなくそこにいたら、居心地がよくてずっといた感じです。わたしが入ったときは冊子を200円ぐらいで売っていて、自分たちで製本しているようなときから、卒業するときにようやく地域交流研究センターフィールド・ミュージアム部門の機関誌として、文部科学省の支援をいただく形になるところまで、成長する過程をずっと一緒にやってきました。わたしが編集部としてやってきた当時のエピソードをご紹介すると、当時、まだ手探りでやっているところだったので、先ほど北垣先生からの紹介のなかにもありましたように、赤入れ原稿だとかっていう。わたしが3年生、編集長になったときにどっと20名ぐらい入ってきて、全員で編集部員が40名ぐらいになったときでした。なので、赤入れ原稿も多ければ、冊子をそもそもどういうふうにやるかというのが全然決まらなくて、年10回の発行だったんですけど、この特集は誰が担当するかという企画案会議をやったりとか、「次何やろうか」、「次何やろうか」っていうことをみんなで出し合っていくなかで、あっという間に4年間過ぎてしまったので、こういうエピソードがありましたという紹介をするより、1号1号毎回出していくのに必死だったという印象だけが残っています。当時のことを振り返って、わたしが気づいた、三つの視点を挙げていくと、当時の学生として何があったかというと、実体験として何かを体験するとか、何か自分で足を運ぶっていうことの重要さを『フィールド・ノート』から学んだなと思います。わたしは会社勤めをしているんですけれども、会社に入ると資料だけですべてを、企画をつくって出していくことが増えるんです。けれども、学生のときに4年間じっくり人の話を聞いて、都留市民の方にインタビューの申し込みをさせていただいて、話を聞いて、体験できることは自分でもやってみる、その繰り返しをひたすらやっていました。実際に体験したり、伺ってみると、違うことは本当にしょっちゅうで、その気づきが『フィールド・ノート』にしてまとめていく原動力になっていたと思います。その延長上にあるんですが、都留市民としてそのとき住んでいて、『フィールド・ノート』にかかわったからこそ、常にそういうのがすごく楽しかったんです。都留に来て、初等教育学科のみんなからよく聞いていたことは「都留って何もないよね」って言葉がよく出ました。今でもそう思っている学生はいるんじゃないかなと思います。ただ、その「何もない」っていうのは、簡単に言えば商業施設がないだけの話で、人に会えば、その人にはエピソードがありますし、自然を見ればその自然にも営みがあるわけで、そういうところはただ見ただけではなかなか気づかない。その気づくきっかけをくれたのが『フィールド・ノート』だったと思います。三点目に編集者としてまとめる、格好良く言うと、編集者として一つのものをつくっていく立場としてやってみてよかったなと非常に思います。まとめて都留市内の人にも都留市以外に住んでいる人にも、なんとか都留の、わたしの気づいたおもしろさを知って欲しいって思うと、どういう文章にするかっていうのを7人で見ます。その練るところがさっきの赤入れ原稿になっていくんだと思うんですけど、まとめ

ていく作業があったからこそ、一つ自分がおもしろいと思ったことが、本当にそれはどういう角度だったからかっていうのを客観的に検証し直す作業が入ります。これは非常にわたしが仕事をやっていくうえでも大事で、いい経験をさせていただいたなと非常に感じていますし、アーカイブとして残る意味でもそれはどういうことでおもしろいのかを確かめていくので、非常に価値ある活動だったなと、今、振り返って思います。『フィールド・ノート』の今後を考えると、本当にわたしもただ必死で、ただ楽しくて、4年間ただただ続けてたということはあるんですが、わたしの場合は先に『フィールド・ノート』という機会があって、その機会で何ができるかということを模索しながらやった4年間でした。その当時にかかわっていただいた都留市民のみなさんや、そのときにかかわってた編集部員のみんなのいろんな意見の交換があったからこそ、その当時の形ができたと思っているので、今の学生さんとか、今『フィールド・ノート』にかかわってくださるみなさまに、いろんな意見のだし合いがあって、今何ができるのかなって、発見してください。発見をわたしも毎月楽しみにしているので、ぜひ今後もそういう模索ですとか試行錯誤を繰り返していくような雑誌になっていけばなっていうふうに今、一読者として思っています。以上です。ありがとうございました。（会場　拍手）

北　垣：　ありがとうございました。みなさんの手元に小さな冊子があると思います。資料になってますが、このような冊子です。このなかにある資料はすべて今日登壇してもらう方々に関連する資料が入っておりますので、話を伺いながら見ていただければと思います。前田さんどうもありがとうございました。

それでは、前澤さんです。前澤さんは今井さん、それから前田さん、そして前澤さんと編集作業に実際に携わった方々です。現役で今携わって編集長をしております。前澤さんの編集長としての立場から『フィールド・ノート』の魅力、あるいは活動の感想について語っていただければと思います。よろしくお願いします。

前　澤：　ご紹介に預かりました、前澤です。よろしくお願いします。何を言おうか直前まで考えていたんですけど、なかなかまとまっていない状況です。まず、わたしが編集部に入ったきっかけですけれども、今は無いんですけど、図書館の方に『フィールド・ノート』の展示がしてありまして、そこの大きなポスターに「地域の方との交流や編集に興味はありませんか？」っていうキャッチフレーズの言葉にひかれて編集部に自分から足を運びました。それから、入学当初から現在までかかわっていまして、かかわった最初の頃は『富士五湖の絵馬と人』なんですけども、今実際に活動をして思うことは、やっぱ最初の活動をするときに自分で自発的に何かをするということはなかなか高校のときに無かったことなんですね。初めて大学に来たときに都留に遊び場所が無いと、わたしは愕然としてしまいまして、「これからわたしはここで4年間やっていけるのか」と、よくみなさん、大学を卒業された方で、「都留は第二の故郷だ」と自認される方々がよくおりまして、わたしも本当に故郷だって、たった4年間で思えるのかって不安がありました。でもそのなかで『フィールド・ノート』と出会うことができて、自分で記事を書くという作業のなかに都留とのかかわりとか、必然的に持つんですね。そのときに、とりあえず歩いてみようみたいな感じで。そのときはすごく編集部の先輩に助けられまして、そこにいる西丸さんやそちらの西さんにも、いろんなアドバイスをいただいて都留を深めてきました。一番感じたのは『フィールド・ノート』は人との交流があるなと思っていまして、こ

の人との交流はもちろん、都留市民の方々だけでなく、編集部員のつながりもすごい強くて、都留市民の方との交流は、わたしは今、おもに人にお話を聞いて、それに関する取材記事を書いているんですけれども、いろんな人がいるなって、当たり前なんですけれども、すごい思います。普段歩いているなかで、この人どんな人なんだろうっていうことはなかなか自分で自ら進んで通行人に聞くわけではないので、やっぱいろんな人に紹介していただくんですけども、全然わたしの知らないところで陶芸をされている方がいるとか、自分の趣味で木を切って、木から何かをつくる人がいるとか、自分の趣味で、しかも都留だからこそできる環境があるという方が多くいると思っています。わたしは、横に座っている遠藤先生と個人的にかかわりがあるんですけども、やっぱり『フィールド・ノート』に入って紹介をしていただいたからこそ、出会えたかなと思っていて、今まで全部で9回ほど記事を書いているんですけども、その一つ一つの記事に何かしら人とのかかわりがあって、その上で成り立っているっていうことを毎回毎回、毎号毎号書きながら実感をしています。そのなかで編集部員とのかかわりがすごい大きなウェートを占めているんですけれども、副編集長として今3人体制でやっているんですけれども、やっぱいろんな人の記事を読んで、それで何かしら赤入れをしなきゃいけないというのが、読んでる側としても、読んでる方が一読者としての立場で読んで赤入れをしているんですけれども、その赤入れも、どう相手に伝わるんだろう、どう相手に言えばこの赤入れが伝わるんだろうかっていうことを考えながら、わたしたちは赤入れをしています。自分たちの赤入れがわからないときは、直接聞いて話をしています。わたしの個人的な話ですけども、先ほど紹介で別符さんの記事がありました。13回直したものですけれども、わたしは最高で50回ほど直しをしまして、ちょうど今、そちらの真ん中の奥の方に飾ってあるんですけど、「ねこバス」についてわたしが書いた記事ですけども、1年ぶりに書きました。このときに、最後のまとめがどうしてもわからなくて、1ヶ月の間に50回ほど書いたんです。毎日、毎日、3回ほど書き直したものを出しては赤を入れられて、出しては赤を入れられて、なかなか赤が減らなくて、家へ帰っても半分泣きながら記事を書いているときもありました。そのなかでも、わたしが落ち込んでいるときでも、その赤を入れた先輩、赤を入れたのは先輩が多かったんですけれども、その先輩から、「この赤はこういう意味だから、もっと前澤さんならがんばれるよ」みたいな、応援のなかの赤入れだったので励ましになって、それでようやく書ききったっていう達成感がすごくあります。やっぱり、赤入れはつらいんですけど、入れる側も何て言っていいかわからないからつらいし、もらう側も赤入れを見るのが怖いんですよね。それは今も変わらないんですけども、赤入れの苦しさを乗り越えたからこそ、改めて人とのかかわりを自分なりにどう解釈できたのかっていうのがすごい、自分のなかの芯の奥の底まで突き詰めることができたっていう思いがあって、やっぱ記事を書ききって、それを実際に手にとって本になったのを見たときに、「わたしここまでできたんだ」って、そういう達成感がすごい、毎号毎号あります。なので、楽しいことと苦しいこと、楽しいことだけじゃなくて、苦しいことも経て、わたしたちは今活動をしているんだなと代表して、お話をさせていただきました。以上です。（会場　拍手）

北　垣：　ありがとうございました。時間が迫ってますので、みなさんが発言していただいたあとに会場から自由に発言していただく時間をとりますので、その際にぜひ、いろいろみなさんからご意見、ご感想いただければと思います。ありがとうございました。

それでは、遠藤静江さんですが、実は前澤さんの今の話にありましたが、遠藤静江

さんにインタビューをして、それをずっと記事にしています。遠藤先生の人柄に惹かれて、前澤さんは「詩友会」に入ったんですよね。「詩友会」にも入る。そういうようなつながりを今も続けていらっしゃいます。そのインタビューを受けてくださった遠藤静江さんに今度は読者の立場から語っていただきたいと思います。よろしくお願いします。

遠　藤：　ただいまご紹介をいただきました、遠藤です。わたしはこの会場へ入ってきて、ふっとここ（会場内ホワイトボード前の机）を見たら、わたしの名前がこの辺（遠藤さんが立っている場所）にあって、「えっ、今日は車座になってみんなでおしゃべりするんだと思ったら、はぁ～っ、困った、前に座るの」って今はすごい緊張しています。だからしゃべれるかどうかわかりません。前澤さんのようにしゃべれないかもしれません。わたしは『フィールド・ノート』を読ませていただいたとき、『フィールド・ノート』っていうのは、わたしがいつも見過ごして、そこにあっても見ていない、通り抜けている。その通り抜けているもの、言うならば、わたしにとっては都留の水脈。水脈を探し当てて、それをすくい上げて、みんなに見せてくれている、それが『フィールド・ノート』だと思いました。ぼんやりしているわたしはまったくそんな感じがしました。一つずつ、自然のこと、生活のこと、社会のこと、歴史、わたしがみんな見落としていたもので、『フィールド・ノート』に出ているんですよね。そして、わたしが都留市民として、もう1回考えさせてくれたり、思い出させてくれたり、こういろいろなものをわたしに与えてくれてるんです。すばらしいなあと思います。先ほど、『フィールド・ノート』ができあがるまでの工程をスライドで見せていただいて、大変ですよね、この前取材に深澤さんが見えたとき、「あの手のところ（大学周辺）からわたしのところまでどのくらいかかって歩いてくる？」って聞いたら、「30分」。「うそ言ってるわよ～、30分じゃないのよ、50分。」。夜にね、取材にそんなトコトコ歩いてね、もうそれだけでね、驚いてます。すごいなぁ～と思います。そして、長く続けるっていうことは大変なことです。ちょっと自慢します。わたしの都留詩友会も39年になります。今、発行部数は400部で、1年に6回出しています。そして、1回の印刷が6000枚です。わたしもしてますけどね。先ほど赤を入れる話が出ました。わたしの会には学生さんが、都留大生が9人います。赤をみんなでぐるぐる、ぐるぐる、入れるんですが、これでいいと思っても、印刷すれば、そこに間違いがあるんですよね。ですから、先ほど13回校正？なさったって言うけどね、その御苦労は本当に大変で、この『フィールド・ノート』が誕生したときは、本当に、誕生したらきっと、みんな頬ずりしてやりたいんじゃないかなと思う。「うわぁ～っ」っていう感じがするんじゃないかと思うのね。そのぐらいの御苦労を背負われていると思います。取材に見えたときに、取材されてるときは、「だいたいこんなお話を聞きたいです。」って言うから、「わたしはこんなお話を聞きたいです」って言うと、すっごくおしゃべりなんです。ものすごくしゃべるんです。すごくサービス精神旺盛で、すぐ行けばいいのに横道にばっか逸れてしまうんです。だから、それが活字になったときには驚きました。だいたい、わたしの話し言葉ってすごいんですよね。でたらめで。いやぁ～、わたしね、こう整理してね、いわゆる標準語できれいに書いてくれると思ったら、言ったとおり、主語がなかったり、助詞がなかったり、言葉がね、こんなしゃべり方いつもしてるのかしらって反省させられました。次に取材があったときに少し丁寧に考えながらしたいと思います。ですから、そんな具合にで

すから、実際に取材されて『フィールド・ノート』に載ったときに、はたして読者のみなさんにわたしの思ってることが伝えられるかなぁ～、という不安はものすごくあります。あとでこの『フィールド・ノート』が出るから、わたしもっとこういうこと言えばよかった、もっとこうやって話せばよかったことがいっぱいなんですよね。どうしても横道に逸れてしまって。だから今度取材するときは、箇条書きにこれ、これ、ここから逸れないようにって。言ってくだされば、なるべくそれに沿うようにお話したいと思います。ちょっと、わたくし的なことですがね、こないだの前澤さんの取材は「どうして染め物を始めたんですか？」って言うんです。ところがね、お勉強じゃないんですよね、わたしはね、行動から起こすんです。行動から発展するタイプです。頭の方は空っぽなんです。体動かしてそこから発展してくるタイプなんですよね。だから、『フィールド・ノート』のみなさんは、そういうていではね、みなさんはたまたまこうじゃないけどね、行動するっていうのはすごいと思います。自分の足でね、全部行動して捕まえてくる、それが一番力なんですよ。わたしそう思います。80年生きてきました。そしてわかったことは、やっぱり自分が自主的に、前澤さんが言ったように動いて、そして獲得していく。そこから発展していく、ということをつくづく思いました。今日の発見のもう一つは、びっくりしました。前澤さんがこんなにしゃべるとは。（会場　笑）

本当に再発見です。詩友会に来たときは、もっとおしとやかで、だからとうとうとしゃべるのを見てね、うわぁ、大発見。あぁ、今日来てよかった。つくづく思います。どうぞ、これからもみなさん、よろしくお願いいたします。（会場　拍手）

北　垣：　どうもありがとうございました。次は青池さんです。青池さんとはですね、わたし非常に長いお付き合いをさせていただいていて、『フィールド・ノート』を出したときはなかなか周りの評判というのはよくなくて、と言いますか、まったく反応がなくてですね、そのなかで唯一、「いいからがんばれな！」っていうふうに支えてくださったのが、青池さんでした。青池さんの方から一読者としての立場から語っていただければと思います。よろしくお願いします。

青　池：　青池です。遠藤さんの次にしゃべらせないでください。わたしは声は小さいし、お話もうまくないので、考えてきたことが全部飛んでしまって、さっき10年、正確には11年前に『フィールド・ノート』が0号から始まって、読ませていただいて、とても「がんばれな！」とまで言わなくて、「よかったよ、よかったよ」ってお祝いをしたんです。というのは、『フィールド・ノート』とは10年来の付き合いですが、わたしは『フィールド・ノート』が創刊されて2年後には、都留文科大学事務局を離れています。ですので、大学を離れる前の2年間は事務局のスタッフの一員として、仲間意識で「よかったね」、だったんですが、この9年間は市民として『フィールド・ノート』とお付き合いをさせていただいています。『フィールド・ノート』10周年、実際には11年ですが、その前身も確かあったと思うんですね。先生が博物館学の講義をされていて、『フィールド・ミュージアム』じゃないんですけど、ペーパーを出されていて、準備号でも無いし、試作版でも無いし、さっきおっしゃったような経験があり、さらに、『フィールド・ノート』11年と言いますけれども、その前には20数年の都留のフィールド・ミュージアムの活動があるわけです。構想から始めれば、20数年の構想と実践があり、現在に至るまで30数年はあるわけなんです。2002年にわたしは大学にいたんじゃなくて、その30何年前から大学に勤めていました。歳を勘定しない

でくださいね。『フィールド・ノート』ができたとき、とってもうれしかったんです。それまでは「ムリネモ*2協議会」とか「ムササビと森を守る会」、自然を中心として地域との交流やら活動やらの実践があったわけですけれども、1987年に社会学科ができたのと同時に、図書館司書資格とか、社会教育主事資格とか、博物館学芸員資格の講座が生まれ、のちに北垣さんが博物館の講座を担当するようになったころに学生さんがまちに出て行って、実体験として地域の自然や人々とまじわりながら、授業の一環として始まったペーパーが『フィールド・ノート』の前身だっていうこともあります。20何年の思いが加わった『フィールド・ノート』なんです。冊子体と言っても、最初はわら半紙を折っただけのものであり、ホッチキスで留めて。だんだん予算が付いて、本格的な雑誌になったんですけれど、初期のころはわら半紙を折っただけのもので、それでもわたしはとってもうれしかった。初期のころの今井さんや前田さんが活躍していたころですけれども、北垣さんにお伝えした感想を3つ紹介させていただきます。一つは、フォーラムが始まる前に大学図書館へ行ってバックナンバーを見てきたんですけれども、2002年にできたとき、『月刊フィールド・ノート』、その下に「都留フィールド・ミュージアム」ってありました。奥付のところには、発行のところに「都留フィールド・ミュージアム」ってありました。創刊のころにはそれがありました。ところが、2年ぐらいしたら発行が、「都留文科大学フィールド・ミュージアム研究編集部」ってなってるのが何となく違和感があったんです。そのころはずっと「フィールド・ミュージアムの機関誌なんでしょ」と「機関誌って言葉をちゃんと誌面に入れて欲しい」というか、「入れるべきじゃないか」とか、結構強く言ったんです。それで、やっと載ったんです。機関誌であるということが載ったのが17号からです。2004年の1月、17号から載りました。それは表紙に載ったんじゃなくて、めくると、『フィールド・ノート』は都留文科大学フィールド・ミュージアム研究編集部の機関誌って書いてある。それがずぅっと続いて、表紙のここ（下線部）に載ったのが、1年前じゃないですか、先生。そこには都留文科大学地域交流研究センター、フィールド・ミュージアム部門機関誌ってなってるから、都留文科大学あるいは都留フィールド・ミュージアムの機関誌にしてください。って、また文句を言ってる。そういうのがありまして、言ってきたことは機関誌であることをもっと前に出して欲しい。もう一つは発行回数が月刊とか、年間10回とか11回じゃ多すぎるということ。もう一つは、うますぎるっていうんでしょうか、上手すぎる。わら半紙を折って出していたころから、本当にプロ並みの編集だったと思うんですが、あっという間にどんどん上手になって、ボリュームも増えていって、自然だけでなく、フィールド・ミュージアムの活動とともに地域のこととか、人とか、暮らしとか文化について取り上げるようになりました。回数が多すぎるっていうのは、今の4回でも大変だって言うのに10回出してたころはもっと大変だったと思うんですね。学生さんたちとは、西さんとか成瀬洋平さん*3とはお付き合いがあったんですが、他の編集部の学生さんとはあまりお付き合いがなかったんです。北垣さんや西さんや成瀬さんを見ていても、とっても忙しくて発行に追われてるって感じがありました。追われてるってことは丁寧につくるってことを時々構え

すぎるんじゃないかなって思うことがあったので、発行の回数が多すぎると言っていました。そしたら、いつの間にか発行が年4回になりました。それが2番目です。うますぎると言ったのは、本当に一つ一つの記事がおもしろくて読ませるし、先ほど遠藤先生のような大先輩が都留の知らなかったことに気付かされるというぐらいだから、わたしは知らないことだらけだったんだけれど、プロの記者が取材をして、『フィールド・ノート』に載せてるかと思うほどうまい。レイアウトも上手だし、文章も上手だし、学生っぽくないな、とかそういうような言い方で言ったんです。だから、機関誌であることをもっと出してください。発行回数が多すぎる。うますぎる。このような感想を北垣さんや今泉先生にしていたことを話題として提供したいと思います。現在ですが、わたしは大学を離れてからの9年間、市内に勤めていますが、発行されるたびに先生が届けてくださるし、市民の方にも見えるような場所に展示してあって、読んでいるんですが、実は最近は熱心な読者ではなくなっているんです。仕事が忙しいというのは言い訳ですが、いつでも読めるという安心感があるというのもあるんですけど、それで、現在の到達点を十分に理解しているとは言えないかもしれないので、このあと討議に参加するときに、見当違いのことを言ってしまうかもしれませんが、最近のかかわりというのは、1年前から学生さんが市民をインタビューするのではなくって、前にもあったんですけど、市民自身が編集するようなページがあってもいいんじゃないかということで、『フィールド・ミュージアムのたのしみ』という欄をお借りいたしまして、今回で4回目になるのですが、最初の2回は1年ぐらいわたしが都留にあった山本書店のことを書きました。その次に、昔谷村に映画館が3つもあった時代の映画館のことを書いてくださる方を探して、お願いして書きました。映画館がどんなだったかってことを、わたしの友達に書いてもらう、誰に書いていただくか、どんなテーマで書いていただくかっていうこと、学生さんが読んだときに参考になるような文献を探して、典拠を付けるというような、そういうところも自由にやらせていただいてやっているんですけど、それはなぜかって言うと、やっぱりこれはフィールド・ミュージアム、現在は表紙の裏にも書いてあるように都留の自然や地域のことを記録し、情報発信していくことで、記録であるわけですから、いろんな思いが詰まっていると思いますが、後世に残っちゃうので、正確にしなくちゃいけない。典拠をきちんとしなくちゃいけないって思いがありまして。初期のころは、「市民から見るとちょっとこれは違うよ」とか、「人名が違うよ」とか、「地名が違うよ」とかって、チクチクきたんですけど、あいだに8年空洞がありまして、1年前からただ思い出話や思い出を記録するのではなくって、あとに残るってことを考えて、市民が書かせていただくっていうページをいただいて、今日にいたります。長々とすみませんでした。（会場　拍手）

北　垣：　ありがとうございました。次にご紹介しますのは須藤克昌さんです。須藤さんですが、わたしの先輩にあたります。わたしが大学に入りましたときにはもうご卒業されていて、ちょうど入れ替わりになるぐらいだったかなと思います。まだ当時は雑誌をつくるというのは非常に難しくて、高価なことで、とてもそういったことを思いつかなかったのですが、須藤さんはこういう雑誌をつくられました。これは昭和61年の日付になっています。昭和61年というのは1986年です。わたしは雑誌を見たときにこういうタウン誌っていうものがあるんだ。こういうものができるんだ。と感動した覚えがあります。それが心のなかのどこかにありました。今日は長野からわざわざ来ていただきました。『フィールド・ノート』の熱心な読者でもあります。それでは、お願いいたします。

須　藤：　今紹介していただいたタウン誌について最初お話をします。北垣さんがおつくりに

なった『フィールド・ノート』は、わたくしは27号あたりから読ませていただきました。最初に送っていただいたときに、個人的な話をすると、自分の止まっていた時間が動き出したような感動を覚えました。「これだよな！」っていうふうに、すごいジィーンときた思いがあります。今紹介していただいたタウン誌なんですけれども、当時バブルで、わたしは都留文を卒業して地元で屋根屋さんをしながら大学の研究室に顔を出すような生活をしていました。ムササビの活動とかいろんな活動があったので、わたしはその隣の植物学研究室にいたんですけれども、いつの間にか顔を突っ込むような形になって、卒業してもずっと首を突っ込んでいた状態で、そのときに青年会議所の方で、当時各地方でタウン誌やミニコミ誌がいっぱい出ていたんですが、そのタウン誌をつくらないかっていう話が研究室の方にあって、「やってみるか」って言われて、全然深く考えないで「はい」と言って、青年会議所の方と一緒につくりはじめたのがそのタウン誌です。そのときに、都留の自然の世界っていうのを当時の動物学研究室の人たちにいろいろ連れまわしていただいて体験していたので、そういうものを使いたいなという気持ちが一つありました。もう一つは、都留のタカノダイラにゴルフ場計画があったんですけれども、当時はバブルだったので、そういう開発はほとんど行なわれようとしていて、「ゴルフ場だ」、「リニアだ」ってそういう感じだったので、それにストップをかけたいっていう思いがあったので、自分がその思いを乗せて歩き回って、記事をつくり、青年会議所の方々はおしゃれな情報誌みたいなものをつくりたいという、そこの接点をせめぎ合いながら、相談しながらやった覚えがあります。結局、かなり時間をかけた自分の方が押し切る形で出したんですけれども、編集のこともまったくわからないし、継続していくことの大切さってことすらわからない、そんな状態でした。1号で終わりになってしまって、声をかけていただいた方に申し訳ないって気持ちとか、いろんな気持ちを抱えながら、結局自分は就職することになって、都留を離れ、そこで時間が止まってました。北垣さんから『フィールド・ノート』を送っていただいたときに、本当に時間が動き出して、「これだ！！」、「すばらしい！」と思って、都留のことに目を向けはじめて、フィールド・ミュージアムを進めているみなさん、それから『フィールド・ノート』をつくっているみなさんを知るにつれ、この活動はとっても価値があると思いました。わたしがやっていたことと真逆で続けていくっていうこと、それが歩いたり、見つめたり、人から聴いたり、それを記録していくことはいかに大事かってことを読んでいて感じます。最初のころはつくっていた方が実際に聴いたり、体験したり、歩いたりしながら、つくっている記事が多かったので、そのドキドキ感みたいな、よろこび感みたいなものが伝わってきて、それを読んだときに自分が思ったことは、「何でおれ、今都留に暮らしてないんだろう」とか、「都留に住んでいて、自分も見に行きたいな」とか、そういうことをとても思いました。だから、地域の方々の大切な雑誌ですけれども、外に暮らしている人間にとっては、都留に旅をしたくなるような、都留を訪れたくなるような魅力をもっていると思います。つくっている市民の方、学生の方から編集の話を聴かせていただきましたが、入念なフィールド・ワークに加えて、編集で練り上げていくっていう作業の話を聴きましたけれども、それは、現在の情報化社会とか、情報化的な教育とは真逆の体験で、簡単には手に入らないけれども、ものすごく価値がある大切なものだと、そういうなかなかできない経験をしているのかなと思いました。つくる過程、そのこと自体が交流になっ

ていて、都留にとっての記録にもなっている。そういうすばらしい活動だと思います。今日、読者としての使命がわかりました。読んだら自分がどう思ったかっていうことをつくっている方にどんどん送り返すっていうことが大事だと思いましたので、そういうことをやっていきたいなと思いました。（会場　拍手）

北　垣：　須藤さんどうもありがとうございました。それでは小口さんです。小口さんとわたしは非常に長い付き合いです。わたし個人は思っているんですけれども、わたしの先輩にあたります。動物について教えていただいたり、あるいは森の動物の魅力というものに気付かせていただいたり、きっかけを与えてくださった方です。『フィールド・ノート』のなかでも、みなさんのお手元の資料にあると思いますが、『大桑山だより』というページをつくっていただいて、一緒にそのページをつくって、『フィールド・ノート』のなかで掲載して来たという関係であります。それでは小口さん、すみませんがよろしくお願いします。

小　口：　小口と申します。卒業して市内で小学校の教員をやらせていただいております。北垣さんの先輩という話ですが、もう数カ月先にひと足先に大台に入るところで、年齢で言うと、僕の方がちょっとだけ下です。昭和57年に入学しました。そのころは、社会学科が無くて、初等教育学科だったんですけれども、縁があって、2年生のときに他の専攻からあぶれてしまいまして、動物学研究室に行って、今泉先生と出会って、そこから自分の人生が大きく変わったなと考えています。そのころ活発に「ムササビと森を守る会」っていう市民運動がされていて、それが発展的に「ムリネモ[*2]協議会」となったなかで、その教育という部門、「ムリネモ協議会」では、フィールド・ミュージアム構想を進めていて、そこが始まりだと思うんですけれども、それまでの動物の観察会っていうと、動物が住んでいるところに出かけて行って、息を殺してひっそりと耐えながら待って、動物を見るということだったんですけれども、新しい出会いの方法として人と動物がお互いに出会える接点をつくろうっていう研究で、今泉先生が考え出したやりの場っていうことで、ネズミとか、リスとか、ムササビとかが人と動物、お互いがいい関係で見られる、そういう観察会をとおして子どもたちと自然の橋渡しをしていこうっていうその「ムリネモ協議会」の教育・教諭部門としてはじまったのが「うら山観察会」で、自分がそれを本当に細々と浮き沈みをしながら今年、24年目が終わろうとしているところです。教育実習に大学3年生のときに行ったんですけれども、そのころと前後して今泉先生が山の中に観察小屋をつくる。それが自分にとってすごい大きな衝撃で「うら山観察会」はずっといくつかある今泉先生がつくった観察小屋を使ってやっていたんですけれども、自分もフィールドが欲しいということで近くの知り合いにお願いをし、土地を貸してもらってやったのが、大桑山っていうフィールドに小屋を建てました。今では観察会などのメインの場所になっているんですけれども、そこの自然のことを紹介させていただいたのが、「大桑山だより」ということで『フィールド・ノート』の方に、最近は休載になっていますが、ずっと載せてもらっています。『フィールド・ノート』というのは載せさせてもらうなかでもいろいろ考えたり、見直したりする非常に貴重な場なんですけれども、そこに、今までもたくさんの方がおっしゃられたように、みなさんの地域の情報が載っていると、それが10年、それ以上に長い積み重ねがあると、フィールド・ミュージアムの膨大なデータというか、目録集になっているんじゃないかなということを自分は感じます。それを学校ですと、地域教育というのがとっても大事

なんですけれどもなかなかそれに見合うような教材というものにいつも困っている。北垣さんにもよくお願いをするのですが、小学校の先生にだれか自然の話をしてもらえないかということでお願いをして、小学校の方に出向いてもらっているのですけれども、そういうものが『フィールド・ノート』のなかにたくさん埋もれているなと思います。それを活用できるような形にしていくことが子どもを見ていて大変かなと思います。「うら山観察会」もそうなんですけれども、続けていくということは非常に苦しいこともあるんですが、そのときそのときを一生懸命やっていけば、きちんと積み重ねていけば力や財産になっていくんじゃないかなと感じます。大切なことですけれども『フィールド・ノート』の地域への貢献や、ミュージアムの目録としても期待できるんじゃないかなと思います。そんななかで、自分がすべきことをちゃんとしていかなきゃいけないんじゃないかなということを感じます。以上です。（会場　拍手）

北　垣：　発言していただきましたみなさんありがとうございました。それでは、これから休憩に入る前に、本来ならば、それぞれの発言をした方々に対して何か聞きたいことがありましたら、発言していただきたいと思っていたんですけれども、ここで少し時間をとって発言をしていただきたいと思うんですけど、なにか聞きたいという方、あるいは感想を言いたいという方、ありますでしょうか？

発言者A：　先ほどの自己紹介でも言いましたように、わたしは大月でこういう壁新聞を1月に1回発行しています。これは、この5月で5年になるんですよ。このきっかけは、この地域交流研究フォーラムに参加したことでした。「大月も何かしなきゃいけない」と思い、このフォーラムに来たときに、『街かど情報TSURU』の小宮さんが、そのときにお話しをされたんですよね。「これは大月も新聞を出さなきゃいけない」と、それでやりたい人が4、5人集まって発行したんですよ。先ほど前澤さんが原稿を50回とか、毎月わたしも原稿を出しているんですけど、最初はそれぐらい書き直しておりました。編集の責任者はそれだけ苦労して持って行ったのに、「もっとうまく書けないの？」とかって言うんですよ。本当にあの苦労がよくわかります。それと、北垣先生、ここで一番影響をもらったのは、取材はほとんど歩きです。大月には6つぐらい駅がありますので、電車で行ったり、バスで終点まで行ったりして、あとはほとんどこの新聞を配るのも歩きです。最高4時間半歩きます。ぽつんぽつんと字（あざ）があるところを歩くんですよ。わたしはテレビもありませんし、ケータイを持っておりませんし、車もありません。文明の利器というものが一切ないんですよ。それで不自由を感じたこともありません。何年か前の『フィールド・ノート』の編集部員さんが大月の方に取材に来られたんですよ。それがすごくわかるんですよ。わたしも東京から大月に越してきてもう23年間、都留に最初に足を運んだのも20年前ぐらいですよ。都留もほとんど歩いていますよ。その編集部員さんを見ていると隣なんですけど、わたしは最初に都留に来たときに大月とは全く違う文化だと思った。共通点はあるんですけど、どこか違うんですよね。違ったものに触れることによって、自分の住んでいるところがものすごくよく見えるんですよ。そういうふうに感じます。正直言って、この新聞は5年前のフォーラムに参加したのがきっかけだったんです。それはもう、何て言っていいのかわからないくらい、いいきっかけだったんですよ。本当にあれがきっかけだったんです、先生。そのきっかけと同時に、この『フィールド・ノート』を見ると、「こういうのがいい」、「こういうのがいい」って何回も何回も思ったんですね。「こういうのが理想だな」って何度も思っています。そういう気持ちも含めて、取材をするときも取材するものもね、なるべく地元の歴

史のあったものとか、何か大事なもの、残さなきゃいけないものを多少なり意識して取材をしております。はっきり言って、これがわたしたちにとって、大月にとってものすごい影響を与えたと思っております。感謝しております。ありがとうございます。それで、4時間半ほど歩いて行くところの一番奥に竹(たけ)の向(むかい)というところがあるんですけれども、戸数が5、6件しかないような小さな村です。そこまでずっと山を歩くんですよ。そこまで家がないんですよ。ずっと歩いて。そこは年寄しかいないんですよ。その途中に、このニホンカモシカの角が道の隅っこに落ちてたわけです。ですから、先ほど時間を惜しまない、その時間を惜しまないことがどんなに価値があって、大切なことかっていうことをつくづく思いました。本当に50回というのはわたしたちの文章にはなかったけれど、あの苦労、よくわかります。今日は本当にどうもありがとうございました。(会場　拍手)

北　垣：　ありがとうございました。ここで10分ほど休憩をしたのち、次に進みたいと思います。次は『フィールド・ノート』のこれからについてみなさんからいろいろ意見をお伺いできればと思います。どうぞお休みの間に、うしろにある展示をご覧になっていただければと思っております。それではこれで休憩に入りたいと思います。発言してくださったみなさん、どうもありがとうございました。

10分間休憩

北　垣：　それでは時間になりましたので、後半に入りたいと思います。後半はこれからのフィールド・ミュージアムの可能性あるいは課題も含めて提案していただきながら未来に向けて、いろいろみなさんと一緒に考えてみたいと思います。これから1枚の資料をお配りしますので、とっていただければと思います。今お配りした資料は、『フィールド・ノート』の創刊から現在までどのような特集を組んできたかという大雑把な概略のようなものが書いてあります。当然、これ以外に小さな記事がありますので、それらを含めると大変多くのポイントで都留市のいろんなことをテーマに『フィールド・ノート』の特集が組まれてるというのがおわかりになると思います。わたしも『フィールド・ノート』をつくりはじめたときには10年これを続けるとか、そういった思いもまったく想像できずに、3年あたりでおそらく終わるんだろうなという予想のもとに活動していたのを思い出しますが、結局、都留の魅力と言いますか、学生が見つけ出した都留の魅力というものは絶えることなくここまで続いてきました。この資料をご覧になりながら、後半の話の方へ移っていきたいと思います。後半は先ほど申し上げましたように『フィールド・ノート』の可能性、あるいはこれからの課題をそれぞれの立場からいろいろ発言していただければと思いますし、会場のみなさまからもこの発言が終わったあとに、自由にご意見ご感想を述べていただければ助かります。それでは、今井さんよろしくお願いします。

今　井：　今、リストを拝見して、毎号読ませていただくんですけれども、情報量もありますし、クオリティーも高いです。あえて課題を言うと、一番最初に自分たちが立ち上げたんですけれども、ここまで完成してきた、これまでずっと紙にこだわってやってきました。自分は紙がすごく大事だと思っていまして、紙はやっぱりなくならないだろうなぁ～。ずっと置いておけるとかですね、すべての年齢の人が読めるとかいろいろな意味もあると思うんですけど、今400部発行されているということなんですけれども、これだけのコンテンツというのは価値があると思いますので、場合によっては電子化っていうのも一つの可能性なのかなって考えています。やっぱり、ここ数年状況が変わってきていると思いますし、新聞自体も電子化の流れになって

いますし、このあとの10年後にどんな会が開かれるかわかりませんが、必ずiPad（アイパッド）などのタブレットを持っている人も多いと思うので、写真もきれいに見えますし、写真を大きくすることができるとか、そういう特徴も含めてもし電子化をすることができれば、入学式の日にやって来て途方に暮れるという話をよく聞くと思うんです。わたしも都留に来るまで都留がどういうまちかよく知らずに来ました。たぶんそういう学生は多いと思います。「どういうまちなんだろう？」、「どういう魅力があるんだろう？」っていうことがもっと都留文科大学の卒業生や都留文科大学を目指そうとしている高校生などにもわかってもらえるとしたら、大学の機関誌としてもかなり有効なツールになるんじゃないのかなと感じます。ずっと毎号送ってもらっているんですけれども、本当にもったいないな、自分はあまり収集癖がないので、なるべく知り合いとかへ読んだら人にあげてしまうんですけど、「へぇ～」っていう感じで、「こんなものつくってるんだ」と感心を持って読んでくれる人もいます。当然、読者のターゲットをどこにするのかをもうちょっと煮詰めていく必要が同時にでてくるかなと思います。今は、比較的都留に関係している人、あるいは都留をすでに知っているという前提のもとに読んでいる方が多いと思うんですけれども、もっと広げていくとするならば、そもそも都留とは何なのか、都留の場所とか位置とか、そもそも大学があって、そこでどういう活動をしているかっていうことも含めて文章を今度書いていかなければいけないと思いますので、それが単に電子化するだけではなく、文章の書き方とかも改めていく必要が出てくると思うので、そこはすごく大きな議論をしたのちにそういうことをしなければ単に置き換えるだけではダメだと思うんですけれども、提案としては、もったいないなっというのが率直な感想なんです。広げていっていただきたいなと思います。場合によっては、ＳＮＳ（エスエヌエス）、Facebook（フェイスブック）とかTwitter（ツイッター）も活用できるんじゃないかなと思っています。

北　垣：　どうもありがとうございました。もっともっと広める手法というものを考えて欲しいという提案でした。ありがとうございました。それでは前田さんお願いします。

前　田：　課題としてというより、先ほどのみなさんですとか、聞いてくださっているみなさまの意見を伺いながら、けっこう編集当時のことを思い出しました。わたしがやっていたときはまだみなさまから買っていただいていた時代だったので、読者数を増やしたいというのが編集長としてのわたしにミッションとして課していて、都留の人とか、会った人に「『フィールド・ノート』っていうのは、こういうことをやっているんですよ」というのをお渡しして広めていたんですけど、都留の人のなかでは「こういう活動やっているんだね」ということで好意的に受けてくださる方とそうではない方、「学生はたった4年しかいないのに都留の何がわかるんだ？」っていうことだったり、「都留のなかにどんどん踏み込んでいって、何が変えれるの？」って、「じゃあ、変えたあとに残るのは市民であって、学生ではない」っていうことを結構言われたことがありました。先ほどの青池さんの話ですとか、フィールド・ミュージアムですとか、その前の方々や北垣さんの話でフィールド・ミュージアム構想っていうのが先にあってということは、わたしは入っていって人にいろいろ広めるなかで、「じゃあ、何で『フィールド・ノート』を始めたんだろう？」ってことを自分で振り返っていくなかで、西さんですとか先輩たちに聞きながら自分で考えをもつようになって、学芸員の資格までとるようになりました。せっかくこういう機会にいながら、当時のわたしの疑問というのはやはり、そのときずっと残っていて、都留の人にとってこの『フィールド･ノート』ってどういうものであって、一緒に共存ではないんですけれども、学生だからつくっていくっていうのは非常におもしろい試みだと思っています。都留出身の編集部員も今のところあまり聞かないのですが、

市外から来て、都留の「これっておもしろいな」って感じるところを取り上げて、それを誌面にまとめていく作業が多くの学生がやっていることだと思うので、その外から来た人間だからこそ、仕事ではないからこそ、わたしも入り浸っていたので、そういう学生だからこそできたことがいっぱいあって、そういうなかで都留の地域に根ざした場所を取り上げていくというのが、どういうふうにして都留の人に受け入れられるのかなっていうのを、OGとして見守っていきたいという気持ちが非常にあります。地域の方が書いてくださる誌面があるとか、そういうことを聞きながら、うれしいなぁと純粋に思っていたんですけれども、どういう形で育っていくのかなぁっていうのは、わたし自身も読者として考えていきたいなと思いますし、ぜひ、こういう場だからこそ、市民のみなさんから意見を聞きたいなと思っています。以上です。

北　垣：　ありがとうございました。都留の方々にこの『フィールド・ノート』がどのようにして残り、育っていくかって、そういうところですね。ありがとうございます。それでは前澤さん、現役編集部員としてお願いいたします。

前　澤：　わたしから話すよりも、ぜひみなさんから意見を伺いたいんですけれども、現在、『フィールド・ノート』の編集部内でもこれからどうするかっていう話をしていて、わたしは、昨年の10月頃に今井さんと前田さんともう一人編集長をされたOGの杉山さんという3人の元編集部員の方にインタビュー[*4]をしたんですけれども、そのときに感じたのが今井さんのお話にもありました、読者層をどういう感じに意識するのかっていう話をお聞きしたときにわたしも「それは確かにそうだな」っていうのはすごくありました。最近編集会議でバックナンバーを振り返ろうということで、北垣先生に毎回毎回記事を1つ紹介していただいて、それに対していろいろと考えているんですけれども、そのなかで、OGの方で文章を書くときに誰に向けて書いたかっていう話で、親に向けて書いて、都留じゃないところに住む人にもわかりやすく書こうと意識した記事があるという紹介をしていただいて、そのときになるほどなと思ったんですけれども、ただただ記事を書くのではなくて、誰に向けて書くのかっていうのをもう少し意識して書いたらもっといろんな人に伝わるのかなと思います。最近思うのが、身近な所にもっと目を向けて、記事にしたいからいろいろなネタを見つけに行こうじゃなくて、普段歩いて何気なく気になったから、たまたま自分がそういうふうに思ったから、じゃあ記事にして深く考えてみようかって、そういうところからスタートできたらいいんじゃないかなと思います。この活動ができれば、今は10年目なんですけれども、20年後にもこういう会を開いて、ぜひ読んでいただけたらなって夢がありまして、もっと学生の方にもいろいろこの活動を知っていただけたら学生だけでなく、地域の方とか、県内外の方、海外の方にも、もっと『フィールド・ノート』を認知していただけたらなと常々思っているので、ぜひ意見を聞かせてください。以上です。

北　垣：　ありがとうございました。「いったい誰に向けて書くんだろう？」それから、身近なものにもっと目を向けていきたい、そういう目を育てていきたいという話でした。それでは遠藤先生。

遠　藤：　今までお話なさったみなさんと同じようにこんな宝物みたいなこの記事を、取材したものをもっと大勢の人に知らせたいなと思いますよね。そして、ただ頭の中に入れておくだけでなくて、それが実際にわたしたちの社会のなかで動くようにしていくにはどういいかなって思いますよね。これはすごく重要な仕事ですよね。パッと完成してくれればいいけど、そういうものじゃないから、こうジワジワジワジワと入っていくものだから、どういうふうにみんなに伝えていくか、その普及の仕方で

すよね。わたしの身内では、姪が送ってもらっているそうです。詩友会にも送ってもらっているメンバーがいます。そういう人からは、わたしにすぐ反応があるんです。「こういうのが出てたね。」とか、その詩友会のメンバーも「出てたじゃん、先生。」とかね、言ってくれるの。とにかくみんなの目に触れなければ反応は返ってきませんよね。だから、どういうふうに広めたらいいかなと思います。わたしたちの心配は400部が今まで講演に来てくれた人、それから、都留文科大学の卒業生。都留大を出て、来年退職される校長先生などの人たち。それから都留市内に読者がいる地区があるんです。東桂地区や谷村地区、禾生地区などがあって、宝地区では30何名読んでくださるので、わたしは配れないけど、Ａさんという人に13冊やるとその方が配ってくださる。宝地区だけで3カ所あるんです。谷村地区では5ヵ所ぐらいある。会員さんが1人5～10冊ずつ配るんです。配布の仕方が決まっているんです。みんながそういうふうにして配って普及しているんです。学生さんに会うと、「あ～、あの詩を書いたのはあんたなのね。」っていう感じになるんですよ。だから、400部を1人ずつ配るのは大変だけど、地区でそういうふうに読んでくださって、関心のある方を見つけて、その友達を探して、「あぁ～、そういうの読みたい」って言って、そういうふうにして自分で400部を配るんじゃなくて、そんな方法でしています。と言うのもですね、もったいないですよ。これね。もっと大勢の人に読んでいただいて。それからもう一つ、昨日テレビを見てたらみそづくりっていうのをやっていたのね。そして、『手前みそ』っていう歌に合わせてみそをつくっているんですよね。幼稚園の子どもたちも『手前みそ』の歌を歌いながらみそをこねてつくっているんですよね。そこまでいかなくても、ここを見たらみそってあるんだよね。ここに。みそづくりっていうところがね。この編集している人が全部行動を起こすんじゃ大変だけど、みそづくりをやってみたい人がお仲間を見つけて一歩踏み出す。いいソースが動いて活動するようになったらすごいなと思う。それは大変なことだけどね。そんなにあわてなくても地道にやれることだと思います。がんばってください。

北　垣：　ありがとうございました。もっと多くの人にどういうふうに普及していくか、っていう課題、それから、実際に動かしていくにはどうしたらいいかということを考えていく視点。ありがとうございました。青池さん、よろしくお願いします。

青　池：　今井さんや前田さんや前澤さん、遠藤先生のお話を聞いて、電子化という話もありましたので、今、地域交流研究センターのホームページから『フィールド・ノート』のPDFが少し見られるんですけど[*5]、これから毎号そういう形にすれば、全国の卒業生にも見てもらえるし、読者を増やす、発行部数を増やさなくても多くの方に読んでいただけるので、それはぜひ考えてみていただきたいと思いますが、同時に紙の形の雑誌も残していただきたいと思います。わたしは活字とか情報にかかわる仕事をしているので、物理的実体があるものを手にとって見るものって本当に大事だなと思っているので、その両方を残していっていただきたいと思います。そして雑誌ですから、多くの人に読んでもらわなきゃもったいないという思いがあるので、電子化することによって、そういうことが可能だと思います。ただ、雑誌だから読者を増やすっていう観点、雑誌をつくるという観点ではなく、さっきから言っているように機関誌にこだわっているので、フィールド・ミュージアムの活動を記録していく、フィールド・ミュージアムの研究の成果を博物館が展示するように、記録して残していくという活動も二本柱として本当に大事だと思うんです。学生さんたちがまちに出かけて、地域の自然や暮らしや産業を記事にして紹介して、全国に発信するというよりも、フィールド・ミュージアムの活動の一つだと思うんですけど、もっと具体的に言うと、『富士道を歩く会』を実施しましたとか、県立美術館や美術

教室と一緒に『アート巣箱をつくろう』というイベントを開催しましたとか、『自然観察会』をしましたというものが、最近の『フィールド・ノート』のなかでは「フィールド・ノートニュース」とか「トピックス」的なもので短く扱われているのがとても残念なので、記事も載っていますが、もっとフィールド・ミュージアムの活動そのものをもっと詳しく載せて欲しい。今も連載があったり、特集があったりしていますけど、一つの事象なり、自然なりについて長く観察していくこともこれからも続けていって欲しい。最初のころ記事がうますぎるとか、編集とかレイアウトうますぎるって言ったのは、iMacとかで編集していて、編集技術がいろいろできるようになって、雑誌もどんどん充実していっている段階でタウン誌的な誌面づくりがちょっと目についたことがあったので、学生っぽくないというのを言ったんですけれど、研究成果とか活動の記録、機関誌としての役割、取材、記事もその一つではありますけれども、そういうふうなものを発表する場であって欲しいと思います。

北　垣：　ありがとうございました。紙の媒体を大切に残していく。また、フィールド・ミュージアムの一環ですから、そういった研究成果というものも大切に記録し残していくということ、そして、長く観察していく姿勢を保つこと、ありがとうございました。それでは、須藤さんよろしくお願いします。

須　藤：　一つはすでにやられているんですけれども、今もおっしゃられましたが、継続して記録していく、記載していくことをずっとやっていくことも大切だなと思います。ただそのときに、すでにやられていていいと思うんですけれども、必ず書いた方の名前を入れて、その人の責任において書かれているというスタイル、本当に抽象的な情報だけじゃなくて、ちゃんと主体が入っている記載の仕方をしているのは非常にいきいきとしていていいと思いますので、ずっとアカネズミのことで引き寄せられないように、ちゃんとにらみもきかせながら、地道に活動していって、記録し、伝え続けていただけたらなと思います。外の人間として、先ほども言いましたけれども、本当に地域の方の、地域を見つめることがあるんですけれども、外にも開かれているっていう機能、そういうのも残していただきたい。そういう仕掛けをどこかにつくっていただきたいということで、見当はずれのことかもしれませんが、読んでいる人が追体験したくなったら、行動できるようなインフォメーションが常に入っていたりしているんですけれども、そういうのも大切にして外の人間や地域の方も使えるとか、写真の情報とかさまざまな情報が蓄積されてくると思うんです。また、地域の学校で活用するってこともなされていると思うんですけれども、そういうところとのつながり、利用しやすい仕組みのようなものを開発していっていただけるといいかなぁと思います。以上です。

北　垣：　どうもありがとうございました。きちんと責任、主体をもって表現することと、継続をすること。これまでも出していただきましたがそういった課題。それから、外にも開かれたものであって欲しいということ。そして、地域の学校なり、そういったところで活用できるような仕組みをつくっていくこと。ありがとうございました。小口さん、お願いします。

小　口：　北垣さんがおっしゃったように地域で活用できることで都留のよさっていうものはやっぱり、人と自然がすごく位置的にいい関係になっている。本当にすぐ近くにいい森があって、いい水があって、人々の生活がそれらにつながっているような、それがフィールド・ミュージアムの展示そのものになるんじゃないかなと。それを今まで、いろんな形で掘り下げてきて、それが展示目録のような形で、ここにもすごい量で存在しているわけですから、それを活用していくためには先ほども出てきたような電子化という形が必要と感じます。学校としては子どもたちの地域教育の地

域教材としても十分使える可能性があるし、指導者の方の教材研究の材料にもなると思う。そういう意味では基本というのはあるけれども、どの学校もすごく追い詰められているというか、ゆとりがないというか、使える形であれば飛びつくけれども、自分でそれを整理しなきゃいけないとできない。だから、この間の溝を埋めるためには、インデックスか何かをつくってすぐ見られるような、探せるような、そういう形をつくっていくのが必要じゃないかってことを感じます。以上です。

北　垣：　ありがとうございました。小口さんからは教員の立場としても、そういった共有化に向けた利用というものを考えていく必要があるのではないかという提案でした。それでは、せっかくですので、会場のみなさまから前半、後半の話、全部ひっくるめてで構いませんので、何かご感想あるいはご意見等がありましたらぜひ発言をいただきたいのですが、いかがでしょうか。

参加者B：　今日はどうもありがとうございました。小口先生の話にも通じるんですが、わたしも本職は小学校の教員なので、『フィールド・ノート』を見て思うのは、これって全部教材として使えるんだなぁと、地域教材を学生の手でこうやって拾い上げて、10年間の蓄積がある。都留市ってすごくうらやましいなぁと思うんです。ただ、やっぱり小口先生もおっしゃっていたみたいに、現場の小学校の社会科であったり、総合学習であったり、そういうところで使うとなると、先生の手で教材化というプロセスを得なければ実際の授業では使えないところがある。もしできたら、すごく労力がかかることは重々承知の上だけれども、教員養成系の大学であることが都留文科大学の強みだと思うので、少し教材化のワンステップをフィールド・ミュージアム部門の方でできたら、もっと生かすことができていいんじゃないかなぁということを感じました。前半の話ともつながるのですが、13校、50校と重ねていると聞いて、「やっぱりな」と思いました。一目見て学生のみなさんが文章の一つ一つに心を割いてすごく真剣に取り組んでいるのが伝わってくる雑誌になっているんじゃないかなと思います。その分、ちょっと硬いかなと少し感じます。やっぱり地域の自然や文化に寄り添い、掘り起こしているので、感動であったり、楽しみであったりとかそういう取り組みをしているってことをもう少し気楽に発信をするというところがあってもいいんじゃないかと思います。さっき青池さんの意見にもあったんですけど、自然観察会とか、そういった取り組みは確かにニュースになっているのもさびしいなと、それで1つの記事をつくると楽しいんじゃないかな、なんて思うことが時々あります。とことんこれからやっていけるといいんじゃないのかな。自分は軸足が子どもなので、小学校の教員でもあるし、普段自然観察会もどちらかと言うと、幼児とお父さん、お母さんを相手にいつも活動をしているので、そこはちょっと子どもの視点が加わってくると、もっとおもしろいのかな。また、取材を学生さんが一生懸命やっているんだけど、もし、小学生であったり、幼稚園児であったり、そういった子たちが少し一緒に話を聞いて、それをまとめて記事にしていくようになるととってもいいんじゃないかなと感じました。ちょっと個人的な話になりますが、今は静岡県の富士市で活動をしているんですけれども、浮島ヶ原という富士市と沼津市にまたがる湿地のところに自然公園が3年前にできまして、市の方から公園ガイドのような話で、「少し自由にやっていいよ」って言われているので、都留のまねができると思って3年間、管理棟のなかに写真を貼ったり、『フィールド・ノート』のような冊子はつくれていないんですけれども、毎月毎月来てくださる来園者の方にミニガイドのようなものをわたし個人でつくって配布してもらったりとか、そういったことをしています。やっぱり、フィールド・ミュージアムっていうのはいろんな地域でやれることなんじゃないかな。富士市でもフィールド・ミュージアム構想

っていうのが25年くらい前にあったんだという話を一昨年くらいに聞いて、たぶん、今泉先生か大田先生あたりの話が流れてきたんだろうなと思うのですけれども、今でも楽しみでやりたい人がいるんじゃないかなと、そういったときに、この都留の取り組みってモデルケースになるんじゃないかな。こうやっていけば、市民と学生と一緒になって地域の自然であったり、歴史であったり、文化というものを掘り起こして、記憶していくことができる。前にもフォーラムの感想をセンター通信の方に自分は書いたことがあり、その内容にも通じるところがあるんですけれども、都留のモデルっていうのをもう少し発信できるといいのかな。せっかく10年分の取り組みの積み重ねがあるので、これからは全国各地に発信できるようになっていくと、とってもいいなぁなんて思っています。都留文科大学には全国各地から学生が来ますので、学生がかかわると、本当に4年間だけで他の場所でもできます。先週、モニタリングサイト1000里地調査シンポジウム（2013年1月26日開催）に行ったんですけれども、同じような話がありました。「若い世代、学生さんは入ってもらうだけで、4年でいなくなっちゃうじゃん。でも、逆にその分全国に戻るのならばそこに伝わっていけばいいよね。」なんて話も出ていました。それは都留でも同じかな。全国から来ているんですから、かかわった学生さんたちが全国に行ってこの取り組みを広げていく、その中心として、コアなものとして、フィールド・ミュージアムがあり、この『フィールド・ノート』がこれから活躍していってくれるととってもうれしいなぁなんて。雑駁な感想ですけど、以上です。（会場　拍手）

北　垣：　どうもありがとうございました。やはり、教材化の視点というもの、あるいは子どもに向けた視点というもの。提案していただきました。ありがとうございます。他にありませんでしょうか。どうぞ、この機会ですので、ぜひ気楽に発言していただけると助かります。

杉　本：　主催者側の一人として、ちょっと発言させていただきます。去年、京都にある総合地球環境科学研究所というところと連携して富士吉田市で地域フォーラムを開催いたしました。このなかの学生にも参加してくれた学生がいると思うんですけれども、自然は人間全体の共有の財産だということで、今年の6月に世界大会が開かれます。それに向けて、去年から今年にかけていろいろな催し物が開かれているんですけれども、そのなかで富士吉田の高校生たちがまちに出かけて行って、取材をして機関誌をつくろうというときに、手本としたのが『フィールド・ノート』なんです。そういうふうに、隣の市なんですけれども、こういうものを知っていて、京都の研究施設の人たちも『フィールド・ノート』の活躍、地域交流研究センターの『地域交流センター通信』の方も、参考にしていただいたんですけれども、少しずつそういうものを知っていただいて、触れることができているということがとてもうれしく感じていまして、去年連携して総合地球環境科学研究所と都留文科大学の共催ということで開くことができて、今年の6月にコモンズの世界大会、新聞の記事になると思うんですけれども、そこへ都留文科大学がかかわることができた元がこの『フィールド・ノート』、地域交流研究センターの活動のおかげだと痛感しております。この10年、改めて積み上げてみて、先日北垣さんと全部揃えてみたら、すごい数だったんです。それを一度特集として全部集めた冊子をつくってみたいねと話をしています。まだ実現には至っていないんですけど、0号からはじまって、どの部分まで入れるかはわからないんですけれども、全部集めてつくってみたいと考えております。また、いろんなことでみなさんのお知恵をいただいて、北垣さんにもいろんな声をかけていただければ、できるだけ反映するような形でやっていきたいと思いますので、引き続きご支援よろしくお願いいたします。

北　垣：　ありがとうございました。会場から何かありませんでしょうか。ぜひこの機会にお願いいたします。

参加者C：　わたしは届けていただいているんですけれど、やっぱり、人に「こんなにいいのがあるよ」ってあげてしまい、過去の特集とか見てしまうともう1回見てみたいなと思うんですけれども、どこに行けば過去の『フィールド・ノート』を見ることができるのでしょうか。あと、大学まで来なくても地域のなかに見られる場所があるのでしょうか。そういう情報が欲しいです。

北　垣：　ありがとうございます。地域交流研究センターの方にバックナンバーを保存してありますので、もし、ご覧になりたいときには声をかけてください。ただ、おっしゃったように大学はなかなかアクセスのしづらいところがあります。そのようにおっしゃる方々が多いのも事実です。どうにかうまい形でいろんな方々がバックナンバーも参考できる、あるいは見ることができる、また、将来的には今日の提言のなかにもたくさんありましたけれども、いろんな場面で活用できるようなことをどのように整えていくかということも課題になってくるかと思います。また今後もよろしくお願いいたします。じゃあ、他に何かありませんでしょうか。ぜひ、この機会にお願いいたします。よろしいですか。それでは、本来ならば終了は15時30分ということでしたが、15分ほどオーバーしてしまいましたが、そろそろまとめに入っていきたいと思います。本日のまとめは社会学科教員の畑潤先生、すみませんが今日のまとめ、一連のお話を受けてのまとめをよろしくお願いいたします。

畑　：　紹介していただきました畑です。「おしまいの言葉」ということで、わたしは適切ではないと準備のなかでは発言をしたんですけれど、わたしはすぐに難しいことを言うようですね。そして、「おしまい」と言いますが、これから始まるっていう感じになりそうで、「はじまり！はじまり！」みたいな話になりそうなので、あまりふさわしくないのですが、その役割を務めさせていただこうと思います。

今日は第9回地域交流研究フォーラムということで、タイトルは「フィールド・ノート10周年からみえる未来」です。内容的な趣旨としましては、編集に携わってきた卒業生、あるいは地域の読者、教員とともにこの10年を振り返り、『フィールド・ノート』が抱いてきた可能性と課題について考えるというもので、さまざまな思いと期待を語り合うという、そういうねらいでした。

今日は7名の方々が経験と言いましょうか、編集に携わったもの、あるいは現在編集をしている学生、あるいはインタビューを受けた方、あるいは学校の先生の経験者、いろんな立場からご発言いただきました。フォーラムの準備段階からいろんな意見を交わしてきたわけですけれども、『フィールド・ノート』の実践というものについて、意見を交わす、広い形で検討するということはこれが初めてだと思うんですね。そういう意味で今日は、非常に貴重なステップになったと思います。実際は、この『フィールド・ノート』は非常に豊かな内容を秘めています。論議や研究の角度というのはまだ定まっていなくて、少しずつ作業を並行して進めていくべき、そういうときに来ていると思わさせられました。

今日はおしまいのあいさつということで、一つお話してみたいと思うのは、10年経ったということです。75号、76号と、そういう積み重ねを遂げてきたということの重みについてということなんですが、この達成は非常に大きなものだと言ってよいと思います。「偉大なことだな」というふうにバックナンバーをまとめてみて、そう思います。この取り組みのベースについては、いろんな方のご発言にもありましたように、地域交流研究センターの10年の歴史がありまして、そのなかの部門の一つとしてフィールド・ミュージアム部門の10年の歴史があるわけです。今日は補足

の発言もありまして、それ以前からの歴史があるんだという。まったくそういうことで、歴史を含みながら成り立ってきていることを改めて思うわけです。つまり、青池さんからの発言にもありましたように、フィールド・ミュージアムの実践というものが基底にありまして、それでこの『フィールド・ノート』が成り立っているということ、これをまず押さえておきたいと思います。大きな発展を遂げてきているということで、重たいわけですが、内容の世界というのは、どの号や誌面を手にしましても、楽しさに満ちていると言いましょうか、編集するもののハートがいきいきと脈打っていて、そういった意味では重たさは全然ないというのが、わたしの全体の感想なんですね。そのことをわたしは大変大事なことだと思っておりまして、そのことを考えてみたいこととして提案したいのです。

その前に、リードされてきた北垣さんを、今日は親愛の念をこめて「さん」付けで呼ばせていただきますけれども、北垣さんの指導のよさと言いますか、今日も最初の段階から説明しながらフロアーの経験者の発言を求めたりといった具合に、そんなところからも改めて感じられたのですが、北垣さんの指導のよさの秘密を探るということも大事なことだなというふうに思わさせられました。いつもはそんなに表にでるということはないのですけれども、そこに大事な対話の時間と空間がありまして、わたしなんかと全然違うわけですね。わたしが「わーっ」と、こうしゃべっているのとは違いまして、北垣さんの場合には学生諸君のやる気というのを相当大事にし、それを引き出しておられるんだろうなぁというふうに思うんですが、われわれも丁寧に目を向けなければいけないなぁというふうに思います。

先ほどから話をしていたことですけれども、こういうことで考えてみたいと思うんです。わたしたちのこの現代社会と『フィールド・ノート』の実践との関係とのことです。わたくしどもの現代社会というものは本当に多面的でとても短時間で語れるようなことではないんですけれども、大変大きな社会の変動、深く急速な変化を遂げつつある、そういう社会に入りまして、わたしたちがお互いに身近なもの、小さな動き、そういったものに目を向ける、あるいは見つめて味わうという、そういう動機と言いましょうか、契機と言いましょうか、そういうものを失いつつある、そういう時代であるように思われるわけです。社会のなかでも過疎化が一般的に進んでいますし、シャッター通りも広がっていますし、生業というものが消え、人々の交わりというものが薄らいでいき、などなどといっぱいのことが進行しているわけですね。そういうふうな社会の状況のなかで、先ほど情報化というご発言がありましたが、メディアの大きな影響、それから、今日は学校の先生もいらっしゃるわけですが、教育そのものの過程も、教えていくだけで手一杯という状態があふれているわけです。そういうことで、自分たちの身近なこと、それをきちんと見つめていくという、そういう動機、あるいは契機というものをうっかりする見失う、そういう社会になりつつあるのではないかというふうに思います。全体としては大変狭い個人主義的な生活とマネーの論理に支配された、そういうことが蔓延してきているというふうに言ってよいと思います。

そういうことがありまして、わたしは今日みなさんに時間があったらと思いながら紹介したいなと思うものがありまして、それが、ジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau）の『エミール』なんです。ルソーは、『エミール』のなかでこういうことを述べているんですね。短い紹介ということで、耳で聞いていただきたいのですけれども、いくつかの具体的な子どもたちの経験のことを述べながら「こんなふうに自分から学ぶことについては、他人に教えられて知ることについてよりも、疑いもなく、いっそう明確な観念をもつことになる。それに理性を卑屈にして

権威に服従することになれさせるようなことにならないばかりでなく、いろいろな関連をみいだしたり、観念をむすびつけたり、道具をつくりだしたりすることにいっそうたくみになる。ところが、すべてそういうことをあたえられるがままにとりいれていると、わたしたちの精神はなまけぐせがついてしまう。学問の研究を簡略にするすばらしい方法はいろいろとあるようだが、努力して学ぶ方法をだれか教えてくれることがわたしたちには大いに必要なのではあるまいか。」というふうにルソーは述べていまして、要するに、「精神のなまけぐせ」がついてしまうということを述べているわけです。社会の大きな変動のなかでわたしたちがどういうことを経験しつつあるか、ということを照らすようなルソーの言葉ではないかというふうに思われるわけです。つまり、自分自身の目・耳を働かせる、五感を働かせる、そして判断力を働かせる、あるいは観察力を働かせる、そういうことの大事さ。本当の人間的な自信というものはこういう自分自身の力を働かせる、そういう力を回復する、そういうことによって、少しずつ可能になるのではないか。そういう問題も抱えているように思うんです。そういう時代、状況にあって、発言にありましたように、今泉先生のムササビ観察の経験があるわけです。一言で「ムササビ観察」と言いますが、そこにムササビを守るひとつの戦いのようなものがあったわけです。そういったことを含めて、ムササビ観察という言葉で略しますけれども、そういうことが非常に豊かな感動を引き起こしていったということがあるわけですね。ムササビが飛ぶ。ムササビの飛行は一瞬なんですけれども、それを「おーっ」と、言う。そういう感動を経験する。そういう実践が今日でも続いているわけです。

フィールド・ミュージアムについてのコメントがありましたように、動物園とか実験室とかそういうことではなくて、生きた自然そのもの、あるいは生きた動物、植物そのもの、つまり、フィールドというものを意識するということが、この都留文科大学のなかで貴重な歴史的経験を重ねながら、深められてきたと思います。つまり、それは吟味する対象を発見していく、あるいは意識するという、そういう小さな経験が大きな意味をもつだろうと思います。北垣さんもこの『フィールド・ノート』の63号でいくつかリスに関することも書かれたり、それから、カワネズミの観察のことを書かれています。カワネズミの観察では本当に一瞬、その一瞬を見ることのために何と大変だったかということを記されています。そういう一瞬の経験を通して、ここでは詩人の谷川俊太郎さんの文章の引用を通して、ウィリアム・ブレイクの詩を北垣さんは味わい深いものとして感じられているようですが、「一粒の砂に　世界を見　一輪の野の花に　天国をみる」と。この一瞬の経験を通して、その向こうに非常に大きなものを見る、直感する、あるいは洞察する。そういう経験をわたしたちはフィールド・ミュージアムの実践のなかで少しずつ拓いてきているのだと言ってよいと思います。『フィールド・ノート』の世界というものは、その精神を展開していると思います。五感をはたらかせることの大事さ、自分の判断力をはたらかせることの大事さ、こうしたことは本当の人間的自信というものを回復していく、その回路として大事なんだというふうに思うわけです。参考までにと思って持って来たものが、今泉吉晴さんの新しい著書で、『わたしの山小屋日記』の春、夏、秋、冬という計4冊が昨年刊行されました。こういうふうなものを読みましても、専門家ではない、わたしたち素人が観察者になっていけるということを思わさせられます。わたしたちもよい観察者になることはできる。そういうことです。

もう一つ、まとめの話として『フィールド・ノート』の実践の価値についてごく短く発言させてもらおうと思います。そのエッセンスについて、わたしは次のように考えているんですね。『フィールド・ノート』は大変未開拓な教育実践と言うべきだ

と思いますが、「共同性を持つ観察」と、「表現の活動」であるということが大変大事だろうと思っています。この場合は、「共に」という方の共同をわたしは使います。「共同性を持つ観察」と、「表現の活動」ということに『フィールド・ノート』の活動の意味というものを考えてみたいと思います。とりわけ、今日の発言にもありましたように、編集に直接携わる学生諸君の編集過程、それは自主性が非常に大事にされているということのようです。それは青年の内的な要求というものがそこにあって、そういう諸発言を聞きながらも強く考えさせられるわけです。いろんな形の交流があり、そして、自分自身を表現していきたいということです。しかしそのプロセスで、今日の発言でいっぱい語られましたように、新たな交流、出会いが生まれていく。そういうことを求めるということも、青年に限りませんが、青年の大事な内的要求だろうと思います。編集の過程は非常に興味深く、報告や発言を聞きました。「問う」という意識、「問われる」という関係、そういうことによって、「問う」側も「問われる」側も一つの言葉について、一つの経験について意識化を進めていくわけで、この経験は非常に多くの価値を内包していると思われます。

学生諸君にとってはそういう意味を持ちますが、大学・研究にとっての価値というものも小さくはないだろうと思っています。『フィールド・ノート』の内容の特徴的なことは、専門性を越えているということです。はるかに専門性を越えた世界を問う、そういう世界になっているということです。そういうことで、『フィールド・ノート』の内容や方法というものは、大学のゼミの方法として、わたし自身は大学教育実践の新しい分野を拓いているんだというふうに評価をしているんですけれども、そういう角度から見ていくことが大事ではないかと思います。

もう一つは、何人ものご発言にありましたように、地域社会にとっての価値ということです。インタビューのことに一番象徴的に表れるわけですけれども、「伝えあう」という、「質問したい」という「問う」心を「伝えたい」…そこの心の共鳴、それはお互いにとってクリエイティブな創造的な意味をもつ経験になるだろうと思います。市民の方たちも、自分たちの経験を改めて「伝える」過程で、意識し直しているという作用がはたらくわけですので、大事な意味をもっていくと思います。地域の人たち自身が地域の他者の存在に気付いていくことも可能になっていくことは小さくはない問題だと思います。そういう意味では『フィールド・ノート』全体を受け止めますと、共同によっているということになります。この『フィールド・ノート』を読んでいくと、うしろの表紙のところに「ソローの小屋」が使われている。ヘンリ・ソローはわたしたちにとっては非常に大事な思想的な源と言いますか、インパクトを与えてくれているわけです。ソローは『森の生活』で有名なんですけれども、そのソローは一人で書いたんですね。『フィールド・ノート』は共同によって執筆されている。ソローの価値は非常に大きいのですが、この『フィールド・ノート』の価値には独自な、特別な意味があるということについても目を向けておきたいと思います。

『フィールド・ノート』の実践課題の可能性ということについて、わたしは三つの項目についてだけ述べて終わりにしたいと思います。一つは大学教育実践の方法の一分野、そういう角度でこれから、学生・教員自らの観察・批評によって、共同・交流ということを果たしていくことの大事さがあるでしょう。二つ目は『フィールド・ノート』の実践の応用ということです。今日の最後のご発言にもあったわけですが、小学校・中学校・高等学校で『フィールド・ノート』の結果を生かすのではなくて、『フィールド・ノート』のやり方を生かしていくということが、可能性として一番大事なことではないかと思います。それぞれ自分たちが独自に担うというこ

とです。それから、地域、地域社会にもそういうのはある。このようなことが行なわれることは大事ではないかと大月の方からもご発言がありましたけれども、そこでも応用されている。もともと『フィールド・ノート』は大学の外にあった、そういう運動の機関誌として存在していたことの意味は、丁寧に考えておく必要がある。大学が簡単に占有してはいけない領域と言いましょうか、問題があって、そのことをお互いにわきまえながら、本当の自分たちの力と言いましょうか、現代的な可能性という課題に向かっていくべきではないかと思います。三つ目は杉本さんの発言にあったのですが、本づくりを目指したほうがいいんじゃないかと思うんですね。それは、『フィールド・ノート』を単に合本するというわけではなくて、こういう研究会の中身を体現していくような、そういう種類の本をつくっていくべき、それを意識して目指してよいのではないかと思います。

お疲れのところで、聞きにくい話をしたような気がいたしますが、今日は午後の時間ずっと、『フィールド・ノート』という非常に貴重な実践をテーマに、かかわった、かかわられた、あるいは読者である方々を含めまして、一堂に会して、こうして丁寧に見解を述べ合うことができました。このことは、本当に貴重な経験だと思いますし、お互いから得たことを、それぞれに持ち帰って生かしていければと思います。そういうことで、お名前を繰り返しはしませんけれども、ご発言くださった12名の方々に改めて全員でお礼として、拍手をお送りしたいと思います。（会場　拍手）

それから、今日のフォーラムの準備に何人もの学生諸君を中心にして、準備にあたってくれました。そういう準備にあたってくれた学生諸君にも心よりお礼を申し上げたいと思います。（会場　拍手）

土曜日という、お互いにとって大変大切な時間、大変ご苦労様でございましたけれども、これで、このフォーラムを終わりにしたいと思います。ありがとうございました。（会場　拍手）

北　垣：　それでは、最後になりますが、長時間に渡り、フォーラムを開催しましたが、これをもちまして終わりにしたいと思います。改めて、今日はお忙しい中、発言の準備、また発言をしていただいたみなさん、それから今日、遠方から、また、地域のみなさん、参加していただきまして、ありがとうございました。最初も申しましたように、こういう機会はこれまでなかなか実現しなかったものです。したがって、今日はこういう機会を持てて、みなさんの顔の見える範囲でお話ができて、わたしたちも非常に大きな刺激を受けました。これからもみなさんに非常にお世話になると思います。本来ならば、最初にお礼を申し上げなければいけないんですけれども、この雑誌がここまで育ってきたのはみなさんが温かく支えてくださったおかげでもあります。改めてお礼申し上げます。また、今後ともよろしくお願いします。またの機会に改めてみなさんにお会いできることを楽しみにしております。今日は本当にありがとうございました。（会場　拍手）

＊1：アップル社製のデスクトップ型パソコン。
＊2：身近な哺乳類であるムササビ、リス、ネズミ、モグラの頭文字をとったもの。
＊3：本学卒業。地域交流センター通信の裏表紙の絵を担当。
＊4：インタビューの様子は、『Field Note Vol.75』P42～44に掲載。
＊5：2013年7月現在『Field Note Vol.72』、2012年3月14日発行。以降の『フィールド・ノート』がPDF化され、公開されています。

活　動　報　告

2012年度

都留文科大学
地域交流研究センター

活　動　報　告

2012（H24年度）

Ⅰ．2012年度の活動について〔概況〕

地域交流研究センターの創設から9年という時が流れ、世間の数え方によると「10周年」ということになるようである。この10年の間、当初から継続されてきたそれぞれの部門活動においても、新たな取組みやメンバーも加わり、新しい10年に向かう大きな心意気を感じた年であった。

ところで、最近、大学の役割とか責務とは、教育・研究・社会貢献であるということを耳にする。2013年3月には、文部科学省による、新規事業「地（知）の拠点整備事業」（COC：Center Of Community）計画が発表された。これまで地域交流研究センターにおいて実践してきた多彩な取組みや活動実績は、地域をフィールドとした研究活動をとおして得た成果を教育に活かし、そして地域に還元するという目標を掲げて活動を続けており、今回のCOC事業の趣旨とは、まさに本センター活動における趣旨そのものであると確信した。2007年度に採択された「特色GP」「現代GP」の2件の実践は、その後のセンターにおける部門活動の柱として、変わらず進化を続けており、改めて、地域交流研究センターにおける一つひとつの活動に対する注目が高まった年であった。

本センターにおける各部門活動に目を向けてみると、フィールド・ミュージアム部門では、センターにおける年間最大行事でもある、地域交流研究フォーラムにおいて、『フィールド・ノート10周年からみえる未来』と題して、発刊10周年、75号を数える「フィールド・ノート」の足跡について、これまで発刊に関わった人、支え続けて頂いた方々が集い、語り合う場として開催できたことは、これから進むべき道すじに対して、関係者一同が志を新たにできた場でもあった。オープン・アーカイブ事業においても新たに都留市立博物館との連携も始まり、デジタル化にむけての作業も引き続き行っている。また、市内小中学校での活用も定着している。

発達援助部門でも、SAT事業での市内小中学校と大学教員の共同によるケースカンファレンスが具体化に近付いたことや、平成22年度入学生が4年生となる来年度から開講される、新たな必修教職科目「教職実践演習」のカリキュラムの主軸として運用されることに伴い、引き続き、大学や教育委員会からの支援を受け、新たな展開に向けて活動している。地域教育相談室においても、継続的に教育委員会主催の研修会や校内研の講師としてスタッフを派遣してきた結果、その研修会の参加者の情報によって相談室の活動が伝わり、その存在や役割がさらに認知されてきていること。地域情報教育においても、引き続き小学校8校、中学校2校のホームページの運用支援を行っている。そして、2011年度から参加した地域美術教育分野の活動においても、引き続き、小中学校の図工・美術担当教員との研究会や研修会を開催した。また、山梨県立美術館との共催により開催した、ワークショップ「アート巣箱を作ろう」では、188名の参加者が集まり盛大に開催された。更に、図工・美術教室と情報センターとの連携による、「たからばこ作戦」の取組みにも大きな期待を寄せら

れている。

暮らしと仕事部門では、引き続き、「農のあるくらし」のテーマに共同学習会の開催や世界と地域を結ぶ講演会を開催してきた。また、学生による農系サークル連合「文大農ネット」の農産物の学内における朝市開催の実現に向けて支援した。

地域交流センター通信も、畑編集長を中心に精力的な取材活動を行い、22・23号を発行した。特集として、22号においては、二つの特集を組んだ。一つ目は「子ども・学校が地域交流を支え促す」。二つ目は。前号に引き続き「地域・故郷を思う」－東日本大震災と私たち－（その3)。また、23号においては、「観察し、聞き取り、表現する」と、それぞれ題し、非常に丁寧な取材を行い、その思いを的確な言葉で表現し、読む者それぞれの心に強く語りかけてくれたことに対し、多くの読者から力強い励ましが寄せられており、関係者に大きな力を与えてくれた。

地域貢献活動においても、これまでの恒例的な取組みに対する参加・支援は継続され、新たに連携する組織や機関も増えている。これまでの着実な取り組みや粘り強い働きかけが実り、本センターが、各部門の活動を組織的にサポートし、継続的に動機付けていく機能を持つことの意義を改めて確認したい。

また、これまでにも、センターにおける活動が拡充するにつれ、スタッフ・体制の拡充を求めてきたが、センター事務局全体の業務運営担当者としては、前年度と同じく、担当者が一年で、アルバイト職員本田祐士氏に変更されたこと。担当正規職員である学生課補佐も変更されてしまった。幸い、二人の新たな担当者の努力により、センター運営業務に対しても、よりスムーズな対応が行われたことに感謝している。しかし、望まれるセンターとしての体制づくりには、まだまだ遠い道のりである。また、センターそのものの活動スペースの確保についても、コミュニケーションホールにおける騒音に対する防護策もないまま、移転も含めた将来的なセンター再編構想に向けて、教育研究審議会に対しても提案し了解されたものの、引き続き粘り強い交渉が求められる。

最後に、大学全体の中での、「地域交流研究センター」の位置づけである。特に、最近は、若手教員による、センターへの研究プロジェクトに対する取組みを通した参加はあるものの、センター活動に関わる教員は、まだまだ一部であると強く感じる。また、学生に対する認知度も非常に低く、「フィールド・ミュージアム」や「SAT」といった個々の活動は知っていてもセンターそのものの存在を知らない学生が多い。今後は、学内の他分野の教員に対しても参加を促していくだけでなく、学内展示を中心に学生に対する広報活動の必要もあるだろう。更に、来年度から都留市文化会館にオープンする「まちづくり交流センター」内への、本センターのサテライト設置を機に、市民に対するより一層の広報活動にも工夫が必要である。今や、地域交流研究センターの役割や期待を考えても、現センターの場所からの移転は喫緊の課題として取り組む必要を痛感する。

改めて、地域との交流は、幅広く、奥深く、そして、多くの可能性があると感じている。

（文責・杉本光司〔地域交流研究センター長〕）

Ⅱ．各部門の活動

Ⅱ－1　フィールド・ミュージアム部門

1　はじめに

地域交流研究センター（以下、センターと記す）発足と同時にフィールド・ミュージアム部門（以下、部門と記す）が位置づけられ10年目の節目を迎えた。前史を含めると30年以上の歴史を積み重ねてきたことになる。「生き生きとした本物の動物たちとの出会い」をもとに、自然だけでなく、人と自然との関係について学ぶという思想は、今なお私たちの取組の根幹を成していることに変わりはない。

本学に部門が位置づけられて以降、私たちは大学を拠点としたフィールド・ミュージアム事業をどのように展開していけばよいか模索してきた。その具体的な取組内容については、部門発足当時に9年間の中・長期計画（「フィールド・ミュージアム研究・研究計画の要旨」2003年）を立て、3年ごとに活動の見直し・検討を繰り返してきた。

フィールド・ミュージアム部門にとって一つの画期となったのが現代GPの採択である（平成19年度　文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」）。この採択により、カジカとカワラナデシコの保全活動や機関誌『フィールド・ノート』の発行、都留文科大学前駅の駅舎を分館として活用する取組、地域の「生きた資料」を記録・保存・共有する「オープン・アーカイブ」などの事業を推進できた。そしてこの現代GP採択により、部門として今後どのような取組を展開していけばよいか明確にできた。「本物から学ぶ」という考え方は維持しつつ、中・長期計画に掲げた取組を有機的に結びつけ、①自然にとどまらず、地域の文化や歴史、人びとの暮らしなどから人と自然との関わりを学ぶ事業。②自然が豊かな本学の立地や、「地域の大学」としての歴史、教員養成系大学としての伝統を最大限に活かした事業。③本学の特色を活かした実践の共感の輪をさらに学内外に拡げていく事業などをこの後、活動の柱としていくこととなった。

本年度は、発刊10周年を迎えた『フィールド・ノート』をオープンキャンパスで増刷し配布したり、富士急行都留文科大学前駅の駅舎での展示に活用したりした。また、カジカとカワラナデシコの保全活動やミュージアム都留との連携事業、美術教室との連携による「アート巣箱をつくろう」の開催、小学校の総合学習などへの参加、環境ESDプログラムと連携した観察会など、本学らしい事業を行なうことができた。

本学の特色を活かした活動ができるのは、前史を含め長期にわたるフィールド・ミュージアムの活動の蓄積とその間に地道に築いてきた信頼関係に基づく人間関係に拠るところが大きい。

東京都御岳ビジターセンター職員による部門の視察など、近年は外部から部門の活動に寄せられる期待も年々大きくなっている。

この報告ではまず、2012年度の事業の内容をそれぞれの課題とともに整理する。なお、以下の各プログラム名は、センター発足時に提出したフィールド・ミュージアム部門の中・長期計画に基づき記した。

2　生きものとの親しみを深める森のキャンパスづくりのプログラム

この事業は、キャンパス内を「自然に親しむ入り口」と位置づけ、学生教育、研究、市民との交流の場として整備していこうとするものである。

2−1　キャンパス内ビオトープ整備

本学の附属図書館に接して設置されたビオトープ（以下、ビオトープと記す）では、尾崎山の尾根の両端を結びチョウやトンボ、鳥などの生きものに親しむ場とすることをテーマに、学生および教員参加のもと剪定や移植、観察記録などの作業を行なってきた。

2012年度は、『フィールド・ノート』の編集に携わっている学生4名と環境科学概論を受講している学生3名が、毎週1回、1時間程度を作業時間に充て継続的な世話をしてきた。ビオトープの植物に解説板があったほうがよいという学生からの提案で、木製の解説板を製作し設置した。植物名と短い解説を記しただけの簡単な解説板だが、ここを行き交う学生や職員には分かりやすいと好評だった。また博物館実習の授業でもこのビオトープの植物や動物についての解説板をつくり設置した。自然観察実習の授業でも、ビオトープを活用して植物の観察や剪定などの実習を行なった。

附属図書館にビオトープが設置されて9年目を迎える。当初移植されたエノキやアワブキ、エゴなども生長し、他地域から鳥によって運ばれたと思われるガマズミなどの種が発芽し植物種も増えつつある。設置当初から植物がどのように変化したか、樹種を中心に2012年度は毎木調査を実施した。

山梨県産のメダカは個体数が激減した。おそらくビオトープの池が一時干上がったのではないかと推測される。水位が急激に下がる原因は不明だが、水辺環境はトンボ類や水生昆虫にとっても重要な生息環境であり、今後は安定した水位を確保する方法を工夫する必要がある。

附属図書館ビオトープでの作業の様子

ヒメガマは、生け花用として活用したいという要望があり、秋の刈り取りの時期に合わせて自由に採っていただいている。また都留文科大学前駅の駅舎内で展示されている生け花にも活用している(4-1参照)。

ビオトープの作業も含め、この場所に関心を持つ学生や職員も増えてきた。そこでビオトープの動植物の魅力を記録・発信する目的で「ビオトープ通信」を14号発行した。

2－2　1号館ビオトープの管理と授業への活用

1号館ビオトープは約40年前に、本学の教員と職員により作られた都留周辺の山地植生を模したビオトープである。ビオトープという言葉の存在すら知られていなかった当時、本学の教職員が山から苗木を採ってきて汗水流して植樹をしたそうだ。本学の歴史とともに歩んできたこの1号館ビオトープは、途中で何度か伐採の危機に遭いながらも、40年経った現在、樹高が20mを超えるブナやミズナラ、モミ、エノキ、ケヤキなどが林立する立派な林となり、夏には天然の緑のカーテンとなっている。先代たちが残してくれたこの林を、教育へ活用するために、初等教育学科の教員と学生が中心となり、授業や課外活動の中で、生物相の調査や自然観察、解説板や展示の作成を行なっている。2012年度も、生物学実験や自然科学実験・観察、専門演習（生態・環境教育）の授業で植物相や動物相の調査、自然観察等を行なった。現在確認されている樹種は65種にのぼり、また林の中のため池には、毎年ヤマアカガエルやギンヤンマが産卵に来ている。今後は1号館ビオトープの生物相の記録を作成し、自然教育の教材研究・教材開発等を学生たちと一緒に進めていきたいと考

えている。

２－３　「リスをキャンパスに呼ぶ会」の取組

附属図書館ビオトープは、尾崎山の両端の尾根を結びチョウやトンボ、鳥などさまざまな生きものが行き来できる空間を創ることを目的の一つとしているが、「リスをキャンパスに呼ぶ会」でも、キャンパス周辺に生息するリスとの出会いを楽しみ、身近な自然に親しむ契機にしようと、クルミの実生をキャンパスに移植する試みを始めている。実がつくまで7～8年ほどかかると思われるが、移植した植物の世話をしながら、学内外にフィールド・ミュージアムへの共感の輪を拡げていきたい。2012年度は、クルミの生長の様子を確認する作業を行なった。順調に生長しているクルミは少なく、ほとんどが構内の草刈りや工事車両の往来、資材置き場の設置などにより行方不明となったものが多い。今後はクルミの実生があることを際立たせるような工夫が必要となる。

附属図書館ビオトープ、一号館裏のビオトープにもクルミが実る

２－４　「テントウムシを見守る会」の取組

本学の自然科学棟や2号館には毎年、多数のテントウムシが越冬に訪れる。テントウムシは私たちに馴染みの深い昆虫でもある。こうしたテントウムシに日ごろから関心を寄せ、学生・教員・市民とともに注意深く観察し、身近な自然の動向を見守っていきたいというのがこの会の活動の目的の一つである。

二号館で越冬するテントウムシ

2012年度は、初等教育学科3年の鈴木陽花さんと初等教育学科4年の砂田真宏君が自然科学棟で越冬するテントウムシの観察を行ない、ピーク時に1600個体を数えた（『地域交流研究センター通信』23号、17頁参照）。

この取組は、テントウムシという身近な昆虫だけに学生・教員・市民による協同の調査へと発展しやすい。それは地域の自然の動向を知る手がかりともなるため、テントウムシを対象とした市民参加型の調査の可能性も今後は探ってみたい。

２－５　「ムササビの森」におけるライブカメラ構想

本学のキャンパスにある「ムササビの森」では、現代GPによりライブカメラ構想の整備が進んだ。森が良き観察者を育て良き観察者が森を育てる、という考えのもと、ムササビの生態を昼間、構内のモニターやインターネット上で多くの学生、市民に見て頂き、多くの目を通してその暮らしぶりを明らかにし、「ムササビの森」を皆で見守り育てていこうというのがこの構想の目的である。

2012年度は、ライブカメラの電波を受信する装置が落雷により故障し、映像が見られない状態が続いた。

ムササビは、本学のフィールド・ミュ

ライブカメラのメンテナンスの様子

ージアムの象徴的な存在である。キャンパス内でそのムササビが生息しているというのは、本学にとっても大きな財産であろう。ライブカメラ構想により、キャンパス内に生息しているムササビを大学が大切に見守っているということを内外にPRする契機となる。また、地域の小中学校に映像を配信することで授業での活用も可能となる。さらに本学の授業や観察会などでも活用が期待できる。

2－6　『フィールド・キャンパスだより』の発行

キャンパス内の動植物を本学の自然財産と位置づけ、それらを授業の教材として、また地域の自然を評価する資料として活用することを目的として2003年から発行を継続している。月に1度、250部を印刷し希望者に配布している。また、赤外線センサーカメラも利用し、キャンパス周辺の哺乳類・鳥類の紹介も始めた。

これらの写真や撮影データは、「オープン・アーカイブ」（5-1参照）に保存し将来、誰もが活用できるように整理・保存をしている。

この『フィールド・キャンパスだより』の存在をより広く知って頂くためにも、本学のホームページ上に公開したり授業で配布するなど活用方法を検討していきたい。

2－7　「ムリネモ」（ムササビ、リス、ネズミ、モグラ）との出会いの場づくり

樹上生のムササビ、リス、地上生のネズミ類、地下生のモグラ類と出会うための場所・観察装置をキャンパス内に設置している。2012年度は、都留子ども教室でも活用した。自然科学棟2階に設置した観察装置（エンカウンター・スペース）は、教室の窓から観察が可能であり、今後、授業や市民講座などでの活用も期待できる。

近年、フィールド・ミュージアム部門の活動への関心が高まり、視察を希望する団体も増えつつある。こうしたとき、私たちが身近な自然をテーマの一つとし、動物の暮らしを尊重した観察の方法を工夫してきたことを具体的に示すことができる一例が、このエンカウンター・スペースである。したがって、今後は常時、こうした動物に出会えるような場所の整備を継続していきたい。

モグラ類の一種、ヒミズの観察装置とヒミズ

3　地域の知恵に学ぶ環境復活のプログラム

3－1　中屋敷における農作業の実践

十日市場の中屋敷フィールドは、大学から徒歩で20分の位置にある。ここでは、学生が中心となり荒廃した果樹園の手入れや田植え、麦作りに取り組んできた。農作業を通して地域の暮らしや知恵を実地に学ぶことを目的としている。また、イノシシやシカなど大型獣との共生のあり方を検討することも大きなテーマとな

中屋敷フィールドでの農作業の様子

っている。2012年度は、田植えと麦づくりに代わり、これまで取り組んでこなかった畑作に取り組んだ。参加した学生からは、「初めは畑のことばかり気になっていたが、この畑にやってくる生きものの観察にも興味が出てきた」、「一年通い続けるうちに、畑のある場所というよりも、わくわくするようなことを探しに行く場所になった」といった感想が寄せられた。

4　学内のほかの団体との交流プログラム

4－1　駅舎を活用した交流

富士急行線都留文科大学前駅の駅舎内で展示されている生け花は、本学の華道サークルの出展の場となっている。駅を利用する学生や市民にも好評で、定期的に展示替えされる生け花を楽しみにしている駅利用者も多い。この華道サークル

駅舎を活用した展示活動。華道サークルの生け花展示もある。

との交流は2011年度から継続している。

また本学には「うら山観察会」を主催している団体がある。市内で小学校教員をしておられる小口尚良氏が学生とともに開催しており、現在は公民館活動のプログラムの一つとなっている。こうした団体の展示物を駅舎内で展示するといった交流の方法も今後検討してもよいだろう。

5　行政、企業、市民団体などとの連携プログラム

5－1　市立図書館との連携事業

例年、秋の読書週間にちなみ都留市立図書館閲覧室で展示を行なってきたが、2012年度は都留市立図書館の耐震補強工事もあり展示事業は行なわれなかった。しかし、都留市立図書館の人のつながりやネットワークを活かした展示活動は、フィールド・ミュージアム部門の活動の幅を広げるためには重要なものであり、今後も継続していきたい。

5－2　富士急行株式会社との連携事業

都留文科大学前駅の駅舎は、フィールド・ミュージアムの分館と位置づけ、富士急行株式会社と連携して、大学周辺の自然や人の暮らし、文化を紹介する展示を行なっている。2012年度からは、『フィールド・ノート』の編集に参加する学生により、機関誌の誌面から紹介したい記事を選び、展示活動をしてきた。キャンパス周辺に生息するムササビやリスといった身近な動物の食痕など実物標本も展示した。これらの展示替えは月1回のペースで行なった。

授業と連携し、博物館実習では夏期の実習の成果をここで展示した。この展示製作に参加した学生からは、「今回の展示後に知人から作品可愛かったよ。」などたくさん声をかけてもらい、学芸員のやりがいを感じることが出来ました。展示作品の配色や解説の内容を考えること

博物館実習の授業と連携し、製作したパネルを駅舎に展示した

は大変でしたが、作品を見た人の反応を考えるだけでわくわくしました」、「学芸員の資格を取るにあたって、今回のように学外で展示をすることは多くのかたがたに見てもらえ、授業での学びの成果が具体的に実感できる点でも非常に有意義な経験となりました」といった感想が述べられている（『地域交流センター通信』23号、22頁参照）。

駅舎の駅員のかたも室内の掃除や改札での情報案内など、博物館での学芸員あるいは解説員のような役割を果たして頂いている。また、この駅舎では、部門の機関誌である『フィールド・ノート』を毎号、見本として置いている。

５－３　三の川ビオトープ作業

都留市環境創造室と都留市環境保全市民会議とともに、都留文科大学前駅に隣接する土地にビオトープを設置している。ここで2012年度もヒャクニチソウ、ブッドレアなどチョウの吸蜜植物となる

三の川ビオトープ。富士急行都留文科大学前駅に隣接した場所にある。

植物を育て、維持・管理をしてきた。また水場では、山梨県産のメダカも育ててきた。このビオトープは、駅舎に隣接しており、駅利用者だけでなく多くの市民の散歩コースにもなっている。本学の附属図書館ビオトープの考え方に即して、身近な自然と親しむ入り口として今後も整備していきたい。今後は、駅舎の展示コーナーにも足を運んでもらえるよう、掲示板を利用した展示活動にも力を入れていきたい。

５－４　見沼フィールド・ミュージアムとの交流

2012年度は、都留文科大学の元学長の大田尭先生のご自宅で開催されている見沼フィールド・ミュージアムの勉強会への出席はできなかったが、部門の機関誌『フィールド・ノート』を毎号、20部お届けし、勉強会の参加者に配布していただいた。

５－５　郷土研究会会員との「富士道を歩く会」の取組

郷土研究会は、1976年に発足し、現在会員約100名で活動している。すでにミュージアム都留との協力事業として古文書教室、歴史教室、民俗教室などを開催している。また研究会の会員が研究成果を発表する『郡内研究』は、毎年刊行され、地域の文化や歴史などの研究成果を長年にわたり蓄積してきた団体である。その会員と2012年は毎月1回のペースで富士道を歩いた。「富士道を歩く会」は、フィールド・ミュージアムと郷土研究会との協同事業と位置づけ2012年5月からスタートした。

参加者は『フィールド・ノート』編集に携わる学生と郷土研究会の有志である。参加した学生からは、「この先、経験豊かな先達たちから学べることは、どんなにか多いことでしょう。史跡に関連する一つひとつの事象を拾うだけに留まらず、それらを総括してどう見ればよいのか。そういった視点も少しずつ学んで

「富士道を歩く会」は、毎月1回のペースで開催されている。

いければと思っています」といった感想が寄せられた（『地域交流センター通信』22号、42-43頁参照）。

5－6　ミュージアム都留との連携事業

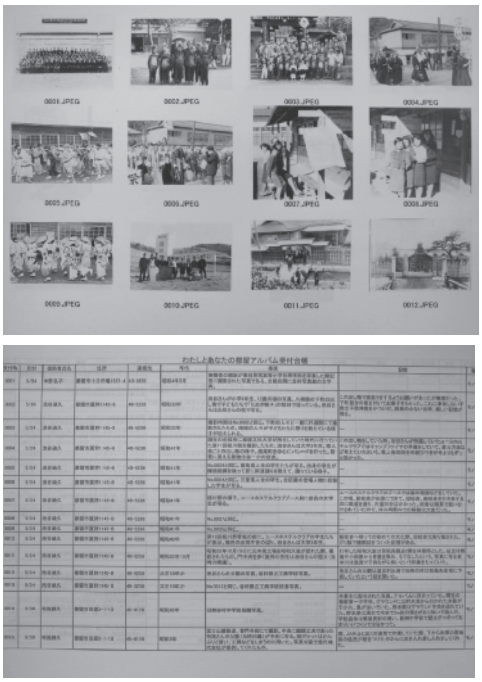
ミュージアム都留と2011年から話し合いを続け、部門と連携協力を推進する構想として「わたしとあなたの都留アルバム」事業を具体化させた。この事業では、ミュージアム都留が窓口となり、都留市内で撮影された歴史や生活、自然の移り変わりを物語る風景写真や地域の暮らしぶりが伝わる写真などを市民から募集し、部門のアーカイブでデジタル化、データ・ベース化の作業を行なっている。2013年1月現在で、628点の写真を市民から提供いただいた。

地域の写真は、それにまつわる記憶を呼び起こし、新たな交流の場面を創り出す働きもある。単に写真を集めるだけではなく、記録には残りにくい生活の記憶などを丁寧に記録していきたい。今後は、これまでの貴重な資料を企画展で活用したり、アーカイブ資料目録として刊行することを検討している。

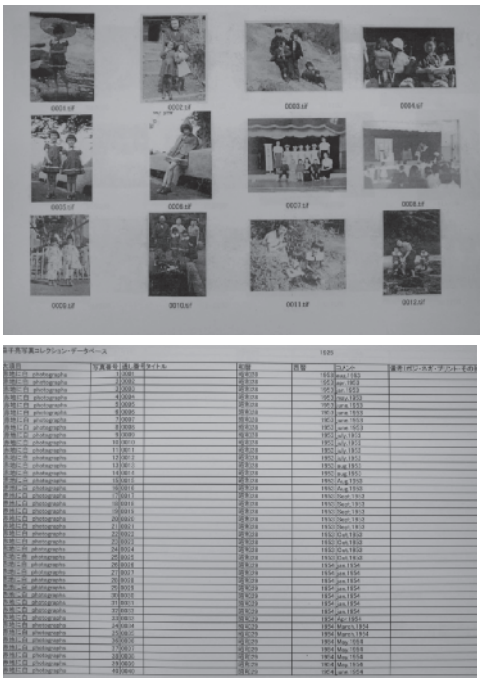
6　資料の整理と保存、公開のプログラム

6－1　オープン・アーカイブ

この事業は、地域で過去から現在までに撮影された写真や人びとが暮らした生活の記憶、自然関連の標本資料など、貴重な地域の資料を保存し、データ・ベース化することで、誰もが活用できる資料



ミュージアム都留との連携事業として、市民から提供された都留市内の写真のデータ・ベースを製作している。



『奥隆行写真コレクション』に続き、益子亮氏が都留で撮影した写真のデータ・ベース化の作業にも取り組んでいる。

にしようという試みである。既に刊行した『奥隆行写真コレクション』に続き、都留市在住の益子亮氏の資料のデジタル化を行なった。これらの成果は、2013年度に目録として刊行の予定である。現在は、ミュージアム都留と連携した写真のデータ・ベース化作業にも取り組んでいる（5-6参照）

フィールド・ミュージアム部門が収集してきた哺乳類の剥製や骨格標本、食痕などさまざまな標本類を、市内の小中学校の理科教材としても活用できるよう、標本資料のデータ・ベース化作業も継続している。

7　学生・教員・市民の参加のプログラム

7－1　機関誌『フィールド・ノート』の発行

創刊10年目を迎え、年4回、73～76号を各号400部発行した。7月のオープンキャンパスでは、これまでの記事を集めた特別号を編集・発行し配布した。

本誌は、部門の機関誌と位置づけられており、学科、学年の枠を超えて学生が主体的に参加している。また、編集に参加する学生は、『フィールド・ノート』だけではなく、ビオトープ作業、展示作業にも参加しており、フィールド・ミュージアムの担い手ともなっている。

冊子講読を希望する読者は多く、現在150部を郵送している。市民からの講読の問い合わせも増え、残部が少ない状態が毎号続いている。市内では、市立図書館やミュージアム都留、都留文科大学前駅駅舎内、喫茶店にも置かれ、本学のホームページでも閲覧できるようになっている。

2012年度は、「土」（73号）、「音」（74号）、「観」（75号）、「継」（76号）を特集した。編集に参加した学生は、「読者の方からも時々、10年間続いているのに、まだまだいろいろな都留の一面を見ることができるのがすごいといった感想をいただきます。毎号毎号の記事の内容は自然の変化から人びとの営みまでさまざま。どんなに日常のありふれた情景でも、立ち止まってじっくり何度も見つめることで、何かしらの発見があったり、気になるできごとに出会ったり、と見えてくるものはたくさんあります」といった感想を記している（『地域交流センター通信』23号、19頁参照）。また、読者交流会も学生の企画で実現し、2回開催した。

就職活動をしている3年生と4年生は、この冊子を持参している。成果として形になっているため説得力があり、また企業の人事担当者からも高い評価を頂くようになってきた。

2013年2月2日の地域交流フォーラムは、『フィールド・ノート』の10周年をテーマに『フィールド・ノート10周年からみえる未来』と題して2102教室で開催された。このフォーラムの参加者からは、「わたしたち読者は、フィールド・ノートを通して、学生さんがたどった軌跡を一緒にたどったような感覚になれるのです。発見して、興味を持ち、観察して、ふれあい、調査して、考察して、まとめあげるという一連のわくわくを共有させてもらえて、しかもその対象がとても身近な存在であるというところが、面白いなぁと思うのです」と感想を寄せていただいた（『地域交流センター通信』23号、20頁参照）。

2012年度に発刊された『フィールド・ノート』。オープンキャンパスでの特別号を発刊したため、5号を刊行した。

7－2　自然観察会

部門では、市民と学生が直接交流できる貴重な場として自然観察会を開催している。また、この自然観察会は、本学の環境ESDプログラムとも連携した事業でもある（8-1参照）。2012年度は、5月20日、7月7日に開催した。

自然観察会の様子

7－3　カジカとカワラナデシコの保全活動

2012年度より、全国的にも絶滅が危惧されているカジカとカワラナデシコの保全のための活動を、学生とともに行なっている。これまでの学生たちによる研究の結果、都留市内における両種の生育地は、昔の分布域に比べ大幅に減少していること、個体数減少の要因としては、湧水の減少による水温の上昇や、河原の撹乱頻度の減少などによる生息条件の悪化によることがわかっている。2012年度は、2011年度の大型台風による洪水撹乱の1年後に、カジカの分布と生息環境にどのような変化があったのかを調べた。その結果、カジカの個体数は洪水によって減少した形跡はないが、河床材の粒度組成に台風の前後で変化があったことがわかった。また、カジカは拳大から人の頭大の浮き石の下に好んで生息する傾向があり、洪水によって運ばれた土砂で石が埋められてしまうと、カジカが生息できなくなる可能性があることもわかった。カジカを保全するためには、水温とともに河床材の組成にも配慮すべきことが過去5年間の研究で明らかとなった。カワラナデシコに関しては、都留市鹿留川の相川プレス工業敷地内の群落において、訪花昆虫と種子生産量の関係について調査を行なった。その結果、小型のハチ・ハエ類がカワラナデシコの花粉媒介者として大きな役割をしており、これら花粉媒介者による訪花回数が多い花ほど種子生産量が多い傾向があった。すなわち、カワラナデシコの保全のためには、カワラナデシコだけでなく昆虫相も含めた生態系全体を保全する必要があることが示された。

2012年度はカジカとカワラナデシコの研究を始めて5年目という節目の年だったので、これまでの研究成果を市民に還元し、カジカやカワラナデシコをはじめとした地域の生きもの保全活動につなげていきたいと考えた。幸い、都留市環境保全市民会議および都留市環境創造室の協力によって、2013年2月18日にぴゅあ富士において「カジカ・ナデシコ保全のための講演会」を開催することができ、学生・教員、行政・市民の間で、今後どのように保全活動を行なっていくべきかを話し合った。今回の講演会では、実行可能な組織案やプランを策定するには至

カワラナデシコの調査風景

カジカの調査風景

らなかったが、このように少しずつ共感の輪を拡げていくことが大切なのだと思う。

2013年度は、カジカ、カワラナデシコの両種について、戸沢川と鹿留川だけでなく、都留市の他の地域における分布や個体群の特徴を明らかにし、今後の保全活動のための資料作りに役立てたいと考えている。また小・中学校で利用可能な環境教育のための教材（地域の生きもの保全）の開発も行なっていきたい（『地域交流センター通信』23号、8-9頁参照）。

8　カリキュラムとの連携

8－1　「地域交流研究Ⅱ」、「地域交流研究Ⅳ」、「博物館実習」、環境ESDプログラム

2012年度は、「地域交流研究Ⅱ」（担当：西教生非常勤講師）と「地域交流研究Ⅳ」（担当：北垣憲仁）が継続して開講された。「地域交流研究Ⅱ」では、「生きもの地図をつくる」をテーマに、身近な生きものを対象とした観察、調査、データのまとめ、展示による成果の発表を行なった。「地域交流研究Ⅳ」では、『フィールド・ノート』の実践を参考に、地域を歩き、話を伺い、観察し、記事にまとめるという一連の編集作業に取り組んだ。その成果は『Color』と題した冊子としてまとめ、インタビューした市民のかたがたに配布した。

この授業は開講から7年目となるが、今年度も全学科から15名の受講者があった。それぞれが地域で興味のある人を選び、インタビューをし、毎授業でその記事を受講者全員で読み、校正を繰り返して記事を完成させた。毎回の授業で記事を書き直すなど受講者にとって緊張の続く作業であったが、受講者全員が記事を仕上げた。

このほかに、「博物館実習」では実習の成果を展示として都留文科大学前駅の駅舎内に展示した（5-2参照）。

地域交流研究Ⅳで制作した『Color』。授業の受講生が自ら取材をし、記事を完成させた。

またカリキュラムとの連携のなかで重要な事業が、環境ESD（Education for Sustainable Development）プログラムの一環としての観察会である。このプログラムは、持続可能な発展のための環境教育を推進すべく、本学独自の認証プログラムを2011年度からスタートさせたもので、現代GPの大きな成果の一つでもある。部門でも当該プログラムの実習先として学生を受け入れており、2012年度は、1名が参加した。観察会は、5月20日、7日7日、12月18日の3回実施し、12月18日は、附属小学校で親子対象のムササビ観察会を開催した。参加した学生からは、「自然観察会を通して、私は都留の自然の素晴らしさだけではなく、それをみんなで分かち合うことの楽しさを感じました」という感想が寄せられた（『地域交流センター通信』22号、40頁参照）。

9　上記以外のプログラム参加

上記のほかに、次のような事業を行なった。

9－1　2012年5月27日：都留市立旭小学校親子環境学習会に講師として参加

都留市立旭小学校で毎年開催されている「親子環境学習会」に参加した。旭小

旭小学校での講演後、子どもたちがモグラの剥製に興味を示す。

附属小学校での総合学習の様子

学校は、石船神社に隣接している。この石船神社は、ムササビの保護運動を通じてフィールド・ミュージアムが構想された場所でもある。「身近な動物との出会いを楽しむ」というテーマで、全学年の子どもと保護者を対象に、ムササビやリスなどの生態や剥製などを使った講演を行なった。子どもからは、「旭小学校のまわりにもたくさんの動物がいることがわかってよかった。ムササビをもっと大切にしようとおもった」という感想が述べられた（『地域交流センター通信』22号、26頁参照）。

9－2　2012年5月29日、6月25日、7月9日、9月26日、11月1日：都留文科大学附属小学校での総合学習の授業参加

4年生（15名）を対象とした授業を展開した。自然本来の生き生きとした姿に接することのすばらしさを子どもたちと共有したいという思いからこの実践は始まった。今年度で2回目となる。学校に隣接した森をムササビやリス、野ネズミ、モグラと出会える森にしようという内容だった。子どもたちは、野生動物に間近に出会うことで、餌やりや観察日記に自発的に取り組むようになった。また観察した話題を友だちや教員に話し、分かち合うことで学習を深めていった。リスを観察していた子どもたちは、次第にリスの体の特徴や動きから、リスにもそれぞれ個性があることなどを発見していった。最後は、12月18日に環境ESDプログラムの観察会の一環として親子対象のムササビ観察会を附属小学校で実施した（『地域交流センター通信』、22号、20-23頁参照）。

9－3　2012年7月1日：都留市放課後子ども教室との連携

都留市放課後子ども教室と本学の公開講座とが連携した初の試みで、親子参加型での講座となった。テーマは「都留は自然の博物館」である。大学の裏山を歩き、その後、自然科学棟の実験室で剥製や食痕を使い、ムササビやリス、野ネズミ、モグラなど身近な哺乳類の魅力を紹介した（『地域交流センター通信』22号、25頁参照）。

子ども教室は野外と教室で行なった。

９－４　2012年7月15日：美術教室、山梨県立美術館学芸課教育普及との連携のもと地域の小学生などを対象としたワークショップ「アート巣箱をつくろう」に参加

芸術の分野との連携の重要性は以前から部門内でも認識されていた。今回、その初の試みとして美術教室とフィールドミュージアム部門の連携による事業として取り組んだ。今回の企画では、本学周辺に生息するさまざまな野鳥の様子を想像して巣箱に描く「アート巣箱」を作る、というものであった。当日は予想をはるかに超える152名の参加者とボランティア36名が集まった。反響の大きさや生き生きと絵を描く子どもたちの反応からも新たな地域貢献の試みとして部門としても大きな意味を持つ企画であることが伺えた。これはフィールド・ミュージアムの可能性をさらに拡げる連携であり取組である。今後もこの企画を契機に芸術の分野との連携も大切に育んでいきたい（『地域交流研究センター通信』22号、14-15頁参照）。

「アート巣箱をつくろう」で巣箱に絵を描く子どもたち。

９－５　2012年7月10日、11月9日：山梨県立北杜高校において出前講座

近年、出前講座による講師依頼が増えてきた。北杜高校では、前年度に引き続き、2回目の出前講座となった。2年生の「自然環境」、「地域社会」分野の生徒31名が受講した。テーマは、「ムリネモの森へようこそ」とし、身近な野生動物に焦点をあてて本学でのフィールド・ミュージアムの取り組みの成果を紹介した。「生きものを大切にしたい」、「ほかの生きもののことを考えて生きていかなければならないと感じた」などの感想が寄せられた（『地域交流センター通信』22号、27頁参照）。

９－６　2012年7月21日：オープンキャンパスへの参加

オープンキャンパスに『フィールド・ノート』（7-1参照）を増刷し配布した。配布した『フィールド・ノート』は、過去の記事から都留文科大学に関心のある高校生が興味をもつ記事を選び、特別版として印刷した。また、3号館を起点としたキャンパスガイドツアーを『フィールド・ノート』の編集に携わる学生が担当した。毎年、このガイドツアーは好評で、このツアーに参加し本学に入学した学生が『フィールド・ノート』の編集部に2名入り活躍している。

毎年、オープンキャンパスで『フィールド・ノート』の学生が案内するキャンパス・ツアーは人気である。

９－７　2012年10月5日、10月24日：谷村第一小学校の生活科の授業に参加

10月5日は、2年生の生活科の授業で講師として参加し、夏休みに子どもたちが集めた「セミの抜け殻」を使ったマッ

附属図書館ビオトープでメダカについての話を聞く谷村第一小学校の子どもたち。

プづくりを行なった。このセミの抜け殻による地図づくりは、平塚市博物館で既に実践があり、街の自然の様子をセミの抜け殻から考えてみようというものである。完成した地図から分かることなどを子どもたちが発表した。また10月24日には、「秋の町探検」というテーマで、本学の附属図書館ビオトープでメダカの生態を観察、解説した。この解説には、『フィールド・ノート』の編集に携わる学生が参加した（『地域交流センター通信』23号、7頁参照）。

9－8　2012年11月20日：東京都御岳ビジターセンター解説員の訪問の受け入れ

東京都御岳ビジターセンターでは、本学のフィールド・ミュージアムの取り組みを参考に、フィールド・ミュージアムを展開していこうとしている。その解説員のみなさんを対象に、フィールド・ミュージアムの取り組みを現場で説明した。視察したのは、都留市の石船神社、都留文科大学前駅の駅舎の展示、附属図書館ビオトープである。その後、自然科学棟の教室を使用して取り組みの概要の説明と意見交換会を開催した。「地域のなかに根ざした活動を作り上げるためには、じっくりと時間をかけ関わりを深めることが大事であることを実感した」、「都留での取り組みを具体的に見せて頂いたことで、自分たちの今後の取り組みの形がイメージできました」といった感想が寄せられた（『地域交流センター通信』23号、13頁参照）。

東京都御岳ビジターセンター職員がフィールド・ミュージアムを視察した。

10　2013年度のおもな事業

昨年度取り組んだ事業は基本的に継続する。部門発足当時に策定した中・長期計画も想定していた9年間が終了するため、2013年度は新たな中・長期計画を立てることが課題の一つとなる。また、部門の取り組みをさらに学内外に広報していくために、パンフレットなどの印刷物も製作したいと考えている。

11　まとめ

2012年度もほぼ当初の計画通りの事業に取り組むことができた。長年にわたって築きあげてきた地域の人とのつながり、試行錯誤のなかで練り上げてきたフィールド・ミュージアムの思想、現代GPによるさらなる事業の推進と展開、学生・市民・教員・職員の幅広い参加といったものがなければこのような取り組みはできなかったにちがいない。

2012年度の事業を振り返ってみると、本報告にあるどの事業も、地道な取り組みが着実に成果を挙げつつあることがわかる。また小学校や高校などからの授業、出前講座の依頼も増えた。また芸術の分野との連携も試みることができた。こうした新たな事業は、本学の地域の大学と

しての歴史や教員養成系大学としての伝統を活かした実践的な教育活動になるとともに、フィールド・ミュージアムの可能性をさらに広げる取り組みとなる。現時点で、本稿で報告した取り組みは本学の特徴や自然に囲まれた立地を充分に活かした特色ある事業になっていると言えるだろう。それが外部からの視察などフィールド・ミュージアムへの高い評価と関心に現れているのではないだろうか。

2011年度の活動報告（『地域交流研究年報第8号』）でも記したが、私たちはむやみに事業を増やそうとは考えていない。各事業を常に点検し、有機的に結びつけながら部門の身の丈にあったものへと仕立て直す努力は怠りたくない。

だが課題もある。まず施設の問題である。標本室（現在は大哺乳類展で使用した標本類などを自然科学棟2階の部屋をお借りしている。標本の保存には除湿が必要である）や展示コーナー（附属図書館の展示スペースが現在使用できないため、フィールド・ミュージアムの展示は富士急行都留文科大学前駅の駅舎を活用している）、交流スペース（現在、各種講座などは自然科学棟2階の実験室を使用させていただいている）などが分散しているため近年増加している視察希望に充分に応えられない。また騒音問題も解決していない。効果的にフィールド・ミュージアムの事業を展開していくには施設問題も検討していく必要がある。

つぎに専門的な技能をもった専門職員の配置の必要性についてである。フィールド・ミュージアム部門の事業は長い時間を視野に入れた長期にわたる継続的な取り組みが重要となる。また地域の自然の動向を調査し記録し、市民共有の財産にしていくには、地域との繋がりが強い専門的な技能をもつ職員の配置が不可欠である。

さらに、フィールド・ミュージアムの活動の広報も課題である。学外での評価は高まっているものの学内で部門の取り組みを知っている学生はまだ多くない。展示や広報の方法を検討し、さらに多くの人びとに活動を伝え共感の輪を拡げていくことが私たちの課題の一つである。

（文責・北垣憲仁、坂田有紀子）

Ⅱ－２　発達援助部門

Ⅱ－２－１　SAT事業

１　SAT活動の目的

SAT活動の概要を簡単に述べると次のようになる。

これは都留市教育委員会の協力の下、市内小中学校に対して学生アシスタント・ティーチャー（SAT）を派遣し、放課後の学習支援（Aタイプ）と、授業時間中に教師と共にT・Tのひとりとして活動する（Bタイプ）、「不登校傾向」「障害」等による困難をもつ子どもへの個別的な支援を行う（Cタイプ）ものである。活動の領域と内容にそれぞれちがいはあるが、いずれも重層的な「子ども体験」を学生がくぐって、それを「言語化」することを通じて「反省的な実践家」としての教師の姿勢を身につけていくことを目的とする。

また、運営にあたっては運営協議会を設けて、都留市教育委員会・大学・小中学校の三者が協力して行っており、このような学校間連携・ネットワークの構築も地域を基盤とする新たな教師養成教育の試みでもある。

今回の報告は、都留の教育現場に定着したSAT活動の近況をふりかえる。

2　活動の内容

昨年（2011年）度は市内ほぼすべての学校においてA・B両タイプの活動を行なった。なお、Cタイプについては一定の専門的知見が必要なこともあり、臨床教育学専攻学生のみの活動となっており、子どもの状態増に合わせた適切な支援が必要なこともあって、年度当初に各学校から出される要請を勘案しながら学生を配置している（下表参照）。

都留市SAT運営委員会では昨年度の総括を、2013年2月1日に行った。例年同様なことが出されるが、子どもにとっては教師以外のおとな(それも比較的年齢の近い)とともに活動し、学ぶことは新鮮であり、授業とは異なる学び方を経験できたことが、報告されている。

また、学生にとっては、教育実習とは異なる角度から、子どものようすを学び、授業づくりの難しさを知る良い機会となっている。また、各学校に配置されているSAT担当の教師たちが、メンター的な役割を果たしてくれており、学生たちが教師のしごとの難しさや忙しさとともに「やりがい」を見出していく姿が見られた。

こうした学生たちの姿に対して、「現場」からは「いろいろなレベルの子どもたちがいる中で、よく頑張っていた。意欲が持てるように工夫していることも良かった。終わってからも子どものがんばりを認めるお手紙を書いてくれて、子どもたちは喜んでいた」という声や「子どもたちへどう指導すればいいか真剣に考え、指導していた」等のように、好意的な評価が得られた。

一方で、課題としては、今日の現場の忙しさのなかで、打ち合わせの時間が十分とれないという声は、学生、教師の双方から毎回出されており、この問題をどのように乗り越えていくかは、重要な問題となっており、今後も双方で具体的な解決策を探っていくこととした。

また、もうひとつの問題は、週に1度しかないSAT活動のなかで、「子どものことがどこまでわかるのか」「自分がどこまでかかわってよいのか」という学生の悩みも顕在化している。しかし、こうした悩みはむしろSAT活動がこれまで以上に充実してきたからでもあり、学生が「単に役に立った」「おもしろかった」というだけに終わらせずに、どのような教師像を描いていくのかを考えるひとつの

平成24年度SAT派遣学生数実績

	学生数（延人数）							活動数（延回数）						
	前　期		後　期		合　計			前　期		後　期		合　計		
	A	B	A	B	A	B	C	A	B	A	B	A	B	C
谷村第一小学校	12	15	3	15	15	30	5	10	88	10	119	20	207	77
谷村第二小学校	3	10	3	9	6	19		18	99	23	68	41	167	
文大学附属小学校		6		5		11	4		44		45		89	77
東桂小学校	13	12	10	13	23	25	5	102	117	85	147	187	264	97
宝小学校		7		5		12			51		44		95	
禾生第一小学校	2	11	1	8	3	19	5	9	107	4	83	13	190	101
禾生第二小学校	5	1	1	6	6	7	4	40	8	11	81	51	89	80
旭小学校	8	3	8	3	16	6		74	24	62	24	136	48	
都留第一中学校	8		8		16		1	44		39		83		25
都留第二中学校		5		4		9			27		30		57	
東桂小学校	5	7	4	9	9	16	2	35	48	42	117	77	165	2
小計	56	77	38	77	94	154	26	332	613	276	758	608	1,371	459
合計	133		115		274			945		1,034		2,438		

契機になっていることの表れである。以　　下にそのような学生の声を掲げておく。

（文責・佐藤　隆）

自分がこれから目指していきたい教師像について、SATでの経験を踏まえながら述べる。

私は今年1年を通して、同じ一つの学級に関わってきました。実際に行った回数は多くなかったのですが、回を重ねるごとに、多くの子どもたちと話をしたり、学習の手助けをすることはスムーズにできるようになりました。ですが、子どもたちと私の間に「信頼関係」が築けていたか、という点では疑問を感じています。

教室掃除の指導をしていた時、子どもたちの中で「いかに効率的に掃除をし、早く終わらせるか」ということがブームになっている時がありました。少々作業に荒い点があるものの、子どもたちなりに工夫して掃除を効率的に頑張ろうしていることは悪いことではないと感じたので、私はその子どもたちを止めませんでした。しかし掃除も終盤になったとき、黒板を隅々まで丁寧にしている子に対してほかの子どもが「早くやれよ」と責め立てる状況になりました。その時私は、まじめに丁寧に仕事をしている児童がそのことを責められることは間違っていると思いながらも、責めている子どもたちを止めることができず、結果、丁寧に掃除をしていた児童には嫌な思いを抱かせてしまいました。このことを担任の先生に相談したところ、「子どもたちと信頼関係を築けてから、厳しい指導した方が良い」といった言葉を頂きました。この言葉を頂いて、私は子どもたちと信頼関係を築けていなかったのだな、と実感しました。

子どもたちは私のことを「頼ってくれる」ことはありましたが、「信頼していた」かどうかという点はまた別問題だったと感じています。そして私自身も、子どもたちのことを信じ切つてはいませんでした。このような中途半端な関係を基にして指導をしていっても、指導する側にも遠慮が生まれ、本当に子どもたちの心に響く指導にはならないと思います。

教師として子どもたちと関わっていく時には、まず信頼関係を築くことが第一だと、1年間のSATを通して改めて強く感じました。そしてそのためには、子どもたちの話をよく聴くことは欠かせませんし、また授業も分かりやすく、魅力的でなければなりません。子どもたちとより良い関係を築いていくために、常に自分の指導や態度を見つめ直し続けることが出来る教師でありたいです。

わたしは、SATを通して子どもたちと関わる中で、一人ひとりの子どもに合った支援をすることの大切さを学んだ。一人ひとりをよく観察し、その子に合った支援の仕方を見つけることが必要であり、平等に子どもたち一人ひとりと接することのできる教師になりたいと感じた。また、子どもたちと同じ目線に立ち、子どもの考えや子どもの視点を理解することも大切だと感じた。自分がこの子の立場だったらと、子どもの気持ちになって関わることのできる教師を目指したい。子どもの目線に立つことで、子どもたちが口で言うことと心の中で思っていることは違うのかもしれない。本当はこう思っているのかもしれない。と、子どもの心の声を聴こうという気持ちになる。“子どもの心の声を聴こう”という姿勢がとても大切なことだと考える。視野を広くすることで、自分の反省点もたくさん見つけることができると思う。また、SATの活動を通して、子どもたちは大人の変化にとても敏感であると感じた。子どもたちの前で、「疲れ」や「苦手」などを表情に出さないようにしたいと思う。

そして最後に、子どもとともに成長する教師を目指したいと考える。子どもたちと関わる中で、たくさんのことを考え、たくさんのことを発見することができる。子どもは難しいなと悩むこともたくさんあるが、それと同時にたくさんのことを学ぶことができる。子どもたちから学ぶことはこれからもたくさんあるだろう。自分もたくさんのことを与え、子どもたちからもたくさんのことを学び、ともに成長していきたい。子どもたち一人ひとりと真剣に関わり、一人ひとりを認めてあげ、一人ひとりの気持ちを大切にできる教師になりたいとSATの活動を通して思った。この貴重な経験を、今後に生かしていきたいと思う。

Ⅱ－２－２　地域教育相談室

１　はじめに

地域教育相談室の活動は本年度で10年目の区切りを迎えた今年度もこれまで同様に、以下の①～⑥の活動を行った。なお、活動の概要については（2）（3）（4）に記述した。

①来室、訪問、電話･ファックス・電子メール等による相談活動
②教育委員会等が主催する教職員研修への講師派遣やサポート
③校内研究等への講師派遣及びサポート
④公開教育講座等の研修会の実施
⑤都留市教育研修センターと連携した現職教員メンタルヘルスサポート
⑥その他（地域の教育関連団体からの依頼への対応）

２　相談、研修依頼件数と種別

平成24年度に、地域教育相談室で受けた相談、講師依頼の概要については以下の通りである。①の「その他の事務的対応」とは、講師派遣や研修会のサポート活動に必要な事務的な対応である。②は研修会の内容や進め方についてのアドバイスと事務処理を分けてカウントすることが難しいため、その両方をあわせて集計した。①～④の相談件数をさらに集計した総数を⑤にまとめた。

全体的な傾向として、北麓・東部地域への対応が増加している。訪問によるサポート活動が増加するのにともない、そのための事前対応が必要となった結果と思われる。また、全体の訪問件数は昨年度より19件減少しているが、相談室の現状から70件が妥当と考えているので適正な数に近づいてると考えている。

①電話＆ＦＡＸによる相談活動の概要（担当者が携帯電話で行った対応、ＯＢ支援は除く）

相談内容	地域別対応件数			合計
	北麓・東部	県内	県外	
児童生徒の問題行動についての対応	2	0	1	3
校内研究・調査・研究の進め方や内容についてのコンサルテーション	7	3	27	37
その他の事務的対応	39	6	74	119
合計	48	9	102	159

②メールによる相談活動及び事務処理の概要（応答を１回とカウント）

相談内容	地域別対応件数			合計
	北麓・東部	県内	県外	
研修会の進め方・事務処理	46	60	242	348
学級・学年経営、メンタルヘルスなど	0	1	16	17
合計	46	61	258	365

③来室による相談活動の概要

相談内容	地域別対応件数			合計
	北麓・東部	県内	県外	
研修会の進め方・事務処理	3	1	0	4
学級・学年経営、メンタルヘルスなど	6	2	0	8
合計	9	3	0	12

④訪問による相談活動

相　談　内　容	地域別対応件数			合　　計
	北麓・東部	県　　内	県　　外	
Q-Uによる学級集団の理解と対応のポイント	5	4	12	21
Q-Uの結果に基づく学級コンサルテーション	4	5	26	35
学級集団育成の具体的な方法についての理論と体験	3	3	24	30
その他	2	2	5	9
合　　計	14	14	67	95

⑤形態別による相談活動の概要

形　　態	地域別対応件数			合　　計
	北麓・東部	県　　内	県　　外	
電話　＆　FAX	48	9	102	159
メ　　ー　　ル	46	61	258	365
来　　室	9	3	0	12
訪　　問	14	14	67	95
合　　計	117	87	427	631

⑥ＯＢ支援活動

本年度は依頼がなかったので活動はしていない。

3　教育関連講座・研修会の実施

地域教育相談室主催の公開講座を今年度は、以下のように2回実施した。

1回目は、近年増加し様々な事件の原因にもなっている「ネットトラブル」をテーマとして取り上げた。2回目は、次年度の学級経営スタートに備えるエンカウンターの体験講座で、毎年この時期に実施しているものである。

1）第１回公開講座

①日時と内容：2012年6月8日（金）
18：30～20：15
「中高校生のネットいじめやトラブルの実態と対応のヒント」
講師：本庄勝氏（株式会社KDDI研究所・研究主査・工学博士）

②場　所：都留文科大学2号館2101教室
参加者：56名（教育関係者40名、一般5名、学生11名）

③概　要：まず、「佐世保小6女児殺害事件」「白陵高校ネットいじめ事件」「神戸市私立高校自殺事件」などを例に挙げて「ネットいじめとは何か」について共通理解を図るとともに、ネットいじめの認知件数や社会の対応の現状を説明し、今後、「情報モラル」「ネット上での見守り」「ネットいじめの原因究明」が必要であることを述べられた。続いて、現在子どもたちが利用しているプロフ、ゲスブ、リアルを紹介、会場でインターネットに接続し近隣の高校生のネット利用の実態をライブで提示し、さらに、現在行われて

いるネットいじめの例や調査結果から「学校の様子だけでは判断しにくい」「ネットの見守りは大きな負担となる」などの教育現場の問題点を指摘、ネットいじめやトラブルの予防に向けた新たな取り組みとして、「ネットいじめ防止ツール」の開発が必要であることを述べられた。それを受け、現在開発中のツールを紹介し、その可能性と課題を述べるとともに、「教師の負担を少なくする予防システムを作りたい」「子どもたちが携帯を安心・安全に利用できる通信環境を作りたい」とツール開発者の思いを熱く語られた。会場にはベテラン世代が多く、インターネット環境の進歩について行けていないこと、すぐに「禁止」という結論を出しがちであることについて反省するとともに、講師の本庄先生の「たとえネット上のいじめであっても、日頃の関係性の延長にある」という指摘を受け、学級経営、集団づくりの重要性を痛感した教育関係者が多かったようである。

＜参考＞　参加者の感想（抜粋）

1．大学生の部

・ツールの構造や仕組みに興味があった為、その点について話が聞きたかったです。（男子学生）

・知らないことが多く、知識と言う意味で大きく勉強になった。また、教職を目指すうえで知らなくてはならないことが非常に多いと感じた。子どもの知識と精神的発達が比例していない、知識・技術がとても先行していると考えた。ゲーム感覚と相手がいる現実、架空ではないが、目に見えない世界に対する思いの成長が非常に重要だと感じた。（男子学生）

・サイトを消して関係をリセットするというのは、ゲームのリセット精神が現実ともリンクしてしまい、本当に現実の出来事もゲームのようにリセットできると考えているんだなあと感じ、驚きました。知らなかった現実が色々と見えてきて参考になりました。（男子学生）

・情報システム構築という理系的視点から人間の思考を変容させるということは非常に興味深い内容であったと思います。文系の視点から社会と情報について考えたいですが、本講演の内容は非常に参考になるものでした。本当にありがとうございました。運用上の問題もあるかもしれないとも思いました。（男子学生）

・学生としては、携帯端末を取り上げたり、フィルタリングサービスを設定したりということに反感、抵抗感があった為、本庄先生の立場に非常に感銘を受けました。小さなトラブルはある種、社会経験になると思います。（男子学生）

・知らない事が多くて驚いた。時代の変化とともに私自身の認識も変えていかなければならないと思った。使用経験がない為、当事者の気持ちを理解することは難しいが、少しずつでも意識を深めていけたらと思う。（男子学生）

・いろいろと勉強になりました。今は、Facebook，Twitterを使っていますが、中・高のときにリアル、HPを使っていました。HP上の日記でトラブルを起こしていた友達がいて、その時のぎくしゃくは強烈で（ネット上でこんなにひどいことを言うのか…）今も鮮明に思い出します。なので、今日の講演会は非常に身近な事象でした。やはり、コミュニケーションの基本はFace to Faceだと今日は強く感じました。ありがとうございました。（女子学生）

・知らないことだらけという訳でもなかったけれど、何より実際利用している中高生の感覚が理解できないのが一番問題になると思った。指導する側とされる側の考えをしっかりすり合わせることも指導を行う上で大切になると考えた。先生も何度も言っていたが、道具ではなく使う人に問題

があるからトラブルになるわけで、大人になってもいじめが全くないと言うこともないし、どうやってやめさせるかではなく、どうやって対処するかを考えなければいけないのかと思う。対策が行われると抜け穴を探していこうとするものなので、開発後のバージョンアップまでがんばっていただきたいと思いました。（男子学生）

2．小学校教員の部

・ネット上のトラブルは基本的に表現力、判断力、自己制御力の甘さ、そして、自信のなさから来るものだと感じさせられました。（40代・男性）

・この十年余り、先生方との研究会において情報環境における子どもたち（小5～中3）の実態を調べ、その対応として保護者をからめた「情報学習会」を開いてきました。中学においては生徒指導上の問題が起きるとそれは必ず携帯がありました。最近は中学でも少し落ち着いてきた感もありますが、以前の問題が小学校に降りてくる状況があります。現在は、小学生のネットゲームに関わる問題も出ており、保護者を含めた大人が現状を知り、対応していく責任があります。今回の講演も保護者に聞いて欲しい内容でした。先生が話されるとおり、このツールは犯人探しに使うものではなく予防として使えるものにしていきたいと思います。今の地域、学校と同様に「みんなが知っている」「みんなが見ているよ」という環境にしていきたいです。PTAの会でもいいので機会がもてないだろうかという希望です。（50代男性）

3．中学校教員の部

・すばらしい内容でした。システムの内容には頭が下がります。（30代男性）

・大変興味深く聞かせていただきました。本当の意味での人間関係の大切さを築いていくことの大切さを子どもたちに伝えていくことの重要性を強く感じました。今後の実践に生かしていきたいと思いました。（30代男性）

・学校で起こるネットいじめやトラブルを分析して人間関係を把握できることが分かりました。ありがとうございました。（40代男性）

・ここまで関係性が複雑になっているとは思いませんでした。事例の中で、いくつもあてはまるトラブルの例を経験しました。全て携帯にかかわっているので、教師としても未然に防ぐツールに大変興味を持ちました。また、お話が聞きやすく勉強になりました。講座に参加できて良かったです。ありがとうございました。（40代女性）

・中高校生が使っているネット用語などやサイトの種類などを知ることができて良かったと思う。どのように活用するのがよいのか、見通しをもった話し合いが必要であると痛感した。ソフトが先行していて、その後を一生懸命追いかけているように思えてならない。「言葉の大切さ」や「人間関係の大切さ」がネット利用のために希薄になってはならないと思う。学校で取り組むことだけでなく、保護者が取り組む必要性も強く感じている。（50代男性）

・ネットいじめの実態がよくわかった。ネットいじめの防止ツールについてもっとお話が聞けたら良いと思う。これからの時代を生きていく子どもたちには必需品であり、どう利用させていくか大事であると感じた。（50代女性）

4．高校教員の部

・高校教育相談部会の内容より、かなりパワーアップしていました。現場で活用できる日も近いのではないでしょうか。県教委や地教委をまきこんでの研究が望まれる分野だと思います。大学もかかわりながら、広い分野での連携が必要かと思います。スマホの増加でケータイトラブルにも変化があると思うのでリアルタイムで研究を進化させてください。（40代女性）

・ネットいじめの実態について知ることができました。携帯電話やネットがこれからも便利な道具として子どもたちに使ってもらえるような環境整備が必要だと強く感じた。いじめ防止ツールを開

発されたそうですごいと思いますが、そういったものが必要ない世の中になって欲しいものだと思いました。(50代男性)

5．教員以外の教育関係者の部

・自分の知らない内容が多く、対応するのは大変な状況であると思いました。大人が作ったものを使って子どもの世界で起こっていることを大人がしっかり対応できる社会づくりが必要であると感じた。そのためにも自分自身で学ばなければいけないことがまだまだあることが分かった。知らないから対応しない、対応できないではいけないと思った。(30代男性)

・新聞やＴＶなどでは事件があると表面的には報道されますが、なかなか実体を知ることができない中、事象や対策の方向性を伺えて有意義でした。ありがとうございました。やはり、大人ももっと勉強しないと（知らないと）だめですね。(50代女性)

・現状のネットいじめの様子を知ることができた。ネットを使ったか使わないかの違いはあるが、今も昔もやっていることは同じなのだと分かった。要は人間のしていること。教育として指導するには、今は紹介されたようなツールが必要だがそれが全て（あるいは頼り切る）ではない。子どもたちには人間関係は顔対顔（生の）。文字は伝わらないことを教えるべき。50代男性)

・教員にとって最も理解しがたい問題であると思う。特に年齢が高い教員にとっては理解できない分野である。そのような意味から本日の内容は多少なりとも『中高生のネットいじめやトラブルの実態』を理解することができた気がする。お話にもあったが、目を背けたくなる、触れたくない内容であるが、教育者という立場から正対していかなければならない問題だと思う。(50代男性)

・専門家である本庄さんの話を聞けて最新の情報が分かりました。私にとっても横文字は理解できませんでした。ツールであるネットをどう利用するか、子どもたちに伝えたいです。(50代男性)

・昨年まで小学生相手に生活していました。中高校生の生活がどのようになっているかあまりにも疎かったのでとても勉強になりました。これからもう少し関心を持っていきたいと思います。本庄さんの研究が子どもや学校に活かされるといいですね。(60代男性)

2）第２回公開講座

①日時と内容：2013年2月9日（土）
13：00～16：30
「人間関係づくりに活用するエンカウンター講座」
～初心者でもできるショートエクササイズを中心にして～

講　師：品田笑子(都留文科大学地域交流研究センター特任教授)
箭本佳己（都留文科大学学生相談室カウンセラー）

②場　所：都留文科大学1号館1301教室

参加者：24名（中学校教員10名、小学校教員3名、スクールカウンセラー1名、学生10名）

③概　要：学級開きに構成的グループエンカウンターを活用する理由について説明し、その後エクササイズを体験しながら、学級開きのノウハウについて学んだ。体験した主なエクササイズは、「よろしく握手」「バースデーライン」「円から円へ・合ったね」「お近づきに」「ジュゲムジャンケン」「分身を探せ」「ネームゲーム」「スタッフを知るイエスノークイズ」「☆いくつ」「サイコロトーキング」「協同絵画」「新聞紙タワー」「感じ事典」である。参加者からは、体験を通して学ぶことの楽しさ、構成的グループエンカウンターは学級集団育成に有効な方法であること、今後どのように活用していきたいか、などについて感想が寄せられた。

＜参考＞　参加者の感想（抜粋）

・エンカウンターの講座について、話を聞くだけでなく。たくさんの活動が体験できて身に残りました。特に楽しかったのが同じ価値観の者同士で語り合う「4つの窓」と無言で絵を描く「協同絵画」です。とても盛り上がって楽しかったです。生徒同士の関係づくりを真剣に考え、役立てていきたいと思います。（20代女性・学生）
・自分に対してプラスの言葉をもらいとっても楽しかったです。また、自分の中で感じたこと、考えたことを言葉として外に出すことで自分自身の感情を整理できたような感じがしました。（20代女性・学生）
・何もわからず興味があったというだけで、勢いの参加になります。それでも今回グループ活動についてよく知ることができ、今後何かの役に立つと思いました。（10代女性・学生）
・楽しかったです。教員を目指すに当たって参考にしていきたい。（20代男性・学生）
・先日の校内研修よりたくさんのエクササイズを教わることができ、私にもできるかなと思えました。また、今日知り合った方々とでもとても親しくなれるので、クラスでやったら本当に仲良くなれるのではないかと感じました。ありがとうございました。エクササイズを授業の中でどのように取り入れるか（今日も少し教えていただきましたが…）、共有の仕方などを教えていただけるとありがたいです。（20代女性・中学校教員）
・いくつも実践してみたいものがあった。初対面の人同士でも進行に支障なく行えたのは、よい実践であること、参加者のコミュニケーション能力によるものだと思う。（20代男性・学生）
・きょうは本当にありがとうございました。たくさんのエクササイズを教えていただき早速実践したいと思います。また、方法も詳しく教えてくださり、分かりやすかったです。そして、様々な方とコミュニケーションをとることの大切さを学びました。本当にありがとうございました。私自身エンカウンターにとても興味があるのでよかったです。エンカウンターの授業で使えるネタが知りたいです。（30代女性・中学校教員）
・とても勉強になりました。学級づくりはその学級で生活している生徒の人格や人間性をつくり出していくものだと感じました。まずは学級開きにより生徒の安心感をつくり出し、このクラスだったら1年間やっていけるなどの希望や、やる気を持たせるものだと思っていたので、今日のエンカウンターは具体的で有効的そして自身自身もとても楽しめるものになりました。本当にありがとうございました。（40代男性・中学校教員）
・今までなかなかエンカウンターに手を出せずにいましたが、本日多くのエンカウンターを紹介していただいたことで、毎日の生活のなかで利用したいと思えました。本当にありがとうございました。（30代男性・中学校教員）
・子どもだけでなく、大人にも活用できると思いました。エンカウンターを自由に活用できるということは、将来に教員になる方、また、企業で社員を育てる機会にも役立ち、個人的にはすごい武器になると考えます。使いこなせるようになること、また、その中で自分なりに改善していきたいです。（20代男性・学生）
・たくさん体験できてよかったです。SGEをどう地域の学校や校内に広げるか迷っていましたが、方法は教師自身が体験してみることだと改めて思いました。今回は、本当にありがとうございました。（40代男性・中学校教員）
・本日はありがとうございました。エンカウンターを学級経営に有意義に活用していきたいと思います。実践的な講義をしていただいて参考になりました。子どもたちの現状に合わせて活用していくことが大切なことだと学ばせていただきました。（40代男性・中学校教員）
・久しぶりにエンカウンターを体験できてよかったです。グループの良さを改めて実感できましたし、グループ作業では、口を出さずにはいられない私を再発見したからです。（50代女性・スクールカウンセラー）

・とても良かったです。様々なエンカウンターの手法を学べた。学びの意欲のある方々との出会い、いただいた言葉に感激しました。温かい気持ちになりました。子どもたちに味あわせてやりたいです。ありがとうございました。（40代男性・中学校教員）
・「感じ事典」で終わるのはとてもいい気分で終わるなと改めて思いました。自分のことを話すこと、他の人の意見を聞くことは、とてもすっきりするなと思いました。（20代女性・小学校教員）
・今回の講座では学級経営で大切なことを学ぶことができました。また、教員になりたいという気持ちがますます強くなりました。参加できて本当に良かったです。ありがとうございました。（20代男性・学生）
・人づきあいするのが苦手な方ですが、今日はとても楽しかったです。明るくて社交的な人になりたいなあと思いました。（20代女性・学生）
・楽しく活動でき、学級で実践してみたいエクササイズを学ぶことができ、とても良かったです。やり方、注意事項もすごく具体的に教えていただけたので、今後、子どもに合わせて実践してみたいと思います。ありがとうございました。（20代女性・小学校教員）
・楽しく参加できるエクササイズばかりでした。「ほぼ分身」がいてくれうれしくなりました。ソーシャルスキル講座も受けてみたいです。（20代女性・小学校教員）
・中3の担任をしている新採2年目の者です。今はクラスがまとまっていますが、来年度のスタートに使わせていただきます。ありがとうございました。（20代男性・中学校教員）
・教壇に立つようになり、教師と児童との関係はもちろん、子ども同士の関係を意図的に形成する重要性を感じるようになりました。子どもの心を虜にするのは簡単なようで難しいです。今日は勉強のつもりできましたが、近くでメモをとる方を見て、ハッと自分がエクササイズに、夢中になっていることに気づきました。子どもの実態に応じ、職場でも活用してみたいと思います。（20代男性・小学校教員）
・実際に体験させていただき、指導する時の進め方や言葉の選び方などを学びました。ありがとうございました。（20代男性・中学校教員）
・現場で使えるエンカウンターを学ぶことができ、とても勉強になりました。（30代男性・中学校教員）
・今回友人に誘われて参加しましたが、想像以上に楽しく学ぶことができました。ありがとうございました。（20代女性・学生）

4　山梨県内の教育委員会及びその他の教育関係団体との連携

1）都留市教育研修センターとの連携

都留市現職教員メンタルヘルスサポート事業として、年12回の面接日を設定した。また、スタートに先立ち、都留市新転入・新採用教員の研修会で学級経営についての講演と相談室の利用の仕方についての説明を行った。

しかし、利用が少なく、この枠を利用して1つの学校を3回訪問し、述べ11学級のコンサルテーションを実施したほかには、都留市教育研修所の紹介で授業参観と学級経営へのアドバイスを実施した1ケースのみであった。

2）南都留教育相談ネットワーク会議

地域の教育、福祉関係の担当者が年3回集まり、連携を目標に情報交換をしたり、活動を紹介し合ったりしている。3回目の会議では、地域教育相談室の活動について紹介した。

3）富士吉田市教育委員会

本年度も、「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業」の運営協議会の代表として協力し、年2回の会議では座長を務めた。また、富士吉田市教育研修所の依頼を受け、Q－Uの基礎講座と事例研究の仕方について研修を2回、ソーシャルスキルトレーニングの実技研修を1回担当した。その他、中学校2校の依

頼を受け、訪問して学級経営の理論や具体的な方法についての研修、学級コンサルテーションを行った。

4）南アルプス市教育委員会

5月に恒例となったQ－U基礎講座の一斉研修の講師を務めるとともに、市の事業の指定校となった大明小学校を複数回訪問し、Q－U結果の授業への活用の仕方、構成的グループエンカウンター研修、指導案検討、公開発表当日の高学年分科会助言者および全体講演などを行った。

5　内容別講師派遣先

1日研修で午前と午後で内容が異なる場合、研修会の前後に学級コンサルテーションを依頼される場合、授業研で1学級に重点的に関わりさらに全学級の分析とコンサルテーションを依頼される場合など様々なケースがある。活動の内容を分かりやすく整理する都合上、午前の内容もしくは代表的な対応で整理した場合と内容別に分けた場合があり、「④訪問による相談活動」の件数とは一致しない。

派遣先を見ると、複数回の依頼や前年度から継続しての依頼が相変わらず多い。また、内容的にも学級経営の具体的な方法について実習を交えて学習するもの、学級診断とそれに合わせた対応策のコンサルテーションなど実際の学級経営に直接かかわる内容が本年度も中心であった。2）は事前に送ってもらったQ－Uデータを分析し、1学級を短時間で解説した数である。中にはそのデータを見ながら全学級の授業を見て回ったケースもある。3）はQ－Uデータと担任の観察データを統合して学級状態を分析、指導案を見ながら1時間の授業参観をし、その後の協議会で分析や助言をした数である。この2つを合わせると、今年度直接対応した学級数は延べ286学級であった。

1）Q－Uによる学級集団の理解と対応の基礎講座及び事例研究の仕方の研修会

＜山梨県内＞	都留文科大学附属小学校、富士吉田市教育研修所（2回）、南アルプス市教育委員会、都留市教育研修所、南アルプス市立八田中学校、富士吉田市明見中学校区合同研修会、南アルプス市立小笠原小学校
＜山梨県外＞	那須塩原市教育委員会（2回）、狛江市教育委員会（2回）、山形県総合教育センター、上越市立教育センター、練馬区総合教育センター、千葉市教育センター、北九州市教育センター、郡山市立行健中学校区合同研修会

2）Q－Uの結果に基づく学級コンサルテーション及びスーパーバイズ（述べ260学級）

＜山梨県内＞	南アルプス市立小笠原小学校（2学級）、都留文科大学附属小学校（5学級）、甲州市立大和中学校（6学級）、富士吉田市立明見中学校（15学級）、中央市立豊富小学校（6学級）、南アルプス市立大明小学校（3学級）、南アルプス市立八田中学校（2学級）、南アルプス市立櫛形西小学校（4学級）、富士吉田市立下吉田中学校（12学級）、道志中学校（3学級）
＜山梨県外＞	狛江市教育委員会（22学級）三重県いなべ市立員弁中学校（18学級）、三鷹市立第六中学校（2学級）、南アルプス市立那須西小学校（21学級）、那須塩原市立東那須野中学校（20学級）、那須塩原市立埼玉小学校（20学級）、那須塩原市立厚崎中学校（20学級）、狛江市立第一中学校（12学級）、新潟県聖籠町立蓮野小学校（10学級）、千葉市教育センター、柏崎市立第三中学校（9学級）、那須塩原市立共英小学校（20学級）、日野市小学校教育相談部（1学級）、鳥取市教育委員会（15学級）、石川県能美市立寺井小学校（12学級）、いなべ市立員弁西小学校（1学級）、荒川区立汐入東小学校（2学級）

3）Ｑ－Ｕの結果に基づいた授業研究の助言者（述べ26学級）

＜山梨県内＞	南アルプス市立小笠原小学校（1学級）、南アルプス市立大明小学校（1学級）、南アルプス市立八田中学校（1学級）
＜山梨県外＞	郡山市立富田中学校（2学級）、那須塩原市立那須西小学校（3学級）、那須塩原市立東那須野中学校（4学級）、那須塩原市立埼玉小学校（4学級）、那須塩原市立厚崎中学校（4学級）、新潟県聖籠町立蓮野小学校（1学級）、那須塩原市立共英小学校（4学級）、狛江市立狛江第三中学校（1学級）

4）特別支援教育を推進する学級経営

＜山梨県内＞	なし
＜山梨県外＞	練馬区立光が丘第三中学校、栃木県矢板市教育委員会、福井県坂井地方教育委員会、練馬区立大泉第二中学校

5）構成的グループエンカウンター及びソーシャルスキル教育

＜山梨県内＞	南都留市町村教育委員会総会、道志中学校ＰＴＡ総会、富士吉田市立下吉田中学校、南アルプス市立大明小学校、富士吉田市教育研修所、甲州市立塩山中学校
＜山梨県外＞	葛飾区総合教育センター（4回）、逗子市教育委員会、目黒区めぐろ学校サポートセンター、足立区中学校教育相談部会、東京都教育相談研修会、那須塩原市教育委員会、福岡県京都郡みやこ町教育委員会、郡山市教育委員会（2回）、足立区立青井小学校、江戸川区立南葛西小学校、練馬区立野小学校、練馬区立大泉北中学校、宇都宮市教育センター、練馬区立早宮小学校、福島県喜多方市立喜多方小学校、葛飾区立奥戸小学校、南多摩中等教育学校

6）その他

郡山市教育委員会、富士吉田市立明見中学校区研修会

6　まとめ

・（2）の「相談、研修依頼件数と種別」でも明らかなように、北麓・東部地域への対応が増加している。相談室が開設10年目を迎え、担当者と地域の人とのネットワークが形成され、その機能が広く認知されつつあるからではないかと考えている。一方で、2年目を迎えた都留市教育研修センターとの連携による現職教員のメンタルヘルスサポートはあまり活用されなかった。依頼がないということは、学級経営が順調とも捉えられるが、子どもたちの発達のよりよい援助に寄与できるような活動のあり方を検討していきたいと考えている。

・公開講座については、時代や地域のニーズを分析し、関心が高くタイムリーな企画をしているつもりであるが、参加人数は思ったほど多くない。アンケートや感想からは内容に満足していることが伺える。しかし、講座開催の情報を知らない人が多いことも分かった。広報の仕方について検討し、多くの地域の方々に情報が伝わる工夫をしていきたいと考えている。学級開きに活用できるエンカウンター講座は、教育現場からは3月末が良いという意見もあるが、教師をめざす学生と現職教員の貴重な交流の場ということを考えると次年度も同様の時期に開催したいと考える。

・山梨県内の活動であるが、南アルプス

市教育委員会と連携して行う指定校を中心とした学校サポート活動が昨年度で終了したため、各校からの依頼もしくは山梨県教育研究所を通した依頼に移行してきている。また、学級集団理解のツールとしてQ－Uが定着している地域からの依頼が多く、内容は、データの活用方法についてや構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングなどの具体的な教育手法の研修が増えている。

・依頼内容で昨年度多かったのは、Q－U結果をもとにした学級分析と学級経営のコンサルテーションである。時間の長短や内容の差はあるが述べ286学級である。直接対応できる数には限りがある。また、訪問して対応してもらうのを待っていると、時機を逸してしまうことも想定される。今後はデータ分析や観察と統合するときの方法やポイントを伝え、教師が自力で分析ができるようする援助に切り替えていきたいと思っている。また、学級の状態を把握し、それに合わせた授業はどのように構成するかについての関心も高くなっている。教師がもっとも長時間かかわる授業の場で子どもたちによりよい援助をしたいというニーズに応えられるようにしていきたい。

＜H25年度の活動計画＞

1．研修会の企画・運営
・公開講座を年2回程度実施

2．山梨県内の学校教育サポート
・富士吉田市教育委員会、山梨県教育研究所、甲州市教育委員会との連携
・富士吉田市立明見中学校区の小中連携のサポート
・その他、各校内研修会への講師派遣

3．地域の活動への協力
・南都留教育相談ネットワーク会議への参加
・都留市教育研修センターとの連携による教師サポート
・「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業」への協力
・山梨県教育カウンセリング研究会の活動支援

4．相談活動
・教師の学級経営のコンサルテーション及びスーパーバイズ
・教師・教育関係者個人の臨床的問題への対応
・卒業生の学級経営サポート

5．東日本大震災被災地支援活動

6．その他
・横浜市スクールスーパーバイザー
・那須塩原市教育委員会との連携
・郡山市教育委員会との連携（被災地支援を含む）

（文責：品田笑子）

Ⅱ－２－３　地域情報教育

１　活動指針

2007年度（平成19年度）から地域交流研究センターにおける活動の柱の一つである「発達援助部門」の中の分野の一つとして「地域情報教育」が取り込まれました。

当初は、私たちは「地域情報教育」における活動の指針として、次の (1) ～ (3) までを掲げた。これらの活動には、情報センタースタッフ、「情報メディア演習Ⅰ」・「情報メディア演習Ⅱ」の受講生との協同事業として取り組んでいる。

平成23年度からは、初等教育学科図工・美術教室の鳥原先生が中心となって活動している、地域への美術教育支援プログラムの中で、旭小学校をフィールドとした図工・美術と情報の連携した新しい教育システム作りプロジェクト（たからばこ作戦）を立ち上げたことにより、四つの柱として活動している。

（１）小中学校への情報リテラシー・ネットワーク・セキュリティ教育支援

・都留市情報教育研究委員会（教育委員会、全小中学校情報教育担当者）への参加
・ICTを利用した学校業務に関する研修会の開催
・それぞれの学校の情報教育への支援

（２）遠隔授業の実施と支援

・大学と小中学校間での遠隔授業の実施
・小中学校間の交流プログラムの支援
・e-learningへの取組み

（３）ホームページ作成と運用における支援

・小中学校の公式ホームページの作成支援
・定期的な更新に関わる運用支援
・小中学校ホームページ作成担当者への研修支援

（４）図工・美術作品データベース作成支援プロジェクト（たからばこ作戦）

・旭小学校、子どもアトリエ（兵庫県西宮市）を協力校・組織とする。
・保護者への説明、作品の撮影及び利用に関する許諾を得る
・交流支援

２　平成24年度の活動

☆平成24年5月24（木）～26日（土）

兵庫県西宮市「子どもアトリエ」の『さつき展2012』で、作品展示から参加し、保護者との交流を図りながら、「たからばこ作戦」への理解を得た。

☆平成24年5月31日（木）16：45～18：30

都留第二中学校の三浦淳先生と打ち合わせ。技術科で本学のipadを使った授業を計画していることに対しての相談を受けた。日向先生にも参加してもらい、利用に対する指導等に対して助言して頂いた。

☆平成24年6月7日（木）

旭小学校訪問（担当の渡辺先生と打ち合わせ）

☆平成24年12月12日（水）

小中学校へのHP用サーバー提供および作成・運用支援における将来計画について検討

☆平成24年12月13日（木）

文部科学省高等教育局大学振興課において「たからばこ作戦」について説明

☆平成24年12月17日（月）：神戸国際会議場

大学ICT推進協議会2012年度年次大会において、「小中学校へのHP作成・運用支援の取組み」、「たからばこ作戦」につ

いての実践発表報告

☆平成25年2月22日(金)：明星大学

Plone Educational Symposium in Tokyo 2013において、「小中学校へのHP作成・運用支援の取組み」、「たからばこ作戦」についての実践発表報告

前年度に作成した、都留第二中学校区「やまなし」心づくり研究指定校事業のホームページの運用支援

3　平成25年度における活動予定

①小中学校への支援計画について都留市との協議
②遠隔授業・交流プログラムの実施
③たからばこ作戦の実践
④都留第2中学校区　やまなし心づくり研究指定校事業への支援

（文責・情報センター　杉本光司）

Ⅱ－２－４　地域美術教育

1　活動指針

平成23年度より、地域交流研究センターの『発達援助部門』の新分野として「地域美術教育」が認められた。これにより図工・美術教室全体で地域の美術教育に関わる地域貢献活動として実践することとなった。主な活動は以下の3つである。

（1）都留市教育協議会美術研究部学習会（都留市内小・中学校教員との勉強会）の運営
（2）たからばこ作戦（都留市立旭小学校と兵庫県の造形教室の連携による研究活動）
（3）都留市・県内各地の美術教育活動への協力支援

2　平成24年度の活動実績

（1）都留市教育協議会美術研究部学習会（都留市内小・中学校教員との勉強会）

①勉強会

都留市近隣の小・中学校教員と本学教員による勉強会を開催、参加者から授業の中で制作した作品や資料を基に実践報告があり、意見交換が行われた。(7月4日　美術研究棟)

②講習会-道具の取り扱いについて-

本学教員による都留市近隣の小・中学校教員を対象とした、小学校で用いられている道具（彫刻刀、包丁など）の手入れについて講習会を行った。(8月21日　美術研究棟)

（2）たからばこ作戦

・年間を通して学生と共に旭小に出向き、5年生、6年生の作品を撮影、デ

ーターベース「たからばこ」に登録。このデーターを基に「評価カード」、「ぱらぱらまんがアニメーション」を制作。6年生には活動の記録集として「作品集CD」を製作配布した。また、研究の実践を「大学ICT推進協議会2012年度年次大会」「Plone Educational Symposium in Tokyo 2013」で報告、発表した。

（3）都留市・県内各地への協力支援

・「アート巣箱をつくろう」（地域交流研究センター・美術教室・山梨県立美術館共同企画）を開催
参加者188名とボランティアスタッフ36名が参加。（7月15日美術研究棟）ここで制作された巣箱は、山梨県立美術館県民ギャラリーCと野外の木々に展示された。（みなび展7月29日～8月11日）
また、展示作業に本学教員が参加した。

3　平成25年度の活動計画

（1）都留市教育協議会美術研究部学習会の運営を継続
（2）たからばこ作戦の継続
（3）都留市・県内各地の美術教育活動への協力支援を継続
①「つるの宝カルタ」製作への協力（主催：都留市青年会議所）
②「図画工作教室」への支援（宝保育所）

（文責・鳥原正敏）

Ⅱ－3　暮らしと仕事部門

概　要

暮らしと仕事部門では、学生、教員がともに、地域社会における人々の生活や生業に学びつつ、また地域社会が直面する課題について理解を深めながら、地域を構想し、担っていくための示唆を見出す取り組みを行っています。2012年度は、前年度までに蓄積してきた三つの諸活動（第1に「農のある暮らし」学習会開催、第2に農に関心を寄せる学生たちのネットワーク組織「農ネット」活動の支援、第3に「世界と地域を結ぶ学習」）に加え、2011年3月11日に発生した東日本大震災に関わる調査・学習活動の一環として、岩手県大槌町でのスタディーツアーを企画・実施しました。

2012年度活動報告

1.「農のある暮らし」学習会の開催

本部門では、毎年、農や地場産業をめぐる地域の取り組みについて、実践者のお話や、そうした取り組みが必要とされる社会的背景について学びあう機会を持ってきました。今年の学習会は二部構成とし、前半は「種子の自由」をめぐって林公則さんから「農業の工業化　～緑の革命種、遺伝子組換種、F1種～」と題したお話をいただき、後半は、NPO法人「都留環境フォーラム」代表の加藤大吾さんとの対談もしていただきました。

林さんは、本学の兼任講師で「環境経済学」「環境政策」等の講義を担当していますが、有機農業についての知見もお持ちです。また加藤さんのNPOでは、2012年から山梨県内で在来作物保存のプロジェクトを立ち上げ、種とり等の研究やそのネットワークづくりを行っています。

遺伝子組み換えに象徴されるように、現在、世界の遺伝資源（種）は、少数のグローバル企業によって市場化・商品化が進み、人々の命をつなぐ共有財・公共財としての「種」のあり方に大きな危機がせまっています。いったい、「種」をめぐって、今国際社会で、また日本で、どのようなことが起こりつつあるのか、またそれはなぜなのか。そしてそうした事態に対して、私たちは何をなし得るのか…前半は理論編、後半は実践編とし、参加した学生からも活発な意見が出されました。

本学習会の内容は、林さんに『地域交流センター通信23号』(2013年3月)にて報告いただいていますのでご参照ください。林さんは報告の最後を「今回の種子に関する勉強会を通じて、維持可能な農業の実現のために種子が果たす役割の大きさを改めて認識した。普通に生活していると、思いを馳せることの少ないテーマだが、その重要性を考えると多くの人々に種子について関心をもってもらいたい」としています。

2．農業関係の学生団体のネットワーク「文大農ネット」の支援

7月21日、都留文科大学のオープンキャンパスにて、文大農ネット主催による「朝市＠文大」が開催されました。大学における学生たち主催の朝市は、昨年から実施しているものですが、今回は、これをオープンキャンパスと重ね、大学関係者だけでなく、受験生やその保護者にも関心をもってもらおうというねらいです。本学1号館にホールに販売・展示コーナーを設置し、夏野菜はじめ、シソジュース等の提供も行い、多くのみなさんに足をとめていただきました。

本部門では、このイベントの開催について、大学事務局との調整を行う等の支援をしました。学生側の企画・提案がギリギリだったこともあり、当初は開催が困難かとも思われましたが、事務局の配慮と学生たちの思いの強さによって実現にこぎつけることができたのは、何よりでした。企画・実施を担った学生の所感が『地域交流センター通信』22号(2012年12月）に掲載されていますので、ご参照ください。

3．世界と地域を結ぶ学習：地域社会の開発問題や紛争について学ぶ

本部門では、例年、授業「現代世界と平和」ご担当の佐伯奈津子先生（本学兼任講師）のご協力をいただいて、アジア、中東地域で噴出する戦争、紛争の動向を学び、そのことが私たち自身の生き方とどう関連しているのかについて、現場の状況に詳しいジャーナリストやNGOの方に、ご講演をいただいています。本年度は、南風島渉（はえじま・わたる）さんを講師にお招きし、「隠されたアジアの紛争地～最前線で見たその虚と実」と題して、インド＝ビルマ国境地帯のナガランドにおける先住民弾圧の現状とその社会的背景についてお話をいただきました。南風島さんは、時事通信社編集局写真部を経て、1992年以降、バングラデシュ、東ティモール、スリランカをフィールドとし、10年以上にわたってナガランドも取材なさってきました。当日は、映像とともに民族衣装や生活用具の実物を持参くださり、紛争下での人々の暮らし、考えを具体的にお話くださいました。学生からも活発に質問が出されました。例えば「なぜ、人々は紛争地に住み続けるのか」という問いかけに対し、南風島さんは「それは人が土地を所有しているのではなく、土地に人が所属しているからではないか」と応え、土地に対する人々のアイデンティティの強さを示唆なさいました。

本講演の内容は、コーディネートいただいた佐伯奈津子先生に「ナガランド～植民地支配から連綿とつづく先住民族弾

圧～」として、『地域交流センター通信』23号(2013年3月)にまとめていただいていますのでご参照ください。佐伯先生は同文を「ナガランドは、アジア太平洋戦争末期、日本とイギリスが衝突した地点でした（インパール作戦）。日英双方が数万人の戦死者を出した戦闘で、ナガの人びとも被害を受けましたが、その詳細はわかっていません。日本はまた、インド、ビルマの最大支援国でもあります。過去の清算が済んでいないだけでなく、現在もナガランドへの弾圧に荷担してしまっているのです」と指摘し、ナガ人ジャーナリストの「まず事実を知ってほしい。事実を知れば未来がみえてくる」（カカ・D・イラル）という言葉で締めくくっています。

4．震災を受けての地域調査・地域活動

本部門で、岩手県の大槌町・NPO法人吉里吉里国でのスタディーツアーを呼びかけたところ、13名の学生から参加希望が寄せられました。

NPO法人「吉里吉里国」は、大槌町全体の立ち枯れ木（津波と山火事による）の伐採等、山の整備を事業とし、被災した方々の仕事起こしを行っています。理事長の芳賀正彦さんは「森作りは、豊かな海を作るための手段。いい海を取り戻すための活動だ。そういう活動を行う中から、生活が成り立つ工夫ができればいい。例えば自伐や手入れが家計を支える仕事にならなくとも、生活を補助する収入にはなり得る」として、生業としての林業をめざすと同時に、「海を取り戻すには、我々がこのあたりを少し整備しても全く不十分。三陸の漁民と連携しなければ難しい」と、広範囲にわたる山の関係者、海の関係者とのネットワークを展望しています。

田中は、上記のような活動の重要性を学生たちと学びたいと考え、5月と9月、二回にわたる現地での打ち合わせを経て、9月23～25日にかけ、同NPO法人にお世話になり、震災津波による塩害と山火事とで傷んだ森の手入れを通じて、豊かな海を取り戻そうという事業活動の一端を勉強させていただきました。

スタディーツアーの初日は、震災で亡くなられた方が40年かけて育ててきた民有林から切り出した立ち枯れ木の処理を、また二日目は「復興の薪」づくり、薪積みの作業に取り組みつつ、被災されたときのことや、その後の取り組み、これからのご構想等、貴重なお話、胸迫るお話をうかがわせていただきました。参加学生の感想を『地域交流センター通信』22号(2012年12月)に掲載してありますので、ご参照ください。

2013年度の活動について

本部門の2013年度活動は、部門担当者不在のため、一時休止となります。

（文責・田中夏子）

Ⅲ．インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ－１　第9回地域交流フォーラムの「『フィールド・ノート』10周年から見える未来」開催

平成25年2月2日（土）に第9回地域交流研究フォーラム『フィールド・ノート10周年からみえる未来』が開催されました。以下にその概要を報告します。

フォーラムを開催するにあたり

2012年、『フィールド・ノート』は、発刊10周年を迎え、75号を発刊しました。地域交流研究センター発足から歩みを共にしてきたことになります。現在ではフィールド・ミュージアム部門の機関誌として位置づけられ、年4回、各400部を発行し、県内外の講読者（約150名）にも発送しています。学生（現在15名）が主体となり、「地域の人と自然の交流」をテーマに自ら企画を立て、観察し、取材し記事を書きます。なかには地域のかたがたが企画した記事もあり、冊子編集を通しての交流の輪は着実に拡がりつつあります。学生たちも『フィールド・ノート』の編集にあたり、地域の自然や人の営みをじかに観察し、経験を共有し、感じる力を働かせる喜びを感じているようです。第9回地域交流研究フォーラムでは、冊子編集に携わってきた卒業生、地域の読者、教員とともにこの10年を振り返り、『フィールド・ノート』が拓いてきた可能性と課題について考えてみたいと思います。

【日　程　等】

日　　時：2013年2月2日（土）
　　13時～16時
会　　場：都留文科大学2号館102教室
司　　会：北垣憲仁
配布資料：「フィールド・ノート」10周年記念特別号、これまでの特集記事一覧

1）開始及び主催者の挨拶（杉本光司）
2）フィールド・ミュージアムの概要（坂田有紀子）
3）『フィールド・ノート』について（北垣憲仁）
4）出席者の自己紹介
5）それぞれの『フィールド・ノート』との関わり・感想、これからの課題と可能性、について次の7名に発言していただきました。
　○今井尚さん（卒業生・創刊時の編集委員）
　○前田恵子さん（卒業生・元編集長）
　○遠藤静江さん（都留市在住・現在、インタビューを連載中）
　○小口尚良さん（東桂小学校教員・企画記事を掲載していた）
　○青池恵津子さん（都留市立図書館司書・読者、過去に記事を掲載）
　○須藤克昌さん（長野県小学校教諭、卒業生、都留ミニコミ誌「ちゅうわけ」発刊）
　○前澤志依（国文学科3年生、現編集長）
　引き続き、フロアの人たちとの意

見交流を行いました。

6）まとめ（畑　潤）

なお、当日の感想につきましては、「地域交流センター通信23号」20・21ページに参加者の方々の感想を掲載しております。また、フォーラム全体の詳細につきましては、当年報の前半部において報告させて頂いておりますので、ご一読いただきたいと思います。

（杉本光司：地域交流研究センター長）

Ⅲ－２　各種講座の開催

（1）都留文科大学現職教員教育講座

恒例の夏季集中講座を、例年の通り標記のように『教師の子ども理解と学習指導』というテーマで行いました。

〈講座の趣旨〉

現在、日本の子どもたちの学力をめぐっては、さまざまな角度から「問題」とされております。とりわけ、子どもの読解力をどうつけるのか、そして子どもの算数・数学嫌いをどのように克服していったらよいのかをめぐっては議論の中心になっているといってよいと思います。しかし、残念なことに、これらのテーマを十分に研究・検討する前に「学力向上」対策が、それぞれの学校や教師に求められているのが現状であるといわざるを得ません。

今回は以上をふまえ、一人ひとりの子どもを理解することをベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探ることとしたいと思います。特に、学校での生活の大部分を占める授業の場面で、子どもを支える学習指導のあり方を深めていくことを追究したいと思います。

テーマ：教師の子ども理解と学習指導
日　時：平成24年7月26日(木)～7月27日(金)
場　所：都留文科大学2号館101教室・102教室
参加者：7月26日…52名　7月27日…29名　合計…81名

日程と内容　【第一日目】7月26日（木）　会場：２号館101教室

午前 9:30～午前 9:45	受講受付（本学2号館）
午前 9:45～午前10:00	『講座の趣旨について』説明：杉本光司（地域交流研究センター長）
午前10:00～午前12:00	『子ども理解と学習指導』講師：山﨑隆夫（本学非常勤講師）
午前12:00～午後 1:00	休　憩（昼　食）
午後 1:00～午後 3:00	『教科に関する研究講座Ⅰ』－子どもがわかる授業を作る・理科－ 講師：平野耕一（本学初等教育学科准教授）

【第二日目】7月27日（金）　会場：２号館101教室・102教室

午前10:00～午前12:00	『学習意欲を引き出す学びづくり』―社会科教育を通して 講師：田所恭介（本学非常勤講師）
	『英語指導法改善のためのヒント』講師：松土　清（本学英文学科特任教授）
午前12:00～午後 1:00	休　憩（昼　食）
午後 1:00～午後 3:00	『教科に関する研究講座Ⅱ』－子どもがわかる授業を作る･国語－～言語活動の充実を図るために～講師：鶴田清司（本学初等教育学科教授）

この講座に関する出席者の感想は、「地域交流センター通信22号」18・19ページに掲載しております。

（文責・杉本光司）

(2) 都留文科大学市民公開講座
『小学生と英語で楽しもう！「Hello! 英語でワクワク2012」』

2012年8月20日、地域交流センター主催の市民公開講座の一環として、小学校3、4年生を対象に「Hello! 英語でワクワク2012」を開催しました。夏休みも終了間近でまだ暑いさなかにもかかわらず、都留市内の小学生13名が参加してくれました。「英語で自分のことを伝える」「英語の音やリズムに慣れる」「英語を楽しむ」「外国の文化を知る」という趣旨のもと、英語で自己紹介やあいさつをしたり、歌・ゲーム・チャンツを通して身体を動かしながら色、数字、動作に関する単語を学んだり、英語の絵本を楽しんだりと、3時間にわたって英語に触れる活動を行いました。

学生スタッフとして活躍してくれたのは私の英語教育ゼミに所属する英文学科の3、4年生5名と、昨年度の講座も手伝ってくれた元ゼミ生で現大学院生1名の計6名です。都留文科大学附属小学校でTAとして活躍している学生もいますが、ほとんどが普段小学生とはあまり関わる機会のない学生です。これまで何度も打ち合わせを重ね、前日はリハーサルを行うなど、準備を進めてきました。

講座開始直前まで人数が集まるかどうか心配していましたが、「こんにちは～！」「おねがいします！」と明るい大きな声の小学生が続々と集まってきてくれました。教室に入るや否や、早速、「あっ、ボールだ！」と、準備した小道具で遊び始めるなど、元気で好奇心旺盛、パワー全開の子どもたちでした。はじめに行った英語による自己紹介活動では多少緊張した雰囲気もありましたが、「英語で自己紹介をしながら名刺交換をし、それがいつの間にかビンゴゲームに変身する」という、アイディアに富んだ学生発案の活動が終わるころには、すっかり打ち解けていました。

それぞれの活動では2チームに分かれて得点を競い合いましたが、勝ったチームの賞品は大学生の手作り銀メダル（材料は麻ひも、段ボール、アルミホイル）。特別参加した5歳の私の娘も大喜びの、大きな素敵なメダルでした。講座後には簡単なアンケートを行いました。「『英語ワクワク』はどうでしたか」という質問に対し、小学生全員が「たのしかった」を選択してくれ、「また、参加したいですか」という問いについても全員が「参加したい」と答えてくれました。これに気を良くし、また大変励まされ、来年度の企画を早速考え始めたところです。

以下、協力してくれた大学生スタッフの感想です。

- 「子どもたちが体を動かして、楽しそうに英語を使っていることがとても嬉しかったです。今後の糧となる貴重な機会を頂き、ありがとうございました（青木洵都（あおきまこと）・英3)。」
- 「私は英語学習の活動をするという経験がなく、緊張もしましたが、参加者も皆が熱心に取り組んでくれ、楽しく取組めました。非常に良い経験が出来たと思います。このような機会を設けていただきありがとうございました（黄士展（こうしのり）・英4)。」
- 「今回スタッフとして企画に参加し、児童の楽しそうな笑顔を見ることができて嬉しく思いました。このような企画を通して児童の英語に対する興味を引き出し、モチベーションを上げるきっかけになれていたら、光栄に思います。(伊藤美咲（いとうみさき）・英3)。」
- 「英語でワクワクに参加するのは去年に引き続き今年で2回目となりました。今年は事前の練習不足などの反省すべき点もありましたが、当日は順調に進み、また子どもたちと楽しく英語を勉強できたのではないかと思います（高野祐一（たかのゆういち）・院1)。」

参加してくれた「旭にこにこクラブ」のみなさんから、「えい語を教えてくれてありがとう」という大きな寄せ書きをいただきました。その中から感想を抜粋します。

・「えい語を教えてくれてありがとうございます！自こしょうかいの時、えい語では少しむずかしかったけど、楽しかったです。名し交かんはビンゴになるとは、思わなかったけど、おもしろかったです。またしょうたいしてください。」
・「えい語をいっぱい教えてくれてありがとうございます・・・ボールをなげるときにすうじをえい語で言ってやるやつも楽しかったです。また来年もしょうたいして下さい。」
・「わたしはえいごのじこしょうかい、ゲーム、歌、ぜんぶすごく楽しかったです。」
・「じこしょうかいでは、名し交かんをしたあとまさかビンゴがはじまるとは思いませんでした。いろいろなゲームではまけてしまいましたが、すごくおもしろかったです。歌では、わたしは歌がすきなのですごくリズムにのれました♪」

参加してくれた小学生、協力してくれた大学生スタッフ、参加者の募集などにご尽力いただいた事務局のみなさまに、この場を借りて御礼申し上げます。

（「地域交流センター通信22号」の12～13ページにおいても同様な報告を掲載しております。）

（文責・奥脇奈津美）

(3) 県民コミュニティーカレッジ講座

1　広域ベース講座

テーマ「知られざる富士山の魅力」
開催場所：山梨県立図書館「かいぶらり」2階　多目的ホール

この共通テーマのもと、次の5講座が開催され、本学からも渡辺先生にご協力いただき参加しました。

講　座　名	講　　師	開催日時	受講者数
富士山の光と影・富士山再生論	渡　辺　豊　博 (社会学科環境・コミュニティ創造専攻教授)	平成24年12月11日(火) 18:30～20:00	25名
女性の健康エンパワメント	伏　見　正　江 (山梨県立大学看護学部教授)	平成24年12月18日(火) 18:30～20:00	18名
富士山・富士五湖の新しい地球観	輿　水　達　司 (山梨県立大学地域研究交流センター特任教授)	平成25年1月8日(火) 18:30～20:00	28名
富士山の生物相の特徴と地球環境問題	北　原　正　彦 (山梨県環境科学研究所研究部長) 輿　水　達　司 (コーディネーター)	平成25年1月22日(火) 18:30～20:00	22名
中世の旅びとが見た富士山	石　田　千　尋 (山梨英和大学人間文化学部教授)	平成25年1月29日(火) 18:30～20:00	28名

2　地域ベース講座

『British　Culture』（イギリスの文化）

長い歴史があるイギリスは、今年オリンピックのため注目されています。そのイギリスの伝統や文化の中には、興味深

い事柄が満ち溢れています。イギリス料理からフォークダンスまで、多面的な内容で、講座を行います。講座ではワークショップのように参加者がグループに分かれ、少しだけ英語で話し合ったりします。教員は、英語も日本語も両方使います。

対　象：イギリスの文化に興味・関心のある方
会　場：都留文科大学　2号館2102教室
時　間：18時30分～20時30分
講　師：ギリズ　ヘイミッシュ
（本学英文学科准教授）

「講座内容」

【第1回】10月2日（火曜日）
テーマ：An Introduction to British Culture（イギリスの文化入門）
受講者：8名
【第2回】10月16日（火曜日）
テーマ：A Taste of British English（イギリス英語を味わう）
受講者：9名
【第3回】10月30日（火曜日）
テーマ：Britain on a Plate （イギリスを食べる）
受講者：13名
【第4回】11月13日（火曜日）
テーマ：A Snapshot of British Cinema（イギリスのシネマを視る）
受講者：10名
【第5回】11月27日（火曜日）
テーマ：Scottish Dancing（イギリスを踊る）
受講者：9名

受講者合計：49名

平日の夜に開催ということもあり、参加者数の少なさを感じました。しかし、3名の受講生が全5回の出席であり、また、受講生には都留市外からの参加者も数名いました。

参加者が少なかったためか、逆に、講師と受講生のコミュニケーションが濃い講座でしたので、参加した受講生のほとんどに、非常に高い満足感を味わって頂けた様子でした。「地域交流センター通信23号」28・29ページに、本講座への参加者の方から寄せられた感想を掲載しておりますので、ご一読いただきたいと思います。

講師もこのような講座の継続した開催を希望しており、今後は、開催日や場所についても検討する必要がある。

（文責・杉本光司）

(4) 総合地球環境学研究所との共催による「第12回地域研究連携セミナー」『分かちあう豊かさ：地域のなかのコモンズ』

1．日　時：平成24年10月13日(土)
13:30～17:00
2．会　場：富士吉田市民会館小ホール
3．参加者：149名(事前申込：88名、当日参加：42名、関係者：19名)
4．主　催：総合地球環境学研究所、公立大学法人都留文科大学
5．後　援：富士吉田市、富士吉田市教育委員会、富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合、山梨日日新聞社、山梨放送

6．プログラム：

・開会挨拶　加藤祐三
（都留文科大学・学長）

・趣旨説明　阿部健一
（総合地球環境学研究所・教授）

・講　　演

1）「富士山の世界文化遺産登録への課題と可能性」
渡辺豊博（都留文科大学・教授）

2）「富士講の記憶を新たなまちづくりと観光の力に」
中島直人（慶応義塾大学環境情報学部・専任講師）

3）「コモンズを支える科学」
佐藤　哲（総合地球環境学研究所・教授）

・パネルディスカッション
パネリスト：渡辺豊博、中島直人、佐藤　哲
司　　会：阿部健一

・閉会挨拶　立本成文（総合地球環境学研究所・所長）

スタッフとして関わった本学関係者

・杉本光司（演者対応）地域交流研究センター長
・泉　桂子（総合司会）社会学科准教授
・小林睦哉（PC操作）都留文科大学英文学科4年生（情報ゼミ）
・土山　茜（受付回収）都留文科大学社会学科4年生（渡辺ゼミ）
・小原悠平（受付回収）都留文科大学社会学科4年生（渡辺ゼミ）
・奥脇有人（誘導整理）都留文科大学社会学科4年生（渡辺ゼミ）

その他、「地域交流研究Ⅲ」の受講生22名がセミナーに出席しました。

次ページより、総合地球環境学研究所職員の皇甫さやかさん作成の報告書を添付いたします。

（文責・杉本光司）

第12回地球研地域連携セミナー
分かちあう豊かさ：地域のなかのコモンズ　開催報告

大切なものを共有し分かちあう―この考えは、コモンズと呼ばれています。第12回地球研地域連携セミナーは、富士山の麓にある富士吉田市にて、富士山を背景に地元の方々とコモンズについて理解を深めることを目的に開催されました。

1つめの講演では、渡辺豊博都留文科大学教授から、富士山を訪れる人々によるゴミの放置やし尿の垂れ流しなど環境問題・被害について現状報告があり、バイオトイレ設置への取り組みが紹介されました。

続く中島直人慶應義塾大学環境情報学部専任講師の講演では、富士講をヒントにした地域の人々によるまちづくりの構想とその実践、今後の関わり方について説明がありました。

3つめの講演となる佐藤哲地球研教授は、科学が地域づくりのために生産してきたコモンズに関する知識は、現場での問題解決に必ずしも有効に活用されていないことを示し、解決のカギとして、地域社会で多面的な役割を持つレジデント型研究者が重要であると述べられました。

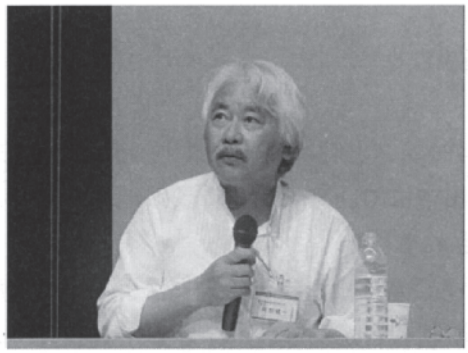
阿部健一地球研教授が司会を務めたパネルディスカッションでは、会場から寄せられた質問をもとに、パネリスト3名がそれぞれ専門家の立場から意見を述べ、白熱した議論がなされました。

参加者アンケートには、「自分もレジデント型研究者を目指したい」という学生の声も寄せられ、次世代を担う若者の今後の活躍が期待される、充実したセミナーとなりました。

（皇甫さやか）

加藤祐三　都留文科大学学長

佐藤　哲　総合地球環境学研究所教授



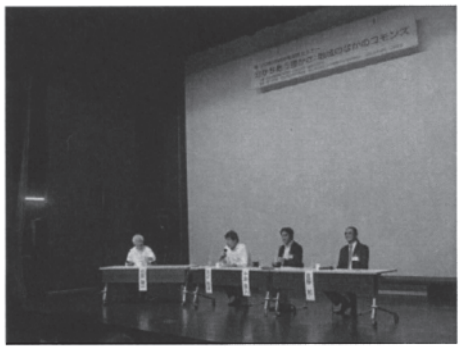
阿部健一　総合地球環境学研究所教授

立本成文　総合地球環境学研究所長

渡辺豊博　都留文科大学教授

講演の様子

中島直人　慶應義塾大学環境情報学部専任講師



パネルディスカッションの様子

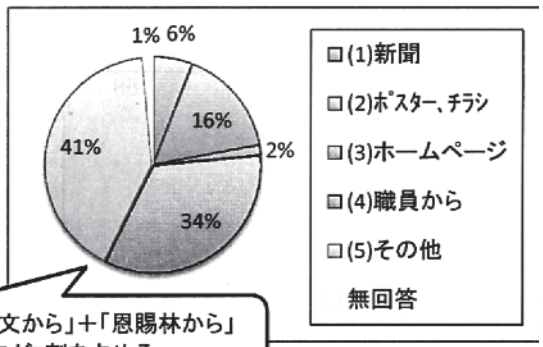
第12回地球研地域連携セミナー
「分かちあう豊かさ：地域のなかのコモンズ」参加者アンケート集計表

アンケート回収数　68枚

1. 本日のセミナーをどのような方法でお知りになりましたか

(1)新聞	4
(2)ポスター、チラシ	11
(3)ホームページ	1
(4)職員から	23
(5)その他	28
無回答	1
合計	68

(1)新聞内訳：山梨日日新聞3
(4)職員から内訳：都留文20、地球研1
(5)その他内訳：恩賜林・入会組合17、学校の先生から3、フジマリモ2、市からの案内状1、日文研の講演で1、知人の紹介1、主人に連れられて1

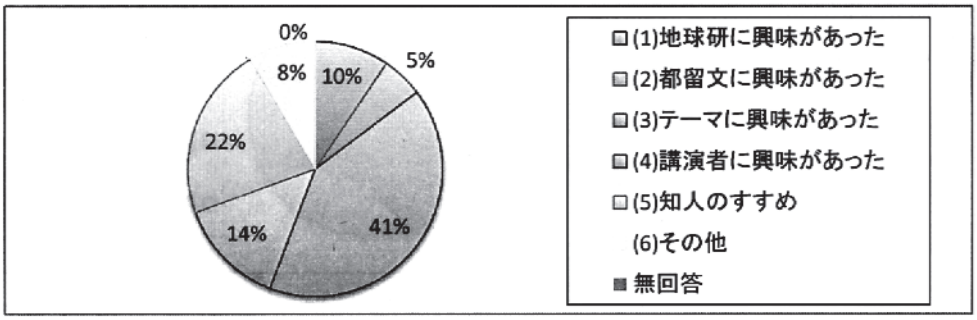


「都留文から」＋「恩賜林から」の周知が7割を占める

2. 本日のセミナーに参加されたきっかけは何ですか？（複数回答可）

(1)地球研の活動に興味があったから	9
(2)都留文科大学の活動に興味があったから	5
(3)講演のテーマに興味があったから	39
(4)今回の講演者に興味があったから	13
(5)知り合いにすすめられたから	21
(6)その他	8
無回答	0
合計	95

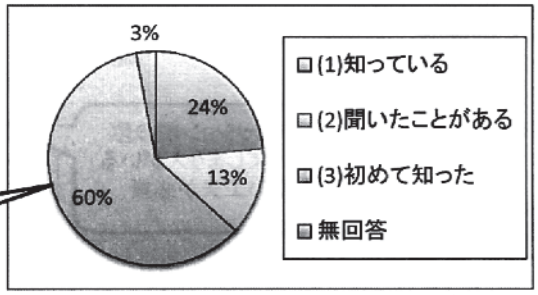
(6)その他内訳：恩賜林組合からのすすめ3、大学の授業での紹介1、地域の資源について考えてみたいと思った1、地球研を訪問しその活動の一環からのセミナーなので1、コモンズに興味があった1、来年のコモンズ世界大会にどう向き合うか1



3. 総合地球環境学研究所についてご存じでしたか？

(1)以前から知っている	16
(2)なんとなく聞いたことがある	9
(3)今回初めて知った	41
無回答	2
合計	68

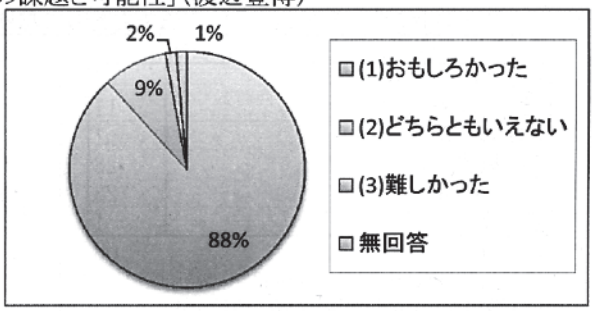
地球研の名を世界に轟かせたい



4. セミナーについて

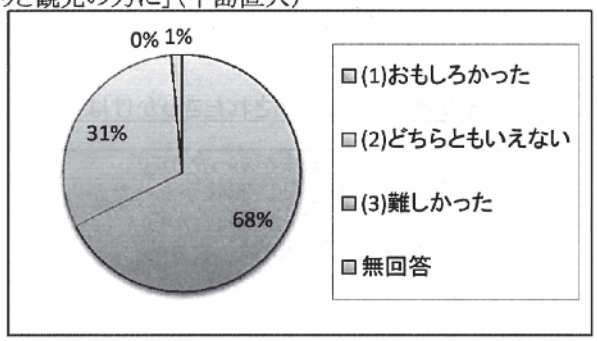
・講演「富士山の世界文化遺産登録への課題と可能性」(渡辺豊博)

(1)おもしろかった	60
(2)どちらともいえない	6
(3)難しかった	1
無回答	1
合計	68



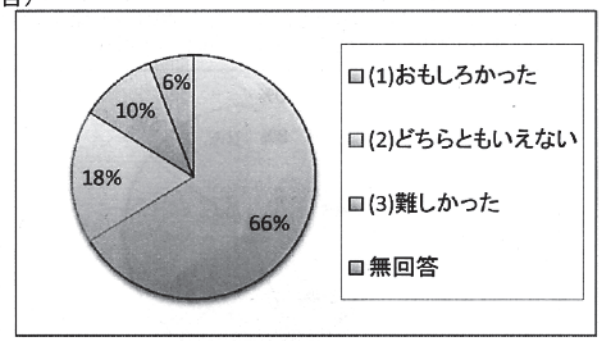
・講演「富士講の記憶を新たなまちづくりと観光の力に」(中島直人)

(1)おもしろかった	46
(2)どちらともいえない	21
(3)難しかった	0
無回答	1
合計	68



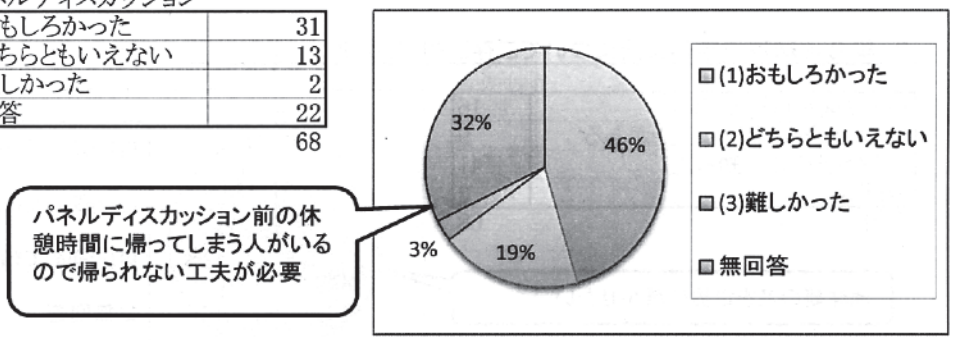
・講演「コモンズを支える科学」(佐藤　哲)

(1)おもしろかった	45
(2)どちらともいえない	12
(3)難しかった	7
無回答	4
合計	68



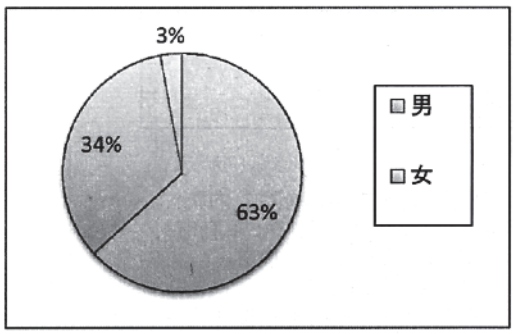
・パネルディスカッション

(1)おもしろかった	31
(2)どちらともいえない	13
(3)難しかった	2
無回答	22
合計	68



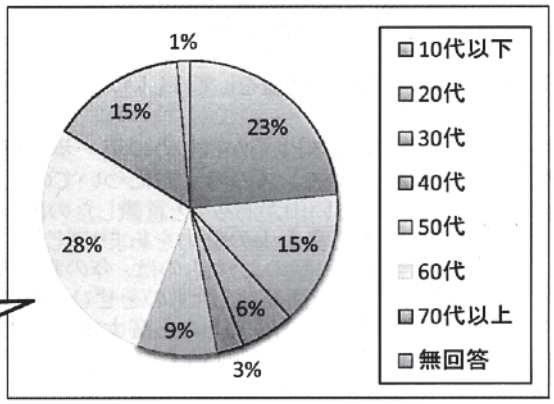
5-1. 性別

男	43
女	23
無回答	2
合計	68



5-2. 年齢

10代以下	16
20代	10
30代	4
40代	2
50代	6
60代	19
70代以上	10
無回答	1
合計	68



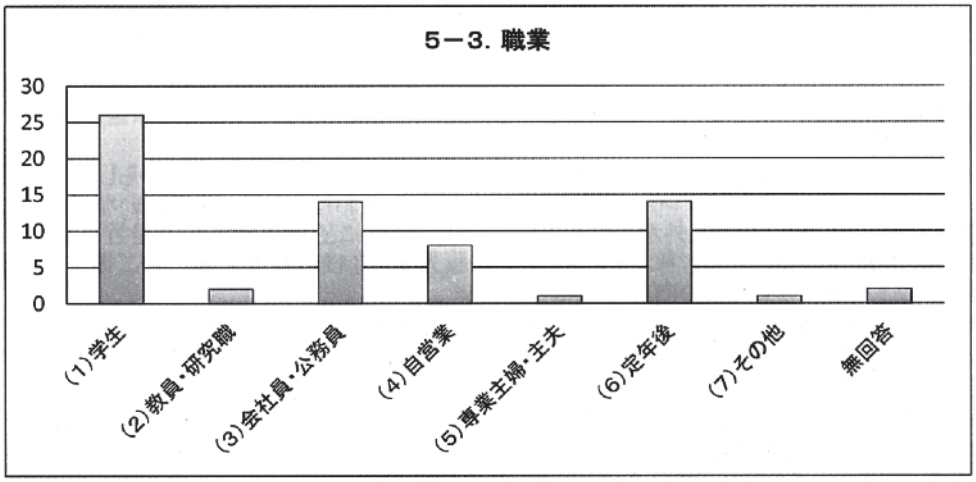
通常はご年配の方が多いが、今回は学生～社会人の年代が5割以上を占める

5-3. 職業

(1)学生	26
(2)教員・研究職	2
(3)会社員・公務員	14
(4)自営業	8
(5)専業主婦・主夫	1
(6)定年後	14
(7)その他	1
無回答	2
合計	68

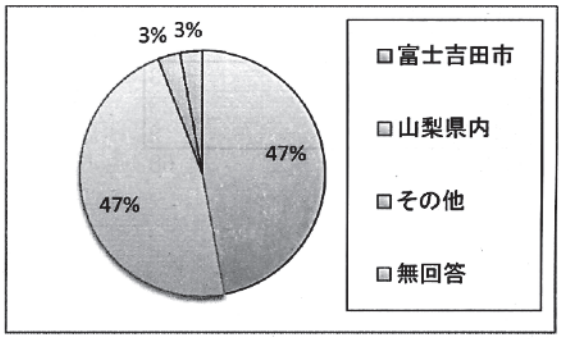
授業の1コマとなり都留文大生の参加が多いほか、近隣の北稜高校生も参加した

(6)以前の職業内訳:公務員7、会社員3、教員1、農業1



5-4. 住所

富士吉田市	32
山梨県内（富士吉田市を除く）	32
その他	2
無回答	2
合計	68



山梨県内（富士吉田市を除く）内訳：
都留市16、富士河口湖町4、甲府市3、
山中湖村3、忍野村2、笛吹市1、
道志村1、恩賜林1
その他都道府県内訳：東京都杉並区、京都府京都市

6. セミナーに関するご意見・ご感想

・高校でも地域を考える講演をしてほしい。次世代を担う私たちにとって必要な知識であると思う。
・地域活性化のプロセスというかはじめの第一歩を垣間見ることができてよかった。
・環境をはじめとしたコモンズの考え方についての見識が深まった。
・自分の町にすばらしい山がある！と意識したのは高校に入学した後です。「灯台下暗し」のように、近すぎて富士山の魅力をあまり感じたことがないまま人生の半分以上を過ごしてしまった。今日のお話のようなものは、今の私にとってはとても興味深く勉強になるものだった。今回のものを簡略化したものをぜひ、幼稚園、保育園、小中高の子供たちにお話ししていただきたい。幼いうちから富士山の魅力を感じてほしい！
・自分の卒業論文のテーマにそったものだったのでとても勉強になった。また、こうした機会がありましたら是非参加したい。
・落ち葉で有名になった徳島からこの富士吉田市へ嫁いできた。とても素敵な富士山、水、歴史ある土地、富士吉田なのに地元で育った人たちは何も自覚していなかった。とてもがっかりした。でも今日の講演を聴いて、地元の人、地域の人から、頑張っていきたいと思った。ありがとうございました。
・渡辺先生の富士山に対する真剣な取り組み（熱い想い）に感銘いたいしました。人と環境のかかわり方、大勢の人が理解しなければいけない。気をつけなければ。いろいろなことは、やってみなければわからない。行動することによって何かが変わってくる。このことがよくわかった。コモンズという言葉、考え方、勉強になりました。
・行政の縦割りは、長年の懸案事項であり、国、県、市町村ともにそれぞれに感じていることであろうと思う。一元化が図られ、お互いの知恵を出し合うことが環境問題に限らず、緊急の課題でしょう。子供に嫌われる大人にならないように心掛けたい。
・富士山の麓でのこのようなテーマのセミナーに対する地域としての対応はどうでしょうか。もっと多くの方が参加することが必要だと思う。特にリーダー的な存在の自治体職員にはぜひ考えてほしい。
・山梨県、静岡県だけでなく日本国民にとっての共有財産である富士山をどう保全し、観光と両立させていくか考える機会になった。
・渡辺先生はただ単なる大学の先生ではなく、社会的貢献をたくさんなさっていらしたことを初めて知り（特にバイオトイレ）、感動でした。中島先生のおはなしは、地元にいながらも知らないことも多く、今後も外からの富士講のいまの時代にどう甦らせるかの提言を期待。私たち地元の者たちも考えていきたい。佐藤先生、今後の富士北麓へのご提言、連携が期待されるすばらしい内容でした。
・セミナーを聞く機会が少ないので初めて参加し自分とは直接関わりがないと思っていたことも、専門家、研究者の話では関わりがあるのだな、関わらなくてはいけない。今後もこのような話を恩賜林組合が中心となって計画してほしい。
・レジデント研究者が地域において知識のトランスレーターとなり、生かしていくという形にとても納得というか、感心させられた。
・地域で起きていることの可能性を感じるきっかけとなった。
・日程にゆとりがほしい。

・私は講義内容が分かる方だと思うが佐藤先生が少し難しすぎた。
・何が自分にできることを探して、活動していけたらよいなぁと思うきっかけになった。
・コモンズに関して、より理解することができた。一方で、コモンズが日本時にとって認知されていないのではないか。多くの人々に、認知してもらわなければコモンズが社会に生かされていないのではないか。コモンズの考え方は、さまざまな可能性をもっている。ぜひ、認知率を高めていただきたいと思う。
・多くの講演会などは老人が多いが、本日は都留文大生などの若い人も多く参加されていて、今後に期待できると思う。将来が楽しみです。
・今回の講演会を通じて、さまざまなことを学ぶことができいつも私たちが見ている富士山をもっと大切にしていきたいと思った。それには大人の力も必要だが、やはり私たち高校生も知っておくべきだとおもうので少しずつ私たちらしく発信していきたいと思った。ありがとうございました。
・レジデント型研究者を目指したいと思った。富士山に育てられたので富士山に関する仕事に就きたく思っている。NPOに入り、渡辺先生と両県で組むのも面白いかなと思う。
・いろんな分野から、富士山やコモンズに関する話が聞けたのでおもしろかった。パネルディスカッションがライブ感があっておもしろかった。
・富士山周辺の自然、文化、観光について共有、共生と絡めてお話が聞けて地域のことについて興味をもつことができた。時間にルーズに話をしたところで説得力があるのだろうか。言いたいことはまとめて言うくらいできないのでしょうか。
・自然環境についてや町づくりについて学ぶことができた。自然環境を維持することも、壊すのも人間次第だと思った。富士山を守ることが私たちの役目だと感じた。ゴミ問題への取り組みも様々なされているが、こうした取り組みをしなくても、きれいな状態であることが来る日が近々あるといいなと思った。やはり、地域の人とたちとの協力が重要になってくると思った。
・たいへん参考になる話ばかりでした。特に渡辺教授の講演は内容もわかりやすくお話も上手でとてもおもしろかった。

(5) 学級づくりの向上をめざす実践講座の共催

今回の企画は、私が代表を務める「都留ことばの会」のメンバーである渡辺幸之助先生（上野原市立島田中学校教頭）の一言から始まりました。「学級づくりで悩んでいる若い先生方にベテラン教師のさまざまな実践知を紹介する機会を設けたいのですが……。」

学級づくりは学校教育の原点と言われています。学力の保障はもちろん、民主的な人間関係づくりや豊かな教室文化の創造の基盤となるのが学級です。しかし、その重要性が叫ばれるわりには、学級づくりの具体的な方法については学ぶ機会が少ないというのが実情です。大学のカリキュラムはもとより、学校現場に出ても、教員構成の関係で、ベテランの先生方の実践知が若い先生方に十分に伝わらないという問題があります。

全面的に賛同した私は、より多くの先生や学生たちに参加してもらえるように、地域交流研究センターとの共催として実施することにしました。10回の連続講座です。

第１回　4月28日(土) 渡辺幸之助「学級づくりの可能性とその方法」
第２回　5月19日(土) 佐藤喜美子「学級担任という仕事」
第３回　6月23日(土) 清水浩喜「保護者から信頼される学級づくり」
第４回　7月28日(土) 金勝武鑑「学級づくり・自治活動の原点」
第５回　8月18日(土) 土屋賢一郎・花形章「演劇・合唱・音楽活動を生かした学級文化の創造」
第６回　9月22日(土) 白井明彦「子どもの願いからスタートする学級づくり」
第７回　10月20日(土) 石田一元「音声言語を生かした活気ある学級づくり」
第８回　11月24日(土) 横山裕一「学級が好きになる、生活が楽しくなる学級づくり」
第９回　1月26日(土) 三浦明仁「小学校から中学校につなげる学級づくり」
第10回　2月23日(土) 杉本賢二「4月から学校体制としてスタートする学級づくり」

土曜日の18時～20時という時間設定ですが、30名ほどの参加者があります。現職教員に交じって、本学の学生も参加しています。毎回、それぞれの講師の先生方の豊富な実践事例をもとに、単なる一方的な講義ではなく、グループ間での意見交換、さらに実技指導なども含んだ、きわめて実践的な内容の講座が展開しています。

参加した現職教員の声をいくつか紹介します。

○学級担任の頃、問題を抱えている生徒を大切にしていたし、大好きだったのに、学担を離れ主任の立場になった頃から、意識が変わったかも…とグサリと反省させられた。初心に返ることを痛切に教えられた。（第2回講座・中学教員）
○日記指導はぜひ行ってみたいと思いました。つい、コメントを書く時間もないし…と思ってなかなかチャレンジできなかったので、2冊用意して取り組みたいです。班長会もやったことはありませんが、高学年をもつことができれば行ってみたいと思います。（第3回講座・小学教員）
○子どもたちをとにかく「自立」させなければと感じていたけれど、「依存しながら」自立していくことは視点として持っていなかったので、この視点をもって学級づくりに臨みたい。（第4回講座・小学教員）
○今年初めて学級の演劇をします。これ

までの学校では学年劇だったので関わることも少なく、何から劇をつくればいいのか不安でした。今日の発声練習など実際にできて楽しかったです。学級集団をよりよくしたり個に光を当てたりするきっかけとして演劇指導をしていきたいと思いました。（第5回講座・中学教員）

最後に、第6回の講座に参加した学生の感想を紹介しておきます。

この「学級づくり実践講座」は現場の先生方の実践が学べるということで、毎回とても楽しみにしています。白井先生は「子どもの願い」をとても大事に学級づくりをされてきました。具体的には、学年のはじまりに、黒板に大きな枠をとり、子ども一人ひとりの願いを付箋で貼って、学級づくり、係決めの元としていました。さらに子どもだけでなく「親の願い」も積極的に取り入れて、より開かれた学級づくりをしていたことも印象的でした。「こうしたい」「こうしてほしい」という願いを学級づくりに生かしてきたことがビデオに映った子どもや親の表情から伝わってきました。

私は将来、人と人との関わりを大切にするクラスを作りたいと思っています。白井先生はまさにそれを実践していました。子どもたちに何か問題が起きた時に、教師が介入することは簡単ですが、それをよしとせず、子どもたち同士で声を掛け合い解決できるように、朝の会など日常的な取り組みから人間関係づくりを行っていました。今まで漠然と考えていたことをより立体的にイメージすることができました。

（初等教育学科4年　込堂さくら）

（「地域交流センター通信22号」の16～17ページにおいても同様な報告を掲載しております。）

（文責・鶴田清司）

Ⅲ－３　『地域交流センター通信』の発行

１　本年度の発行の特徴について

この間、18号より表紙と裏表紙の成瀬洋平氏の絵をカラー刷りにし、20号（特集「地域・故郷を思う―東日本大震災と私たち―」）よりコンテンツのページを入れるようにし、機関誌としての体裁に工夫を加えてきている。本年度も当初の発行計画にしたがって22号、23号を発行したが、表紙タイトルをブルーの下地にすることにした。

年間2号の発行であるが、センターの新年度の新しい体制と各種事業の確認などを経て具体的な編集内容を構想していくことになり、また夏季休業の期間があり、最初の号の発行がどうしても12月になってしまう傾向があった。その結果、卒業式をメドとする次号との間隔が短いものになってしまうというジレンマを抱えながらの発行が続いている。本年度は、そのジレンマを少しでも改善しようと編集小委員会で作業を詰め、22号を11月21日に発行することができた。

本年度の各号は、下記に記すような特集を組んでいるが、20号特集の「地域・故郷を思う―東日本大震災と私たち―」は、22号の「特集2（その3）」、あるいは23号の内容記事として（その4）、継続して扱うようにしている。

2　編集作業の流れと編集小委員会の役割

センター「通信」の編集過程の基本は、本誌8号に記してある。ここでは、ごく具体的な作業過程を、今後の参考のために記しておく。

＜原稿の収集とデータ管理など＞

集まってくる原稿は、編集長と地域センター事務員が同じものをもち、集約したものを事務担当が統括編集者である北垣さんにデータを一括して渡す。北垣さんが入力・レイアウトに関わる作業を進めていく。編集長は逐次すべての原稿に目を通し、内容、分量、リード文の必要性など諸般の判断をもっていく。適宜、写真データ提供やその他の依頼などを行なっていく。また原稿割付に関しては、見開き関係を重視して必要な再調整を行なう。

＜編集委員会の準備＞

新年度に入ると、4月末に、編集長として近年の「通信」特集の一覧表を作成し、発行内容の経過について記憶を喚起しておく。5月の連休明けのころから、編集長として、「通信」編集の原案作成のために地域交流研究センター関連の諸実践の網羅的なリストアップ作業を行なう。センター会議の資料などのチェックが基本になるが、教授会など一年を通じて総合的に観察・考察しておくことが重要だろう。

＜校正関連作業について＞

進行中の実践もあり原稿が一度に揃わないため、どの原稿も三回の校正を原則にしているが、編集小委員会は相当の回数を開催するしかない。

＜2012年度の編集小委員会の開催記録＞

2012年

- 5月22日：第1回編集小委員会（22号、23号に該当する諸実践リスト、22号発行スケジュール原案、巻頭文執筆者候補リスト、などの資料を提示して説明・意見交換をする。）
- 5月29日：第2回編集小委員会（22号に限定した発行のスケジュール案、巻頭文執筆者、特集趣旨の説明・意見交換をする。）
- 6月 6日：地域交流研究センター会議＝地域交流センター通信編集会議（22号原案を承認する。）
- 6月 9日：巻頭文予定者に執筆依頼の電話（6月13日に正式の依頼文を発送）
- 6月12日：第3回編集小委員会（具体的な目次編成に向けて記事リストの吟味をする。）
- 7月 4日：第4回編集小委員会（台割や原稿依頼担当者などの最終確認。）
  …以降、7月中に原稿依頼を完了することを基本とする。8月末原稿締め切りとしておく。9月末に原稿集約を終える。…
- 10月 3日：第5回編集小委員会（22号の校正関連作業を開始する。）
- 10月 9日：第6回編集小委員会
- 10月16日：第7回編集小委員会
- 10月23日：第8回編集小委員会
- 10月30日：第9回編集小委員会（ここで、22号の校正作業と並行し、23号の原案検討を行なう…特集の基本イメージは前期の編集会議で了解されている。）
- 11月 6日：第10回編集小委員会（22号校正と23号案の検討）
- 11月 7日：地域交流研究センター会議＝地域交流センター通信編集会議（23号原案を承認する。）
- 11月14日：第11回編集小委員会（22号

の最終校正）
・11月20日：第12回編集小委員会（23号の編集案の具体化）
＊11月21日に22号の納品
・12月 4日：第13回編集小委員会（23号の詳細確定）
…以降、12月中に原稿依頼を完了することを基本とする。1月15日原稿締め切りとしておく。1月21日原稿を集約する。…

2013年
・ 1月22日：第14回編集小委員会（23号の校正関連作業を開始する。）
・ 2月 5日：第15回編集小委員会
・ 2月20日：第16回編集小委員会
・ 2月27日：第17回編集小委員会
・ 3月 5日：第18回編集小委員会
・ 3月 6日：23号の最終確認の作業
＊3月18日に23号の納品

＜「通信」発行に伴う関連の作業＞

各号の発行時から、センター事務局員が「通信」発送、配置、原稿料支払い関連作業を行なう。そのために事前に、原稿執筆者の連絡先などの一覧表を作成しておく。

3　発行日とページ数

第22号は、2012年11月21日に発行した。44ページである。

第23号は、2013年3月18日に発行した。32ページである。

4　各号の編集内容と読者の反響

【22号】

巻頭文は、噴火可能性が指摘されている「富士山」について、その成り立ちと何をどう考えるかについて、専門家である上杉陽氏に執筆していただいた。私たちの富士に関する認識を新たにする、実に貴重な文章である。ところで、このような災害に関わる問題については、専門家の発言は、たとえば避難対応、観光産業などの現状に大きな影響を与えるだけに、執筆依頼のタイミングに関わって大いに考えさせられるものがあった。

特集1は「子ども・学校が地域交流を支え促す」としたが、リード文でも述べたように、成長しようとしている若い世代の存在とその成長に関わるという営みの、地域社会・文化・歴史における格別な価値について意識を向けようとした。このテーマは世界史的にみても、私たちの目の前の事実としても、ヒューマニティーズ（人文学、「文科」）の探究という根源的な意味をもっていて、このテーマそのものが都留文科大学のアイデンティティに直結しているということを想起しようとした。

このテーマのもとに、SAT事業以下、19の実践に関わる記事を掲載することができた。いずれの記事からも、時間をかけて取り組んできた情熱と、交流における心の弾みが伝わってくる。そうした諸事例の記録を通して、その向こうに、子ども・大人・社会にどのような真実（切実な問題）が横たわっているかについて、読者とともに、お互いに考え合っていければと思う。

特集2は、「地域・故郷を思う―東日本大震災と私たち」の＜その3＞を組むことができた。この特集を継続しようということは、「風化」に対する「（都留文科）大学」としての「挑戦」ということでもある。

「トピックス」欄でも多彩な記事を取り上げることができたが、巻末に「富士道」を歩く実践が掲載されている。「世界遺産」の“ブーム”とは関係なく、自主的な地道な実践であることを誇らしく思う。そのように、富士とその裾野は、もともと都留地域交流研究センターのフィールド意識に在ることを大事にしていきたい。

【23号】

巻頭文は、「＜きく＞ことの意味と葛藤・課題」ということで、副編集長の田中夏子氏にお願いした。田中氏は、ご自身の研究意識そのものとして多くのフィールドに関わってこられているが、東日本大震災以降、繰り返し被災地支援に向ってこられた。その「ききとり」の実践経験と意思を、ことばを選んで書いてくださった。この巻頭文は、特集の趣旨とも重なり、また「小特集」にはできなかったが、「地域・故郷を思う―東日本大震災と私たち―（その4）」（釜石市の聞き取り調査の記事）とセットにもなっている。

特集は「観察し、聞き取り、表現する―私たち自身の心を働かせること―」とした。19の実践事例を、「自然観察とフィールド実践、交流」「種の保存の取り組み」「地域の生態―その変化の兆候」「フィールド活動を表現する」という四つの角度から編成した。現代社会はグローバリゼーション、過疎化などなどの社会変容が進行しつつあり、耕作放棄地が増え里山が消えていくなどの傾向が顕著になっていて、私たちの身近な自然や暮らしを自ら観察する動機や契機が薄れ、情報を受動的に入手する傾向が強まってきている。それは、私たち自身に備わっている、感じ認識する総合的な能力を衰退させることにもつながっているだろう。特集を通して、一つひとつの実践がささやかなものであっても、「私たち自身の心を働かせること」の大事な意味と可能性を考えあっていく機会になればと願う。

【読者の反響】

「通信」に対しては、毎号、丁寧な感想が多数寄せられている。以下に、読者からの感想をピックアップし、その抜粋を掲載します。

「…学生さんや先生ばかりでなく、近所の小学校の生徒・先生にも開かれていて、地域丸ごとの“学びの輪っか”とでもいうのでしょうか。…」（関東地方の市民）

「…私はまだ訪れたことがないのですが、通信に載せられた、豊かでやさしい感じを受ける絵や写真、どこかにあたたかみのある文章に、都留文科大学、都留市という＜場所＞を想像します。…私がとくに印象深く思い、そして感銘を受けるのは、通信の記事が背伸びをするようにではなくて、むしろしゃがみこむような構えで、身のまわり、自分の五感で直に感じ取れる距離にあること・もの・自然に対してとても注意深い目を向けていると思われるところでした。私は通信を読ませていただいてそのように感じ、奮い立たされるような気持ちにもなりました。…」（他大学院生）

「…『観察し、聞き取り、表現する』の特集、個人的にはとりわけ釜石市の聞き取り調査に関心を持ちました。（私の所属する学会で）『被災地域の声を聞く』というテーマで報告がありました。その時の状態調査という取り組みが、いわゆるアンケート調査や一問一答調査と違い、『傾聴』という活動であることに新鮮な印象を持ったのです。今回の通信に掲載されている釜石市での調査がまさにそのようなものであったと受け止めました。（私も宮城県の被災地を訪問したのですが）直接被災者の声を聞くことはなかったのですが、土台だけ残っている荒涼とした風景が焼きついております。都留文科大学が大学として取り組みを続けておられ、そこに学生が参加していることに大きな意義があると感じております。…」（元国立大学教授）

「…『通信』が新鮮に見えてきました。とくに23号では、田中（夏子）さんらしい最後の編集後記と巻頭の文に心が癒されました。ユニークなコミカレ（県民コミュニティカレッジ）への市民の参加、ナガランド先住民問題―知りませんでした―への目配りなど、小さな大学が大きな地域と大きな地球をつないで大きく息

づいている鼓動が聞こえるようでした。…」（元国立大学教授）
「…いつもながらの素晴らしい実践と丁寧なまとめに感銘を受けました。三月下旬に阿智村に伺った折、そちらのご卒業で非常勤を経て正規の役場職員になる方にお会いしました。いい卒業生も輩出しておられるんですね。…」（私学教授）
「…学生、市民の参加によるフィールド研究の楽しさを痛感するとともに、うらやましくも感じております。…」（私学教授）
「…学生・教員の協同での地域での学び、育ちが読みとれます。＜COC＞の予算もこうした地味なものをもとにして制度化されたはずですが、形になるときには化けてしまいそうです。田中夏子さんの巻頭文、胸に響きました。…」（国立大学学長）
「…テーマがとても魅力的ですし、一つひとつの記事もとても丁寧で、静かに読みいっております。…こちらは慌しく、そのために気が滅入ることもしばしばですが、通信に見られるような、執筆者のみなさんの丁寧なくらしから生まれるであろう丁寧な考え方と書きぶりには、学ぶところがとてもたくさんあります。…」（国立大学准教授）

5　2013年度に向けて―課題と来年度の発行予定―

（イ）編集長・副編集長の体制について

2008年度の第14号の編集から副編集長を新たに配置することになった。それはこの「通信」の役割の評価が学内外において定着することと並行することであった。また、次期編集長を見通していくという実際的な意味もあった。

具体的には14号、15号と泉桂子氏が担われ、16号から23号までは田中夏子氏が担われた。副編集長の存在は、編集実務上の前進を安定化させるだけではなく、編集内容の視点を深め視野を広げていく上でたいへん重要なものとなった。

この副編集長経験者二名が本年度をもって本学を去られることになったが、副編集長の後任をできるだけ早く見出し、さらに編集長交代を見通していくことは、「通信」発行の継続にとって重要な課題である。

なお田中夏子さんは本年度をもって退職されたが、多忙な職務をもちながらさらに副編集長として絶大な貢献をなされたことを、特に記しておきたい。

（ロ）地域センターのスタッフの強化について

地域交流研究センターはさまざまな交流実践を展開しているが、その交流実践を「通信」に反映させてきている。ところでその交流実践はいずれもその担い手に相当の負担を強いる関係にもあり、このことが実践交流の展開と「通信」発行の幅と質を規定する重要な要因にもなっている。すでに地域交流研究センターの諸実践はぎりぎりというべき高水準のものとなっており、関連する専任教員の配置を不可欠とするところにきていると判断されるべきである。

同時に、地域センター「通信」の発行だけでも、原稿データの整理、一連の校正作業、発行された「通信」の発送と配置の作業、原稿料の支払い事務、「通信」の在庫管理、その他の多くの事務があり、また公開講座などなどの交流諸実践においては、準備から当日前後の庶務にいたるまで、たくさんの事務的仕事を伴っている。したがって、経験を蓄積していける常勤のセンター事務職員を配置することも重要な課題であり、そのための具体的方途を考えるべきである。

この専任教員と常勤事務職員の配置の必要性については、大学基準協会が2010年度（平成22年度）に、地域交流研究センターの活動を高く評価しながらも、「ただし、活動内容に見合ったスタッフ、体制の拡充が課題となっている」と指摘していることに相応している。

なお本年度も、非常勤として事務職を担当された方は、センター会議や「通信」編集会議の要請によく応え、積極的に職務を担ってくださった。来年度は、非常勤職員が2名となり、あらたな連携と活躍が期待される。

（ハ）コミホの防音の課題と新たな地域センター施設

懸案の、コミホにおける音楽系サークル利用による音の「迷惑」については、毎年当局に対応策を申し入れているにもかかわらず解決・改善されず、本年度も地域交流研究センターの実践活動と「通信」編集作業が一定期間停滞した。何年にもわたる問題の経緯を見れば、当局がこの問題を事実上軽視しているのではないかと推察される。

今の場所に地域センターの拠点がつくられたことは、大きな前進であったが、大学基準協会も指摘しているように、地域センター施設を早急に抜本的に拡充することは、もはや喫緊の課題である。そのための具体的な検討作業に入るべきであろう。

（ニ）「通信」バックナンバーの「総目次」の必要性について

「通信」20号からコンテンツの見開きページを入れるようにしたが、これにより冊子としての体裁が整い、読者が手にしたときの印象も一変したのではないかと思われる。それ以前の号は、すべて開いて見なければ内容を掴むことができないわけで、各号のせっかくの記事が効果的に生きていないということにもなる。

このことはまた、貴重な交流の諸実践の記録を共有のデータとして活用しにくいということでもあり、コンテンツのページの無かった号も目次化作業をし、総合的な「総目次」を編集しておく必要性が浮上してきている。

また「通信」は2003年3月に創刊されており、本年度で10年を経過したことになる。さらに次年度は25号までを刊行する予定であることから、次年度を「節目」として「総目次」を特集するのがよいだろう。

（ホ）在庫管理の方針について

過去に発行した「通信」の残部数は、センター事務局員の調査によって明らかになっているが、各号によって相当のばらつきがある。バックナンバーのストックについては、その有効活用を想定していくべきであり、また保管空間の問題もあり、「在庫ルール」（たとえば、古いものは50部以上は廃棄するなど）を検討しておくのがよいだろう。なおその検討に際しては、「通信」バックナンバーはすべて都留文ホームページで公開されていることを念頭におけばよいだろう。

（へ）2013年度は、24号を11月に、25号を2014年3月に発行する予定である。

（文責：畑　潤）

Ⅲ－４　科目「地域交流研究Ⅲ」の開講

平成23年度より、地域交流研究センターにおける教養科目として開講することになり、山梨県観光部の新規事業でもある「やまなし観光カレッジ事業」との連携が始まった。この科目は、下記に示すように、10回の外部講師による講座、2回のフィールド・ワーク、そして1回以上のイベント・ボランティア参加という3つの要素から構成されている。

☆講座

日　　程	テ　ー　マ	講　師	備　考
10月 4日	開講式、授業ガイダンス	杉本　光司	
10月11日	山梨県の概要と観光振興	土屋　直己・内田　雄士	山梨県観光部/やまなし観光推進機構
10月18日	山梨の歴史	堀内　　真	山梨県立博物館
10月25日	山梨と富士山	横尾　幸江	ひめねずみ社
11月 8日	郡内織物の新しい挑戦	前田　市郎	甲斐絹座(前田源商店)取締役
11月15日	甲州印傳	上原　勇七	(株)印傳屋上原　会長
11月22日	山梨の果実	堀内　　圓	甲斐いちのみや金桜園　社長
11月29日	山梨のワイン	古屋　真太郎	原茂ワイン(株)　社長
12月 6日	地域活性	浅川　裕介	北杜市　産業観光部
12月13日	山梨の方言『だっちもねえこんいっちょし』	五緒川　津平太	作家(本名：大堀　卓)
12月20日	都留市の魅力	依田　博江	都留市産業観光課
1月10日	まとめ（レポート作成に向けてを中心に）	杉本　光司	

☆フィールド・ワーク

日　　程	方　　面	視　　察　　先
11月10日(土)	郡内地域	山梨県環境科学研究所、山梨県立富士ビジターセンター、フジヤマ・ミュージアム、富士浅間神社、尾県郷土資料館
12月 1日(土)	国中地域	浅川伯教・巧兄弟資料館、萌木の村、シャトー勝沼

山梨県環境科学研究所での研修

萌木の村での研修

大型バス2台で郡内・国中地域の施設を中心にフィールド・ワークを実施

受講者数は昨年度より少なかったものの79名であったが、山梨県による「やまなし観光カレッジ事業」修了認定の条件、

①7割以上の講義の出席
②1回以上のフィールド・ワーク参加
③1回以上のイベント・ボランティア参加
④山梨県観光行政に対する提案レポートの提出

という4つの条件をクリアして修了者として認定された者は、受講者の76%、60名になりました。なお、地域で開催されるイベントへのボランティア参加という条件をクリアするため、イベントが少ない時期や地域性の中、多くの学生が工夫して山梨県内各地でボランティア活動を行った。

また、県立桂高等学校からの依頼を受け、10月18日、25日、11月8日、15日の4回には、毎回、高校2年生40名ほどが受講した。彼らが大学の講義に対し熱心に耳を傾ける姿は、大学生にとっても

非常に良い刺激となったように感じた。出席した高校生からは、出前講座とはちがい、大学での生の授業に触れて、高校とは違う雰囲気を味わえて良かったという感想が書かれていた。

1月30日には、加藤学長、山梨県観光部の方々の出席をいただき、山梨県による修了認定証の授与式が開催された。受講者の感想の多くは、山梨県で生活していながらも何も知らなかったという現実と、山梨に関する多くの魅力を発見でき、山梨がとても好きになった、また、もっと早くこの授業を受けておけば良かったという4年生の言葉などが寄せられた。

Ⅳ．地域貢献活動

Ⅳ－１　山梨県地域教育フォーラム南都留集会

本学は「南都留地域教育推進連絡協議会」の構成員であり、毎年晩秋に開催される「山梨県地域教育フォーラム南都留集会」では、各分科会の助言者として本学教員が参加・協力してきている。本センター設置以後は、センターが人選・依頼・派遣を担当する形をとっている。

本年度（平成24年度）は11月2日(金)、富士吉田市立下吉田第二小学校を会場に第15回目の集会が開催された。日程については、本学教員が参加しやすい桂川祭期間中の開催を配慮していただいている。

今回の第15回集会は、下に示すような7つの常設分科会が設置され、それぞれ2本程度の実践レポートをめぐって検討・討議がおこなわれた。本学からは、助言者として、第1分科会に筒井潤子（初等教育学科）、第2分科会に山森美穂（初等教育学科）、第4分科会に西本勝美（初等教育学科）、第5分科会に杉本光司（情報センター）、第7分科会に田中昌弥（初等教育学科）と、5つの分科会に本学教員を充てることができた。特に、山森美穂先生には、第2分科会において、「児童生徒の理科離れ」にスポットをあて、化学ゼミ生と取り組んでいる「谷二ラボ」の活動についての学生による実践報告のサポートも含め参加いただくくことができ、田中昌弥先生とともに初参加という事で、良い経験が出来たとの感想も寄せられ、これからも地域貢献活動に対して、他の教員の参加が望まれる。

第1分科会
幼稚園・保育園・小学校部会
「接続の視点を広げる」
第2分科会
小学校・中学校部会
「連携を通して興味・関心を育てる」
第3分科会
中学校・高校部会
「地域に開く高校、地域に開く大学」
第4分科会
小・中・高児童生徒部会
「縦の連携を作る　高校からのアプローチ」
第5分科会
行政・地域団体・学校部会
「子どもを支え育む」
第6分科会
特別支援教育部会
「連携が成長を支える」
第7分科会
PTA部会
「子どもを認め・励まし・育てる」

この分科会の中で、第5分科会においては、都留市における「放課後子ども教室」のプログラムの内、旭小学校における取り組みの状況を、都留市教育委員会学びのまちづくり課の担当者より報告があり、本学生も指導員として参加しており、非常に大きな存在となっていること

も発表された。

本集会は、構成員・構成団体が官民含めてきわめて多岐に渡り、「地域教育」（地域の子どもは地域で育てる）をトータルに推進していくうえで大きな可能性を有している。したがって、本集会への協力は、本学が都留市のみならず、南都留という、より広域の諸学校・諸機関との連携を実施していくうえで貴重なネットワークづくりの一環となり得る。ただし、毎年の集会の設定では、レポートの依頼や各分科会のテーマ・柱立てなど十分に手が回らない状況のようである。ここ数年、本学教員が特定の分科会に継続的に関わり、テーマ設定やレポートの発掘の段階から協力し、それぞれの分科会が経年的に研究を蓄積できるような体制をつくれないかと事務局と意見交換もしているが、実現は難しいようである。

この点で、7年前から、集会に先立つ10月中旬に、分科会毎にレポーターおよび役員と、本学からの助言者が事前に打ち合わせをおこなう機会を設定していただいたのであるが、主催者側、本学教員側の双方から好評であり、連携が一歩進められたと言えよう。また、分科会によっては継続的に関わりを持つ教員も出てきている。

今年度も、教育に関心を持たれている多くの分野の方々が南都留地域から約300名以上も集まり、全体集会、その後の分科会へと積極的に参加し、それぞれの提案に対しても熱心に質問を行うなど、確実に、地域の恒例フォーラムとして認知されているように感じた。

事後に事務局がまとめたアンケートによると、各分科会参加者の満足度はきわめて高く、とりわけ助言者の発言や役割を高く評価する回答が目立った。このような形での本学教員の「地域教育」への貢献が切実に求められており、実際に、本学教員が果たせる役割が大きいことを再認識させる結果であった。引き続き、事務局（富士・東部教育事務所地域教育支援担当）との連携を密にしながら、より発展的な協同のあり方を追求したい。

なお、主催事務局担当者の富士・東部教育事務所地域教育スタッフの立川博さんによる詳細な報告が「地域交流センター通信23号」27ページに掲載されている。

（文責・杉本光司）

Ⅳ－２　都留市子ども教室事業

１　「子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成16年度）および「地域教育力再生プラン」（平成17・18年度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども協育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会学びのまちづくり課生涯学習担当が事務局を担って実施している7年目の事業である。「学校の体育館やグラウンド、図書室等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、小中学生を対象とした放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの様々な活動を行う」もの。本学の学生には学生指導員としての協力・活動が期待されており、平成16年度から20年度までの5年間は、本学教員の西本勝美（初等教育学科）が、21年度からは杉本光司（情報センター）が大学側のコーディネーターとして、「都留市子ども教育連絡協議会委員」として担当している。なお、平成19年度より、市町村が費用の3分の1を負担することとなり、県下の多くの類似事業が廃止となるなかで、都留市がいちはやく事業の継続と費用負担を決定したことは特筆に値し、平成21年度からは、福祉課が担当する「放課後児童クラブ」（学童保育）事

業との連携も開始されたことにより、4地区（東桂、宝、谷村第二、旭の各小学校区）のみでなく、市内全地区への拡大を希望する声も多い。

学生指導員の活動の中心は「遊び」と「読書と学習支援」であるが、4地区の住民の協力体制が整ってきたこともあって、当初に比べて学生指導員の要請が回数、人数ともに若干減少する傾向にある。また、各小学校が体育館やグラウンドを開放できる日時が、本学学生が参加しやすい日時と一致しない平日の場合もあり、学生が多数参加できる日時の設定となるよう、事務局にはたびたび意見を出している。

そうした日時の制約にもかかわらず、今年度も積極的に参加する学生がおり、リピーター学生が少なくない状況からも学生たちに高い評価を得ている結果としてとらえることができる。また、市側のコーディネーターからも、学生の活動への高い評価をいただいている。学生にとってはささやかな取り組みではあるが、3年次以降の教育実習や「学校参加（ＳＡＴ）」とはひと味違った、より気軽に子どもたちと接する機会が持てる２年次推奨の活動として定着しつつある。都留市内の小中学校と本学とのつながりを太く、豊かなものにしていくうえで、本事業の継続と発展は重要な一環を占めることになろう。

2　今年度の活動状況

前年度に引き続き、東桂、宝、谷村第二、旭の4小学校区において、各地域協働のまちづくり推進会などの協力を得て子ども教室が実施された。小学校のグラウンドや体育館、公民館などの小学校周辺の公共施設、野外などにおいて、遊び、自然・農業体験活動、料理、文化的活動、ものづくり活動、その他特別活動や交流活動が実施された。

本年度（平成24年度）は、東桂小、谷二小、宝小、旭小の4拠点校から、年間で計44回・74名の学生指導員派遣の要請があったのに対し、計0回（20年度：34回、21年度：59回、22年度：56回、23年度：28回）、延べ60名（20年度：52名、21年度：90名、22年度：97名、23年度：40名）の学生を派遣することができた。昨年度に引き続き本年度にも連続して積極的に参加してくれた学生もいた。（参加プログラムの全体の状況を添付します）

教室名 （開始年度）	実施回数	延べ参加者数 （登録者数）	延べ指導員数 （学生含む）	主な活動内容
桂子ども教室 （H16～）	45回	806人(89人)	208人	・遊び（スポーツ、昔の遊び、など） ・自然体験（野菜作り、山歩き、釣りなど） ・ものづくり（手芸、陶芸、工作など） ・料理（収穫した野菜を使った料理、もちつき、お菓子作りなど） ・その他（絵画、将棋、囲碁、書道、学習支援、ボランティア活動、公開講座など）
宝っ子クラブ 七里 （H18～）	41回	373人(32人)	200人	
三吉子ども 体験教室 （H18～）	42回	489人(89人)	171人	
旭子ども教室 （H19～）	46回	813人(36人)	232人	

2012年度「子ども教室」学生要員応募状況

No	日　程	活　動　内　容		集　合　場　所		時　　間	定員	参加者数	希望者数
1	6月 9日(土)	自然体験	植付、自然散策	東桂小	畑	9:00～11:30	1	1	3(+2)
2	6月13日(水)	農業体験	種まき	谷二小	畑	15:00～16:30	2	1	1(-1)
3	6月16日(土)	ものづくり	陶芸（1～3年生）	東桂小	コミュニティー	13:30～15:30	1	1	2(+1)
4	6月20日(水)	遊び	フットサル	旭小	グラウンド・体育館	14:50～16:30	4	4	7(+3)
5	6月27日(水)	ものづくり	夢風車づくり	宝小	多目的ホール	15:00～16:30	2	2	7(+5)
6	6月27日(水)	遊び	フットサル	谷二小	グラウンド・体育館	15:00～16:30	4	4	4
7	7月 4日(水)	農業体験	カブの収穫	谷二小	畑	15:00～16:30	2	2	5(+3)
8	7月14日(土)	自然体験	観察・ウォーキング	東桂小	野外（畑）	9:00～11:30	1	1	2(+1)
9	7月15日(日)	自然	河川清掃	谷二小	菅野川	9:00～11:00	2	2	7(+5)
10	7月21日(土)	ものづくり	陶芸（4～6年生）	東桂小	コミュニティー	13:30～15:30	1	1	1
11	7月22日(日)	自然	釣り	谷二小	菅野川	8:30～12:00	2	2	5(+3)
12	7月26日(木)	学習支援	読書・学習支援	宝小	多目的ホール	9:30～11:00	1	1	1
13	7月26日(木)	読書・学習	夏休みの友･課題プリント	旭小	旭小図書館	10:00～11:30	1	1	2(+1)
14	7月26日(木)	読書・学習	夏休みの友･課題プリント	谷二小	図書室	10:00～11:30	1	0	0(-1)
15	7月27日(金)	読書・学習	夏休みの友･課題プリント	旭小	旭小図書館	10:00～11:30	1	1	3(+2)
16	7月27日(金)	読書・学習	夏休みの友･課題プリント	谷二小	図書室	10:00～11:30	1	1	1
17	8月 3日(金)	遊び	シャボン玉･水でっぽう遊び	宝小	多目的ホール	9:30～11:30	2	2	5(+3)
18	8月 8日(水)	ものづくり	工作	東桂小	コミュニティー	9:30～11:30	2	1	1(-1)
19	8月 9日(木)	農業体験	花の収穫､被災地に送る準備	谷二小	畑	10:00～11:30	2	2	4(+2)
20	8月10日(金)	ものづくり	木工工作	谷二小	図工室	9:00～11:30	2	2	5(+3)
21	8月20日(月)	自然体験	種まき、探り掘り	東桂小	畑	9:00～11:30	1	1	2(+1)
22	8月21日(火)	遊び	将棋	谷二小	多目的ホール	10:00～11:30	2	1	1(-1)
23	8月22日(水)	遊び	将棋	谷二小	多目的ホール	10:00～11:30	2	1	1(-1)
24	8月25日(土)	ものづくり	陶芸・絵付け	東桂小	コミュニティー	13:30～15:30	1	1	2(+1)
25	9月 5日(水)	遊び	ドッジボール	旭小	営農指導センター	15:00～16:30	2	2	4(+2)
26	9月 8日(土)	ものづくり	陶芸・絵付け	東桂小	コミュニティー	13:30～15:30	1	1	1
27	10月 3日(水)	農業体験	小豆の収穫	谷二小	畑	15:00～16:30	2	2	2
28	10月10日(水)	遊び	グラウンドゴルフ	谷二小	グラウンド・体育館	15:00～16:30	3	2	2(-1)
29	10月20日(土)	自然	山歩き	旭小	山	9:00～12:30	2	2	4(+2)
30	10月28日(日)	自然	河川清掃	谷二小	菅野川	9:00～11:00	2	2	3(+1)
31	11月 3日(土)	自然体験	収穫	東桂小	畑	9:30～11:30	1	1	2(+1)
32	11月 7日(水)	遊び	手バットで野球	谷二小	グラウンド・体育館	15:00～16:30	4	0	0(-4)
33	11月20日(火)	自然体験	自然探索	東桂小	野外	9:30～11:30	1	1	2(+1)
34	12月26日(水)	学習支援	読書・学習支援	宝小	多目的ホール	9:30～11:00	1	1	2(+1)
35	12月26日(水)	読書・学習	冬休みの友･課題プリント	旭小	旭小図書館	10:00～11:30	1	1	2(+1)
36	12月26日(水)	読書・学習	冬休みの友･課題プリント	谷二小	図書室	10:00～11:30	1	1	1
37	12月27日(木)	読書・学習	冬休みの友･課題プリント	旭小	旭小図書館	10:00～11:30	1	1	2(+1)
38	12月27日(木)	読書・学習	冬休みの友･課題プリント	谷二小	図書室	10:00～11:30	1	1	1
39	1月 7日(月)	ものづくり	工作・凧づくり	東桂小	コミュニティー・グラウンド	9:30 ～11:30	2	1	1(-1)
40	1月 8日(火)	遊び	凧を作って､凧あげをしよう	谷二小	図工室･グラウンド	9:30 ～11:30	2	2	3(+1)
41	1月16日(水)	遊び	正月遊び・カルタ	谷二小	多目的ホール	15:00～16:30	2	0	0(-2)
42	1月23日(水)	遊び	正月遊び・カルタ	旭小	営農指導センター	15:00～16:30	1	0	0(-1)
43	1月24日(木)	遊び	正月遊び・カルタ	旭小	公民館	14:50～16:30	1	1	1
44	2月13日(水)	遊び	昔の遊び	谷二小	多目的ホール	15:00～16:30	2	2	3(+1)
活動総数：44　定員数合計：74　参加者数合計：60　希望者数合計：102　応募学生合計：21　参加学生：22									

3　放課後児童健全育成事業（学童保育）との連携について

平成21年度からは、全4教室において、学童保育の子どもたちにも「子ども教室」への参加を積極的に呼び掛け、学童保育を実施していない日（日曜日など）にも、一緒に活動できる居場所として「子ども教室」を開催し連携を図った。

4　大学主催の市民公開講座との連携

今年度より、新たな試みとして、市民公開講座と連携して、次の一覧にあるように、5人の講師による8講座が開催され247人が参加した。来年度からは、「子ども公開講座」として位置づけて開講する予定である。

（文責・杉本光司）

講　　師	月　　日	時　　間	開催場所	内　　容
吉住　典子	2012/ 8/ 7(火)	午前10:00−11:30	都留文科大学	葉脈しおり作り
寺川　宏之	2012/10/ 4(木)	午後 3:00− 4:30	桂子ども教室	折り紙を使った算数
清水　雅彦	2012/ 8/ 2(木)	午前10:00−11:30	都留文科大学	音楽を楽しもう
日向　良和	2012/ 8/ 3(金)	午後 1:30− 2:30	旭子ども教室	巨大絵本を使った読み聞かせ
	2012/ 8/ 9(木)	午後 1:30− 2:30	桂子ども教室	巨大絵本を使った読み聞かせ
	2012/ 8/10(金)	午後 1:30− 2:30	宝っ子クラブ七里	巨大絵本を使った読み聞かせ
	2013/ 1/ 7(月)	午前10:00−11:00	三吉こども体験教室	巨大絵本を使った読み聞かせ
北垣　憲仁	2012/ 7/ 1(日)	午前10:00−11:30	都留文科大学	都留は自然の博物館

Ⅳ−3　文大ボランティアひろば

1　「文大ボランティアひろば」とは

本事業は、平成20年度に開始された取り組みである。平成20年5月に、都留市社会福祉協議会の森嶋美子氏と、西本勝美地域交流研究センター長（当時）とで相談・打ち合わせをおこない、「地域のボランティアニーズと本学学生を引き合わせるシステム」の構築を目指すこととなった。ただし、福祉系の学部・学科を持たない本学では、授業とタイアップした取り組みは難しく、「大学ボランティアセンター」の設置はさらに難しい。そこで、学内にある学生ボランティアサークルを土台として、緩やかな「連絡協議会」的な会合を持つところから始めることになった。相談過程で重視し、両者で共有した「原則」は、

①ボランティアはあくまで自発的なものでなければならず、大学やセンターが押し付けるものではない。
②それぞれのサークルの個性や独自性を最大限に尊重し、新たな負担をかけない。
③活動の蓄積のある既存サークルこそが新しい取り組みの中核である。

といった事項であった。本事業の発展的継続にあたっては、常にこれらの「原則」に立ち戻りつつ、取り組みを見直していくことが肝要であろう。

こうして、社会福祉協議会（森嶋氏）からの呼びかけと日程調整を経て、平成20年6月から会合をスタートさせることができた。主軸となるサークルは「つくしの会」、「Σソサエティ」「つる子どもまつり事務局」の3団体であり、平成21年度からは、学内の「Work−Waku都留」も主軸サークルの一つとして参加した。さらに、平成23年度からは「IKI（いこいのひろば支援サークル）」が、そして、今年度からは、事務局運営を担当するサークルとして「ボランティアクラブ」が

加わり、月例会においても司会を担当した。会合の内容は、前回の会合以降の各団体からの活動報告、社会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、各団体からの協力呼びかけや新事業の提案、地域のボランティア・コーディネーターからの意見などが中心である。社会福祉協議会にとっては、とりわけ大学生対象のボランティアニーズを持ち込む「窓口」ができたことが大きく、サークル各団体にとっては、近場のボランティアニーズを周知できること、相互の活動に触れて刺激を受け合えること、これらを通じて各団体の活動が活性化されることが大きい。また、会合の名称については学生たちの発案に委ね、最終的に「文大ボランティアひろば～だれでもどうぞ～」（略称：ぼらひろ）と命名された。この名称は、各サークルには所属していない個人としての学生や、一般の住民の参加も歓迎するという意味合いも持っている。

さて、「ぼらひろ」は発足以来、基本的には第4水曜日の午後6時15分から4号館2階会議室にて開催されることとなったが、回数を重ねるにつれて、各サークルの活動を超えて、参加サークルや個人が協働しておこなう活動への期待も高まり、先ず「ペットボトルのキャップを集めて世界の子どもたちにワクチンを届ける」活動に取り組むことから始めた。学内の5カ所に回収ボックスを設置し、各サークルが当番で回収し、毎月、都留市社会福祉協議会に届けている。さらに、ボランティアひろばでは、新しい取り組みを始める際には、その都度、新しいプロジェクトチームを立ち上げて対応することにした。こうした中から、平成21年度には「障がいのある方々の余暇活動支援」について新たな取り組みが開始され、同時に、ここに参加する学生もこれまでのような部活動やサークル活動に属しない個人参加学生も迎え、定例会には毎回20名を超す学生・社会人が参加するようになり、徐々にではあるが、学生たちの間に着実に浸透しつつあることを実感できるようになった。学生と社会人とをつなぐ調整役として地域交流研究センター長の杉本光司も出席している。

昨年度の「ボランティアひろば」は、4月25日、5月23日、6月27日、7月25日、9月26日、10月24日、11月28日、12月19日、1月23日、3月27日の10回開催した。

2　「いこいのひろば」の誕生

ボランティアひろばでは、社会福祉協議会や市内の組織・団体を通して募集される、学生ボランティアの要請に対して、積極的に多種多様な活動に参加してきたが、以前から、そのボランティア活動に参加している、市内の「授産園みとおし」で働く人たちとの交流の中から、日常的に、障がいのある方々への支援が、何かできないだろうかという声により、平成21年5月に「ここに集うメンバーで、とにかく何か一緒に始めてみよう！」という新たな目標が掲げられた。そして、当初から中心メンバーの一人として参加している、「授産園みとおし」の佐藤保成さんから提案されていた、「障がいのある方々への余暇活動支援」の実現のための取り組みを行うことにした。「文大ボランティアひろば」の交流から派生したプロジェクトとして位置付けることにより、関心のある人たちが気軽に参加できる場として、その名称も『いこいのひろば』と名付けた。「障がいの有無に関係なく、地域に住む人たちみんなが楽しく充実して過ごせる地域」を目指し、学生だけではなく、地域に住む方々と共に、1ヶ月に1度イベントや企画を定期的に行えることを目的としたプロジェクトである。そこで、障がいのある人たちとその身近にいる人たちの声をじっくり聞こうということで、この新しい活動は平成21年7月1日に始まり、2回の試行活動後、平成22年10月から正式に「いこいのひ

ろば」の活動が開始された。

この活動は基本的に毎月1回開くことを目標に、活動母体となる体制づくりから始めることにした。

先ず、活動指針となる企画書の作成であるが、先進組織としている、東京都渋谷区恵比寿にある、知的障害者恵比寿教室「えびす青年教室」で作成した企画書を参考とさせていただいた。この、「えびす青年教室」は、渋谷区教育委員会が、主に知的障がいのある方々の社会教育活動の支援並びに、社会的ハンディキャップを背負った社会参加の一環を助成するため、障がい者ボランティアが一緒になって活動できる場・プログラムを提供することにより、障がい者とボランティアの人間的成長、相互理解・信頼関係の構築等を図ることを目的として、原則として毎月一回支援プログラムを開催し、積極的に活動している場所である。

☆「いこいのひろば」企画書（一部抜粋）

(1) 事業目的

障がいの有無に関係なく、地域に住む人たち全員が楽しく充実して過ごせる地域づくりを目的とする。

(2) 主催者

いこいのひろば実行委員会

(3) 対象者

知的障がいのある人で、都留市保健福祉センター「いきいきプラザ都留」まで通うことのできる18歳以上の人。および、こうした活動に関心のある人。

※原則として登録者が活動に参加できることとする。

※知的障がいのある人で、18歳以上の人のことを「参加者」と呼ぶ。

※参加費を毎回100円程度集金する（プログラム内容によっては追加料金）。

(4) 開催場所・回数・時間

〇原則として都留市保健福祉センター「いきいきプラザ都留」で行い、プログラム内容によって館外で活動することもある。

〇原則として毎月1回、 第3日曜日、年間10回（8月・2月休み）。

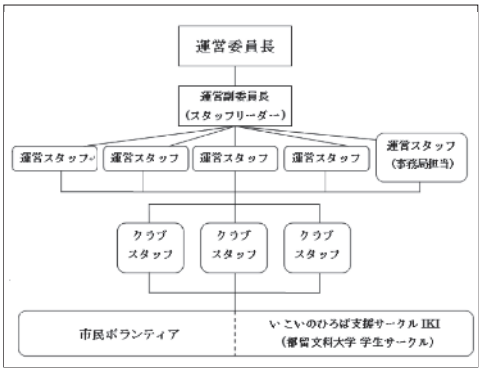
〇開催時間

参加者：午前9時45分～午後3時30分。スタッフ、ボランティア：午前9時00分～午後5時00分まで（事前準備、反省会含む）。

(5) 運営体制・組織図

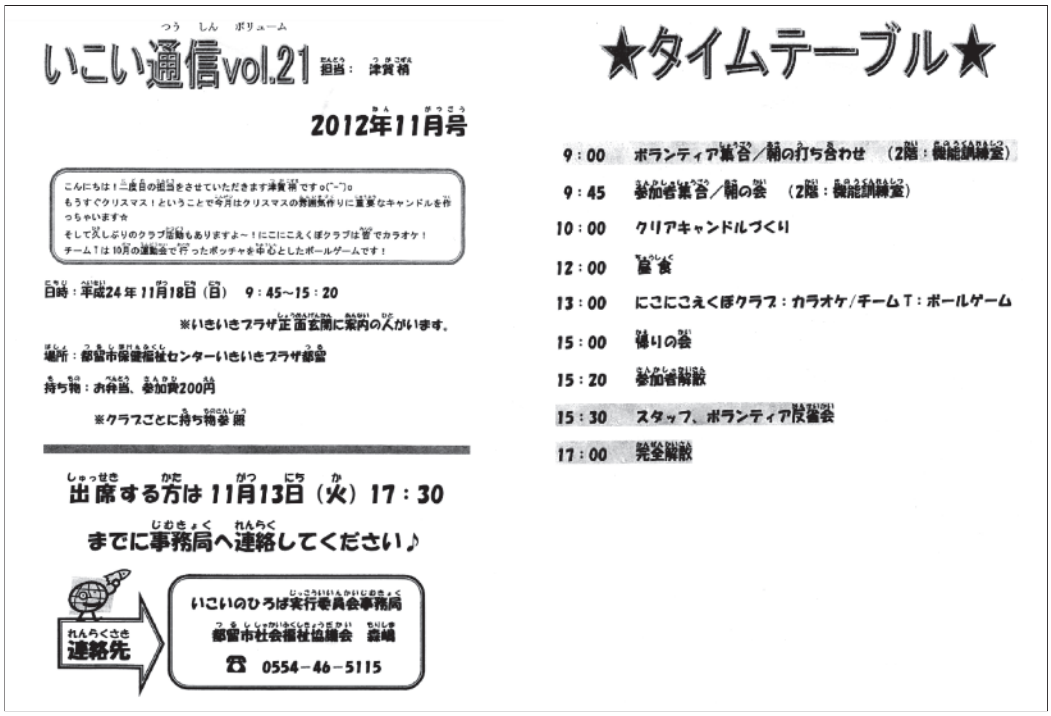
本事業の目的を達成するために、参加者の要望をふまえたプログラムを安全かつ丁寧に実施していく必要がある。そのために、障がい者生活支援の経験のある方に組織に入ってもらい、スタッフ、ボランティアの勉強会も適宜行っていく。プログラムの企画・運営はスタッフとボランティア中心で行うが、希望やプラグラムに応じて参加者も参加する運営体制をとっていく。また、ボランティアは、人数把握や個人情報保護の観点から参加者と同様に登録制にする。

【組織図】



平成22年10月10日に第1回目の「いこいのひろば」がスタートし、平成22年度には4回、平成23年度には10回開催し、平成23年2月のまとめの会において通算14回目の開催となった。平成24年度も前年度に引き続き10回開催した。

毎回の開催に向けては、各会の担当者が中心となり、3回の打ち合わせ会を開き、入念な打ち合わせを実施する。1回目は主にプログラム内容について、2回目は、「いこい通信」の発送、3回目は、参加者の把握、当日のプログラムに合わせた役割、日程確認、準備すべきもの等



いこい通信vol.21　担当：津賀朔

2012年11月号

こんにちは！二度目の担当をさせていただきます津賀朔です o(^-^)o
もうすぐクリスマス！ということで今月はクリスマスの雰囲気作りに重要なキャンドルを作っちゃいます☆
そして久しぶりのクラブ活動もありますよ～！にこにこえくぼクラブは宴でカラオケ！
チーム T は 10月の運動会で行ったボッチャを中心としたボールゲームです！

日時：平成24年 11月18日（日）　9：45～15：20

※いきいきプラザ正面玄関に案内の人がいます。

場所：都留市保健福祉センターいきいきプラザ都留

持ち物：お弁当、参加費200円

※クラブごとに持ち物参照

出席する方は 11月13日（火）17：30

までに事務局へ連絡してください♪

連絡先

いこいのひろば実行委員会事務局
都留市社会福祉協議会　森嶋
☎ 0554－46－5115

★タイムテーブル★

9：00	ボランティア集合／輔の打ち合わせ　（2階：機能訓練室）
9：45	参加者集合／輔の会　（2階：機能訓練室）
10：00	クリアキャンドルづくり
12：00	宴食
13：00	にこにこえくぼクラブ：カラオケ/チームT：ボールゲーム
15：00	帰りの会
15：20	参加者解散
15：30	スタッフ、ボランティア反省会
17：00	完全解散

「いこいのひろば」登録者および市民ボランティアに発送する「いこい通信」

について打ち合わせをする。

なお、平成24年度「いこいのひろば」開催の状況については、いこいのひろば支援サークル「IKI」の年間活動報告のページに掲載している。

開催数：10回、参加者合計：290人

3　ホームページの運用

都留文科大学のホームページ内の『地域貢献活動』の中の「文大ボランティアひろば」のサイトを平成21年度に立ち上げ、活動報告を中心に記事の掲載をしている。このサイトの運用には、学生だけでなく、市民の方も関わり、それぞれが記事や写真の投稿を行い、責任者に任せるのではなく、みんなで作り上げるホームページの運用を目標にしている。

内容は、「ボランティアひろばって？」、「今後のイベント」、「参加している人たち」、「次回の打ち合わせ」、「エコキャップ回収状況」、「会議録」、「記事の投稿やひろばに参加する方法」等を掲載している。

http://school.tsuru.jp:8081/borahiro/

ここで、「ボランティアひろば」に参加している各学生サークルにおける昨年度の活動状況を紹介する。

平成24年度「ボランティアひろば」参加サークルにおける活動報告

【つくしの会】

〇H24年度年間活動〇

4月13日(金)　大学構内にて献血実施

21日(土)　東部授産園みとおしカンパニー参加

セラピードック

22日(日)　いこいのひろばにボラン

ティア参加
24日(火) 新入生歓迎会
25日(水) ボランティアひろば参加
28日(土) 都留市ボランティアまつり事前準備
29日(日) 都留市ボランティアまつりの実施支援
5月 8日(火) 大学構内にて献血実施
12日(土) 東部授産園みとおしカンパニー参加
セラピードッグ
19日(土) 森のようちえんに参加
20日(日) つる子どもまつり参加
23日(水) ボランティアひろば参加
27日(日) ねこボラに参加
6月 3日(日) 塩尻市奈良井宿のお茶壷道中にボランティア参加
4日(月) 大学構内にて献血実施
9日(土) 東部授産園みとおしカンパニー参加
10日(日) 市内福祉施設回生荘にてボランティア
16日(土) セラピードッグ
17日(日) いこいのひろばにボランティア参加
23日(土) 甲府にて献血促進連絡会議に参加
27日(水) ボランティアひろば参加
29日(金)・30日(土)
裏山観察会のホタル観賞会にボランティア参加
7月 6日(金) 障害者キックベースボール大会にボランティア参加
21日(土) 東部授産園みとおしカンパニー参加
25日(水) ボランティアひろば参加
28日(土) ふれあい夏祭りにボランティア参加
東部授産園みとおし出店支援
8月25日(土) 長野機縁安曇野市の外来生物駆除活動に参加
9月 1日(土) 八朔祭にて障害者支援施設むつみの家出店支援
9日(日) 下水道祭りにむつみの家出店支援
14日(金) 東部授産園みとおし出店支援
15日(土) セラピードッグ
23日(日) かじやまつりにボランティア参加
10月12日(金) 大学構内にて献血実施
13日(土) セラピードッグ
甲府にて献血促進連絡会議に参加
21日(日) ありんこ友の会出店支援
24日(水) ボランティアひろば参加
28日(日) 市内お茶壷道中に参加
11月 3日(土) 桂川祭に出店
17日(土) 秋のこどもまつり企画に参加
24日(土)・25日(日)
甲府市B-1グランプリにボランティア参加
12月16日(日) かじやまつりにボランティア参加
23日(日) 甲府イオンにてクリスマス献血に参加
1月28日(月) 大学構内にて献血実施
2月 9日(土) 東部授産園みとおしカンパニー参加
10日(日) むつみの家ボランティア参加

ボランティアサークルつくしの会では定期的に次のような活動をしています。

・大学構内での献血呼びかけ・実施（12月には甲府でのクリスマス献血キャンペーンに参加）
・東部授産園みとおしのカンパニー（月に1回の余暇支援活動）に参加
・都留市回生堂病院のセラピードッグ（患者さんと動物とのふれあい活動）に参加
・ボランティアひろばでの市民・大学内のボランティアサークルとの情報交換・ボランティア募集

上記の活動を中心に、その他さまざまなボランティアを行って地域との交流を深めています。

【子どもまつり事務局】

〇毎週火曜日19時～定例会
　　金曜日19時～実行委員会

〇H24年度年間活動〇

4月・ボラティアまつり
　　事前準備・当日ボランティア
　・子まつり学級
　・宝鏡寺のお祭り　お手伝い参加
　・小野のお祭り　お手伝い参加
　・雛祭り展　ボランティア参加
5月・つる子どもまつり
6月・奈良井宿のお茶壷道中
　　ボランティア参加
　・子まつり学級
　・西桂子どもまつり
7月・子まつり学級
9月・八朔祭（子ども向け小企画・八朔inつる）
　・子まつり学級
　・夢実現広場（夢実現広場さんと共催企画）
10月・都留市お茶壷道中　ボランティア参加
　・子まつり学級
11月・秋の共催企画（ミュージアム都留さん、うら山観察会さんとの共催企画）
12月・子まつり学級（2回行いました）
　・都留市バザー　ボランティア参加
　・西桂クリスマス会
1月・子まつり学級
2月・子まつり学級

【Σ（シグマ）ソサエティ】

〇H24年度年間活動〇

・ボランティアひろばなどから呼びかけられたボランティアに参加しました。
（４月）第11回都留市ボランティアまつり
（６月）障害者スポーツ交流会ボランティア
（７月）『介護老人施設つる』のお祭り
（11月）2012関東・東海B-1グランプリin甲府
（12月）ネコの譲渡会
　　ボーリング大会
　　東日本大震災の被災者に贈る餅つき

・『みとおし』さんの活動、いこいのひろば
・第43回つる子どもまつり（5月20日）
　→「エコのくに」
・秋の共催企画（11月17日）
・子まつり学級（2月16日）
・ゴミ拾い
　場所：都留文科大学周辺
　6・10・11・3月の4回行いました。
・富士山清掃（8月11日）
　『国際ソロプチミスト』さんの方々と一緒に5合目付近の清掃をしました。また、富士山の世界文化遺産登録に向けて・・・
　→登山者に缶バッチやゴミ袋を配って、富士山をより美しくしようと呼びかけました。

【work-waku都留】

〇H24年度年間活動〇

□work-waku都留とは
　自分たちの「おもしろそう・たのしそう」という思いをもとに様々なイベントを企画していく、地域交流サークルです。名前の通り、「わくわく」する気持ちを大切にして、都留で活動しています。メンバーが変わるごとに新しい企画が生まれ、幅広い活動を行っているのがこのサークルの特徴です。

＜主なイベント＞

・キャンドルナイト
　10月20日(土)　　in大学
・つくってわくわく
　月1回のものづくり教室を開催
　第１回　5月26日(土)
　　フローティングキャンドル
　第２回　6月23日(土)
　　アクリルたわし
　第３回　7月14日(土)
　　ビーズのブレスレット
　第４回　8月18日(土)

マーブリングのしおり・はがき
第５回　9月23日(日)
紅茶のシフォンケーキ
第６回　10月27日(土)
陶芸でマイカップ
第７回　11月25日(日)
クラフトバンドの小物入れ
第８回　12月16日(日)
アートステンシル
第９回　１月27日(日)
蜜蝋のクリーム
第10回　２月17日(日)
廃油の石鹸

＜その他＞
・畑活動
・お茶壺道中
・儀秀例大祭、祇園祭、八朔祭のスタッフとして
・クッキング塾
・公民館まつり
・第3回風林火山歴史ウォークin甲府

など、サークル企画の他に、地域のイベントへの積極的な参加を心がけています。

【いこいのひろば支援サークルKI】

毎週水曜日
12時30分～定例会（1号館106教室）
18時30分～実行委員会会議に参加（4号館2階会議室）

月に一度、日曜日9:00～いきいきプラザ、都留文科大学などにおいて、いこいのひろばの開催

【平成24年】

〇各月のクラブ活動の担当は
・文化クラブ
市川千尋
・スポーツ・レククラブ
平賀優実（4～7月）、谷内（8～2月）

4月22日
第1回いこいのひろば開催
参加者合計25名（月担当：佐藤保成）
午前：クラブ活動（文化クラブ：名札作り/スポーツ・レククラブ：花いちもんめ、イス取りゲーム）
午後：全体プログラム（エクササイズ）

5月27日
第2回いこいのひろば開催
参加者7名　学生15名　ボランティア2名　合計24名（月担当：津賀梢）
午前：全体プログラム（アメリカンクッキー作り）
午後：全体プログラム（ティータイム、カードレクレーション）

6月17日
第3回いこいのひろば開催
参加者5名　ボランティア11名　学生10名　合計26名（月担当：荒井翔也）
午前：クラブ活動（文化クラブ：浴衣の着付け/スポーツ・レククラブ：バーベキュー）
午後：クラブ活動（文化クラブ：茶道/スポーツ・レククラブ：卓球）

7月15日
第4回いこいのひろば開催
参加者9名　ボランティア5名　学生15名　合計29名（月担当：谷内曜子）
午前：全体プログラム（うちわ作り）
午後：全体プログラム（夏祭り）

9月　9日
第5回いこいのひろば開催
参加者11名　学生16名　ボランティア5名　合計32名（月担当：佐藤保成）
内容：日帰り旅行
場所：葛西臨海公園水族館

10月21日
第6回いこいのひろば開催
参加者11名　学生15名　ボランティア5名　合計31名（月担当：中村哲平）
午前：全体プログラム（サッカー教室）
午後：全体プログラム（つるりんぴっく大運動会）

11月18日
第7回いこいのひろば開催
参加者10名　学生15名　ボランティア4名　合計29名（月担当：津賀梢）
午前：全体プログラム（クリアキャンドル作り）
午後：クラブ活動（文化クラブ：カラオケ/スポーツ・レククラブ：ボール

遊び)
12月 9日
第8回いこいのひろば開催
参加者13名　学生13名　ボランティア6名　合計32名（月担当：荒井翔也）
午前：全体プログラム（カップケーキ・カナッペ作り）
午後：全体プログラム（クリスマスパーティー）
【平成25年】
1月22日
第9回いこいのひろば開催
参加者10名　学生13名　ボランティア4名　合計27名(月担当：1年生全員)
午前：クラブ活動（文化クラブ：おせち料理作り/スポーツ・レククラブ：餅つき）
午後：全体プログラム（お正月遊びクイズ大会）
2月17日
第10回いこいのひろば開催
参加者12名　学生18名　ボランティア5名　合計35名（月担当：吉田俊介）
午前：クラブ活動（文化クラブ：写真立て作り/スポーツ・レククラブ：DVD鑑賞）
午後：全体活動（アルバム作り）

平成24年度「いこいのひろば」開催回数：10回、参加者数合計：290名

以上が、「ボランティアひろば」に参加している、それぞれのサークルから報告された昨年度の活動の記録である。

（文責・杉本光司）

Ⅳ－４　まちづくり交流センタープランへの参加について

【趣　旨】

都留市においては、平成15年に「都留市まちづくり市民活動センター」を設置し、市民のまちづくり・市民活動を支援しており、様々な機関や組織との連携を図ってきた。

また、これまでの期間、社会福祉協議会や都留文科大学とは深く関わり、地域協働のまちづくり推進会の活動は地域住民と福祉団体や大学生が共に活動するような、特色あるまちづくりとなり、外部からも高い評価をされている。

そこで、協働のまちづくりの更なる推進を図るため、支援センター、社会福祉協議会、都留文科大学の関係を強化し、それぞれに補完しそれぞれに恩恵が見込めるような「確かな協働関係」を構築する支援センターの新しい体制づくりを提案された。具体的には、

(1) 都留市、社会福祉協議会、都留文科大学の三者が業務提携し、(2) ボランティアセンター及び地域交流研究センターの分室を設置することにより、支援センター、ボランティアセンター、地域交流研究センターの三つの機関の業務を一つの場所によって行うことを可能とし、その場所を (3) 文化会館に移転するものである。

このような提案により、「都留市市民活動推進委員会」が設置され、新しい交流研究センターとして「まちづくり交流センター（仮称）」の設置に向けての検討が行われた。大学からはセンター長が委員として参加した。

第1回委員会：平成24年12月18日（火）
午後3時～5時
第2回委員会：平成25年1月29日（火）
午前10時～12時

これまでの協議をもとに、都留市長に対し、「都留市まちづくり市民活動支援センターの今後について」答申した。

以後、センターの開館に向けて、社会福祉協議会、都留文科大学（センター長、小林学生課長、本田）、都留市役所（福祉課、学びのまちづくり課、政策形成課）

の職員を中心とした、「まちづくり・交流拠点の整備にむけた協議」が開催されることになり、定期的な開催によって、より連携を強化したセンター運営を目指すことになった。

また、都留市、社会福祉協議会、都留文科大学の三者において、「都留市まちづくり交流センターにおける連携及び協働に関する協定書」の調印式が、平成25年3月28日（木）午前10時に行われた。

（文責・杉本光司）

Ⅳ－５　文大名画座の開催

文大名画座は、本学教員を広く市民の皆様に紹介するとともに、教員がおすすめの映画を上映し、そのエピソードなどを語ったり、解説をすることを内容として、平成18年度から地域貢献活動の一環として実施しています。平成24年度は次のとおり2回実施しました。

◎第1回目

日　　時：平成24年12月13日（木曜）
午後6時45分
場　　所：2号館101教室
担当教員：英文学科　鷲直仁教授
映画タイトル：「英国王のスピーチ」

本作品は、2010年、イギリス・オーストラリア合作の作品で、第83回アカデミー賞作品賞　受賞ほか主要4部門を受賞した、2011年の話題作です。コリン・ファースが、エリザベス女王の父にして国民から慕われたイギリス国王ジョージ6世を演じてアカデミー賞主演男優賞を獲得した感動の伝記ドラマです。吃音症に悩みながらも妻エリザベスの愛とスピーチ・セラピストのサポートで歴史的演説を成し遂げ、国民のリーダーとして戦争という難局に立ち向かう姿を描き出したものです。

本上映会には本学学生を始め、都留市民など約70名が鑑賞しました。映画上映前に担当教員が本作品の主人公やその時代背景などの解説を行いました。上映後のアンケートでは、「上映前に資料付の解説があって良かった。」「この映画の時代背景を学びたくなった。」「日本語字幕での上映だったので英語のリスニング力向上にもつながった。」などの感想が寄せられました。時代的・文化的背景などを味わいながら感動してもらえたり、学ぶことに関心を持っていただいたりと、大学ならではの上映会になったように感じました。

◎第2回目

日　　時：平成25年2月16日（土曜）
午後1時30分
場　　所：2号館101教室
担当教員：初等教育学科　平野耕一准教授
映画タイトル：「はやぶさ/HAYABUSA」

本作品は、地球を旅立ち、月以外の天体からサンプルを持ち帰るという世界初の壮大なミッションを成功させるべく打ち上げられ、幾多の困難に直面しながらも7年の歳月を経た2010年6月13日、ついに地球への奇跡の帰還を果した小惑星探査機＜はやぶさ＞が辿る感動の軌跡を、最後まで諦めずにプロジェクトを成功へと導いた人々の奮闘の日々と共に描いた実録ドラマです。

本上映会には本学学生を始め、都留市民など約70名が鑑賞しました。映画上映前に担当教員が本作品の背景などの解説を行いました。宇宙という難しいテーマを、専門（宇宙物理学）の見地から分かりやすく解説し、鑑賞された市民の方々からも「宇宙や科学に興味を持った。」「日本の技術の高さに感動した。」「あきらめない気持ちをもつ事の大切さを知りました。」などの感想が寄せられました。こちらも、科学に関心を持っていただい

たりと、大学ならではの上映会になったように感じました。

（文責・地域交流研究センター担当
学生課長補佐　久保田　浩）

Ⅴ．地域交流研究教育プロジェクト

Ⅴ－１　田んぼクラブ～稲作体験実習の取り組み～

プロジェクトメンバー
・西本勝美（代表・本学初等教育学科）
・田中夏子（本学社会学科）

１　本活動の経過と活動概要について

「田んぼクラブ」は、2005年度から、都留市職員の勧誘・仲介を受けて、都留市農業委員会および山梨県富士・東部農務事務所の協力のもとに始まった活動で、以来、本学近くの水田で学生と教員の有志が稲作に取り組んでいる活動である。当初の2005年度～2007年度の3年間は農務事務所の計らいで山梨県の「ふるさと水と土基金」の助成を受け、続く2008年度・2009年度の2年間は「環境教育GP」の一環に位置づけられ、活動が大いに発展した。そして、2010年度からは、本学の「環境ESDプログラム」との関連（実習系への位置づけ）もあり、本学地域交流研究センターの「地域交流研究教育プロジェクト」に申請し採択された。今年度（2012年度）はプロジェクトとしての3年目であった。

2008年度以降は農業委員会から自立し、「基本的にはすべての作業を自分たちでやる」ことを目標として、それまで市役所の農業リーダーや農業委員会に一任していた種籾の消毒・催芽といったところから、播種、田植え準備、水入れ、田植え、除草、稲刈り、はざ掛けはもちろん、夏期休業中の水見も曜日毎の当番制でやり切っている（代掻き、秋起こし、脱穀・精米はJA等に依託）。田植え以後の無農薬栽培と、有機質肥料の使用によるぎりぎりの低農薬米への挑戦も一つの目的としている。

2010年度からは「学生主体」の運営が目指され、ほとんどの作業を学生のリーダーシップで進めることができるようになってきている。

２　今年度（2012年度）の活動について

さて、プロジェクト3年目となる今年度（2012年度）の活動であるが、学生主体の農業系サークルとしての運営が定着し、意欲的に取り組むことができた。

活動の大きな特徴としては、昨年度（2011年度）に引き続き、「水苗代」と「一本植え」に取り組んだことが挙げられる。これは昨年度当初に、学生の中心メンバーからの発案をきっかけに、長野県の農家に研修に行き、ノウハウを教わったうえでの新たな試みであった。

「水苗代」は、田の一角に周囲を堀で囲った床をつくり、直に種籾をまいて苗を育てる育苗法で、農村でもほとんど見られなくなった古い方法であるが、これに取り組むことで米づくりの全行程をクリアし、苗の生長のようすや旺盛な生命力を実感することができる。そして、通常の手植えの場合よりもさらに大きく育てた苗を、縦・横30㎝（一尺）間隔で1

本だけ植える「一本植え」という方法で田植えをおこなう。稲は1本だけ植えても根元から分けつして20〜30本に増える。通常の植え方（3〜5本くらいを一個所に植える）ではわかりにくいのであるが、「一本植え」では1本が20本に、また「一粒が千粒」になると言われている稲の生態をはっきりとつかむことができる（実際に収穫時に数えて「一粒が千粒以上」になることを確かめた）。これらの取り組みは、米づくりの工夫を知るという点でも、稲という作物を深く知るという点でも大きな成果を挙げている。

また、今年度の活動のもう一つの特記事項は除草の徹底である。田植えの2週間後から出穂期まで数回、学生たちの主体的な除草作業が徹底しておこなわれたため、例年悩まされるヒエの大発生を顕著に抑制することができた。無農薬栽培のため、手押し式の除草機も使用してはいるが、除草作業は困難を極め、炎天下の重労働でもある。この労苦の多い作業を学生主体でやりきったことは、継続して関わりを持つ学生たちのなかに「自分たちの田んぼ」「自分たちの稲」という意識が芽生えてきたことを意味する。これは「農」という営みの本質に触れる部分であり、これまでの活動の蓄積・成果として高く評価できるだろう。

田んぼクラブに参加する学生たちが活動をどのように捉えているか、二代目学生リーダーによる今年度の活動報告を転載しておきたい。

「今年度も、田んぼクラブは、自分たちの手で米づくりに取り組みました。昨年に続き、今年も田んぼの一角に種籾を蒔いて苗を育てる『水苗代』や、田植えの際に苗を一本ずつ植える『一本植え』を行いました。

田植えや稲刈りの他にも、毎日の水の管理や、農薬を使っていないので、定期的な雑草取りも大切な作業の一つです。特に雑草は放っておくとどんどん成長してしまうので、イネの成長の妨げにならないようにできる限りこまめに取ることが必要です。この点は特に大変ではありますが、逆に雑草の力強さや、農薬の存在を改めて考えさせられるきっかけにもなります。

また、イネの生命力も感じることができました。田植えの直後は風が吹けば倒れてしまいそうな状態でしたが、日がたつにつれ、みるみるうちにたくましく成長していきました。このようなイネの成長を日常的に観察することで、自分たちが育てているということを実感することができました。

そして、地域の方々との関わりもあります。作業をしていると、通りかかった地域の方々が、もっとこうしたほうがいい、というようなアドバイスをしてくださるときがあります。今後、このような貴重な意見も参考にしながら米づくりに取り組んでいきたいと思います。また、同じ作業のことについても、教えてくださる方によってやり方が異なることもあるので、米づくりの奥深さを知ることもできました。

このように、今年も田んぼクラブでは、種蒔きから水の管理、そして収穫まで一年を通して、米づくりのある日常を体験することができました。普段、何げなく食べているご飯を自分たちの手で一から育てることはとても貴重な体験だと思います。収穫したお米はメンバーで分け合います。栽培方法などまだまだ改善の余地はありますが、自分たちで育てたお米はおいしい。だからこそ、これからも続けていきたいと思います。」（今野　舜：『地域交流センター通信』第23号より転載）

なお、今年度から本学の「環境ESDプログラム」の「実習系」活動の履修（2年次）が開始され、同プログラムの「ナチュラルライフコース」を選択した学生2名が「田んぼクラブ」の活動に参加し、うち1名に同プログラムが規定する45時間の実習を認定した。

3　来年度（2013年度）の活動に向けて

リーダー的な学生の継承、新規メンバー募集などの課題は恒常的な課題であるが、2013年度は二代目学生リーダーが引き続き代表を務めることになり、年度当初の新規メンバー勧誘も奏功し、近年になく25名余の参加が見込まれ、活動の活性化と、学生主体の活動のさらなる展開が期待される。また、2013年度も「水苗代」と「一本植え」を、改良を加えながら継続することになった。なお、今年度（2012年度）は「地域交流研究教育プロジェクト」の区切りの3年目であったが、秋の段階で活動の見通しが持てたため、次の3年間（2013年度～2015年度）の活動を再申請し採択された。

Ⅴ－２　大学周辺山林における次世代の森づくりに関する調査

1　プロジェクトの概要

(1) 目的

〈目的〉都留市の面積の8割以上が森林であるが、その状態は必ずしも良好ではない。本プロジェクトでは大学周辺の根田入山市有林において林相の調査を行い、樹下植栽を行いそれを観察することで、都留の自然条件下でどのような森林づくりを行っていくことが可能なのかを明らかにする。内容は、都留市より学生実習用に借り受けた森林約1haについて測量、測樹、不要木伐採、植栽を行って、その動態を記録、観察する。

①植栽木が陽光を確保できるように草刈りを行う。
②植栽木、残存木の成長過程を捉えるために、少なくとも1回の測樹を行う。
③山梨の森づくりに関わる様々な主体に聞き取り調査を行う。

(2) 2010年度までの経緯

やまびこ競技場裏の都留市市有林1haを2008年度春に借り受けた。貸借にあたって山梨県森林環境部の「森づくりコミッション」制度を利用した。名称は「道路(どうじ)の森」とした。この森に関わって本学の他、山梨県富士・東部林務環境事務所（賃貸仲介者）、地域の林業会社(作業請負)にご協力いただいた。林相は放置されたアカマツ人工林である。上木に広葉樹が混交（ケヤキ・コナラ・ミズキ等）、下層はハナイカダ・クロモジが優先している。2009 年10 月の台風、2010年冬の積雪により倒木被害を生じた。

2008年度、2009年度フィールド体験において林内での下刈り作業、樹種同定実習などを継続して行ってきた。

2009年9月夏期集中授業「フィールドワークⅣ」において、道路の森での測量・毎木調査を行った（「2009年調査」とする）。まず、道路の森の周囲測量をポケットコンパスを使って行った。ほぼ方形、約100×100mの森である。次に植生調査のため、水平距離50m×30mの範囲に10m×10m格子に杭を打ち込んだ。最後に植生調査を行った。プロットの座標毎に胸高直径5センチ以上の毎木について樹種、胸高直径、樹高、上層木・下層木の別、生存・枯死の別、プロット内の位置、備考を記録した。アカマツの立木本数は224本/ha（なお、下記要旨執筆時点から更に調査を進めたために数字が異なっている）、アカマツの枯損率は46％（立木に枯死個体が占める割合）、生存木の平均樹高は22.5mであった。枯損は松食い虫によるものである。

2010年4月、日本森林学会第121回大会（筑波大学）において「文科系大学に

おける地域の森林を活かした教育への取り組み」と題してこれまでの活動内容を発表した。2010年5月、山梨県中央森林組合に委託し枯死木・危険木の伐採、搬出を行った。この際地ごしらえを行い、林内の歩行ができるようにした。2010年5月～7月に環コミ専攻科目「フィールド体験」で実習授業を行った。2010年8月、「フィールドワーク」において、道路の森の周囲測量、測樹調査を行った。2010年度は前年の172番までしか調査を終了できなかった。2011年9月「フィールドワーク」において、道路の森の周囲測量、測樹調査を行った。道路の森には約170本の生立木の樹木があることが明らかになった。

2　今年度の活動報告

(1)　9月10～11日までフィールドワーク（履修者6名）において、道路の森の周囲測量、測樹調査を行った。胸高直径は林尺で(胸高直径40センチ以上は周囲長を巻き尺で）計測し、樹高はバーテックス（レーザー測距機）で2回測定し、平均値を求めた。4年間にわたる測定をとおして、立木が成長していることを実証できた。今年度の成果は以下の通りである

①昨年までは樹木に添付した番号の紛失が多かったため、恒久的なナンバリング方法に切り替えた。

②本年度は成長の推移に着目した（表-1)。紙幅の関係からその一部を抜粋して示す。測定誤差や測定値の欠損があるものの、全体的に成長傾向を示している。放置されたアカマツ人工林にあっても、アカマツ残存木および進入した広葉樹等は成長を続けており、木材としての価値は低くとも、二酸化炭素の吸収源としての役割は果たしていることがわかった。

測樹活動への学生の感想を以下に抜粋する。

【A君】

樹木の測定とはどんなことをするのだろうかと思っていたが、樹高を計測するのにトランスポンダーなどの専門的な機械を使用することなど、初めて知ることが多かった。また、自分が思っていた以上にたくさんの種類の樹木が存在しているということを知った。一口に樹木の測定・調査といっても、想像以上に大変だということが分かった。

【B君】

初日と2日目は大学周辺の林野での樹高測定を行った。昨年も樹高測定を行ったので手元のデータと比較して樹木の成長度合いが分かったので、とてもやりがいがあった。また、実際に林野に立ち入ることで今回お話しいただいた森林の構成樹種や鳥獣のくらしというものがイメージしやすくなったと感じている。

【C君】

1日目、2日目は樹木の測定をしました。樹木の測定をするといっても、どのような方法で測定するのか想像できないでいたので、とても勉強になりました。また、思っていたよりも体力を使う作業だったということにも驚かされました。この測定をやってみて樹木の名前も知らないものが色々ありましたし、測定の方法、器具の使い方など、今まで知らなかったことを知ることができ、大変有意義な測定でした。

【Dさん】

昨年に引き続き、木の測定を行った。今年は昨年とは違い少人数だったため、みんなのチームワークがとても引き出されたと思う。初めての人、2回目の人さまざまだったけど、1日目にはすでに、みんなが全ての作業の役割(係)をこなせるようになっていたので、これがみんなで協力して行ったという証なのではないかと感じた。

(2)　共同研究者である西教生氏は、これまでの当プロジェクトの蓄積を踏まえ、図書館横ビオトープの樹木調査を行った。

2012年10月30日および11月6日、大学附属図書館のビオトープで樹木調査をおこなった（つる性木本は除く）。調査は、ビオトープに生えている樹高50cm以上のものを対象に、樹種、樹高、胸高直径（樹高1.3m未満のものは地際直径）、実の有無について記録を取った。

調査の結果、約130個体の樹木が確認され、種数は約50種であった。エノキが16個体と最も多く、次いでフジウツギ属が9個体、エゴノキが8個体、アワブキが7個体などであった。樹高については、最も高いものはケヤキの8.4m、次いでエノキの7m、アワブキの6.9mなどであった。

確認された樹木は、ビオトープの設計時に植栽されたもの、その後、本学フィールド・ミュージアムの関係者らによって植栽されたものがほとんどであったが、風や動物によって種子が散布され、定着したと思われるものもあった。たとえば、カツラやヤナギ類は風によって、ヒメコウゾやガマズミなどは鳥類の採食行動を通してビオトープ内に種子がもたらされたと考えられた。このことは、本学のビオトープが大学周辺の森林や河川と繋がっていることを示唆するものであろう。このようなビオトープの機能は、今後もモニタリングしていくことが望ましい。また、調査の結果を学内外に公開し、ビオトープを優れた教材として捉え、活用する方法も同時に模索する必要がある。

(3)　9月12日、フィールドワーク（履修者6名）において、次の皆様に山梨県内の森林保全や野生生物管理についてお話を伺い、また山梨県有林に関する施設を見学し、報告書としてまとめた。西谷務様（幼児緑育研究会）、田中美津江様（(財）オイスカ山梨県支部、木netやまなし）、大澤正史先生（菱山小校長）、筒井好澄先生（菱山小教頭）、白砂勇様（山梨県鳥獣保護センター）。報告書の配布を希望される方は泉まで連絡されたい。

以下、学生の感想から、インタビューを振り返りたい。

a．西谷務氏

【B君】

西谷務さんに案内され、最初に舞鶴城公園を訪ねた。帰省などで甲府方面に電車で向かうと、車窓左手側に城跡があるのが分かったが、実際に訪ねたことはなかった。

(中略)公園内のシンボルともいえる大きな碑があるが、この碑は明治40年と43年に山梨を襲った水害に対して、明治天皇が県の財政等の立て直しを支援するために森林を恩賜してくださったことに対する謝恩碑である。3年の歳月をかけて建てられた謝恩碑の高さは台座を含め26m程である。

次に、同公園内にある恩賜林記念館を訪ねた。恩賜林記念館には先に述べたように天皇から森林を恩賜された際に交付された文章が残されていた。また、県内の森林の特徴や林業の歴史を教えていただいた。特に印象に残ったのが、拡大造林の際にカラマツを積極的に植林したという話だ。確かにカラマツは成長も速く大量生産に向いているのだが、普通ならば将来的には価値の高くなるスギやヒノキを植えるのではないかという疑問が浮かんだ。しかし、山梨県内でも亜高山帯に近い気候に位置する箇所があり、そこではスギやヒノキは育ちにくいためカラマツを植えたそうだ(中略)。

恩賜林記念館の次は、甲府駅北口を出てすぐのところにある藤村記念館を訪ねた。建物自体は明治8年、現在の甲斐市

に学校校舎として建てられたものを利用している。この建物の様式は当時の県政だった藤村紫朗が積極的に奨励したと言われており、藤村式建築と言われている。

b．田中美津江氏：

【A君】

オイスカ山梨の田中さんのことは以前から聞いており、山梨の森林再生に多大な影響を持った方だと聞いていたので、少し緊張していた。

インタビューを始めると、田中さんは私たちの質問に親切・丁寧に答えてくださり、非常に充実したインタビューを行うことができた。

インタビューの結果、森林再生には、その地域の人々のやる気が最も大事だということが分かった。活動をプロデュースする側のやる気がいくらあっても、該当地域の人たちのやる気が無ければその活動が実を結ばないという話が印象的だった。オイスカでは、やる気がある地域にしか投資しないということも印象的だった。

オイスカでは学校林活動にもいち早く取り組んでいる(中略)。田中さんは、小さいうちから自然や山の中で活動することによって、自然に興味を持つようになるし、自然を大事にする人間に育つということをおっしゃっていた。

【Dさん】

田中さんはとても気さくな方で、私たちの質問にわかりやすく具体的な例を出しながら、答えてくださったので、あまり緊張することなくインタビューすることができた。

私は、今まで山梨県は森林がとても多いとは思っていたが、なぜ多いなどかはあまり深くは考えたことがなかったので、インタビューしてから、山梨県の森林は多くの人の手で守られていて、たくさんの費用がかかっているということが改めて実感させられた。その手助けをオイスカが中心となってやっているというのを聞いて、本当にこのようなことが好きじゃないとやっていけないなと思った。さらにそれを学校林活動や、FSC認証の材で作った机やいすの寄付などを通して、次世代に伝えていこうとしているのが、今後のこともしっかりと考えているなと思った。

また、私の中では森林に関わっているのは男性の方が多いイメージだったが、田中さんのような女性が仕切っているというのもすごく衝撃的だった。

c．菱山小学校大沢校長先生、筒井教頭先生

【E君】

近年山梨県下の小中学校では学校林を活用した授業が盛んに行われるようになった。菱山小学校は1993年に「緑の少年少女隊」に加盟して、駅舎清掃や花壇整備など地域に貢献していた。菱山小は元々学校林を持っていなかった。森林を利用した活動は地元財産区の方から、山火事で焼失した木々の植林の手伝いを依頼され緑の少年少女隊の活動として参加するところから始まった。この活動は5年目を迎える。

調査の中で特に驚いた点は、この植林活動にかかる費用や機材・移動手段・指導に至る全て財産区の方々が受け持っているということだ。確かに財産区側は植林に必要な労力を賄え、学校側は森林と関わる機会が得られ両者に利益がある。

しかしこれは菱山小の全校児童の少なさと、高齢化しつつある財産区の両者でなければ実現しえなかっただろう。なぜならば植林にかかる諸費用を財産区側がもつ関係から、あまり多くの児童を連れて行くことができない(中略)。

菱山小学校のように地域住民とのコミュニティ形成こそが、地域社会の抱える諸問題の解決に必要な要素ではないだろうか。このような観点から農山村にこそ地域住民と学校の積極的な繋がりが重要になってくるだろう。

【F君】

学校で取り組んでいていいと思ったこ

とは、地域の方々と協力しながら、山を整備できることである。地域の方々がここまで熱心に取り組んでいる学校は、他には少ないと思う。細かな手伝いまでしてくれて、子ども達のやりやすい環境を作っていて、学校と地域が協力することの大切さを改めて学んだ。学校側よりも地域の方々の方が準備することが多く、忙しい時期なのにも関わらず率先してやっているように感じた。それは、ここで扱う山が学校林でなく、財産区のものだからかもしれないが、地域全体で子ども達を育てていくというような愛情のようなものを感じた。
(中略)　菱山小のような活動ができることは本当に幸せなことだと思う。

ｃ．白砂勇氏
【B君】
　武田の杜管理事務所の白砂勇さんに県内の野生動物についての聞き取り調査を行った。鳥獣センターでは主に怪我や病気になった野生鳥獣の保護を行っており、施設内では様々な理由で運び込まれた鳥獣を保護していた。特に印象に残っているのが、保護の依頼を受けてもその線引きが難しいという事だ。鳥獣センターにおける治療対象鳥獣は、「山野等で生まれ、生息し、かつ所有者のいない野生鳥獣で、人為的による傷病により保護されたもの」とあるが、例えばツバメの巣が自重に耐えきれず自然落下した場合などは人為的ではないが、放っておけばネコやカラスに襲われてしまうことも考えると、対応にある程度の柔軟さを持たせなければならないことや、特定外来生物であるアライグマやハクビシンなどは怪我をしていたら保護はするが、怪我が完治しても法律で規制されているため野生に放すことはできないという問題があるということを知った。
【C君】
　事前に色々調べて行ったのですが、予想よりも多くの鳥獣を保護されていて、改めて、鳥獣保護センターにお世話になる動物の多さに驚かされました。それと同時に、保護できない鳥獣もいるという現実も目の当たりにしました。どんな鳥獣も傷ついたり、衰弱していたりすれば保護すると思っていたので、少し複雑な心持ちでした。聞き取り調査の担当をして下さった白砂さんはとてもいい人で、楽しそうな職場だというのが印象に残りました。

3　今後の課題

　プロジェクト研究は2012年度で幕を閉じるが、今後も地域の植生と人為の関わりを研究で取り上げていきたい。なお、当プロジェクトで培った植生調査および聞き取りのノウハウは学生諸氏の卒業論文作成に役立つものと確信している。

（文責・泉桂子、２の(2)のみ西教生）

表- 1 一部測定木の直径および樹高の推移(2009-2012)

		胸高直径 [cm]				樹高[m]			
番号札	樹　　種	2009	2010	2011	2012	2009	2010	2011	2012
3	ホオノキ	6.5	6.8	7.0	7.7	7.4	8.4	8.2	8.9
4	カラマツ	39.9	41.3	－	44.6	26.4	32.1	29.0	32.4
5	ミズキ	18.3	19.1	19.0	19.2	13.5	13.1	11.7	13.7
6	ケヤキ	6.5	7.1	11.5	8.8	4.5	6.2	6.0	6.5
7	ケヤキ	10.1	10.6	15.4	12.6	6.6	9.0	7.4	8.1
8	アカマツ	47.5	47.5	－	48.1	22.4	21.7	24.0	26.8
9	ケヤキ	19.9	19.9	20.0	22.2	－	11.2	12.2	11.5
12	アカマツ	44.6	45.6	45.5	45.8	21.9	23.7	20.1	22.8
13	アカマツ	39.0	37.1	37.7	38.4	31.0	23.5	25.7	32.7
14	クマシデ	12.0	12.2	12.3	13.9	9.6	8.5	8.4	9.6
15	ミズキ	12.8	13.3	9.7	14.7	11.0	11.0	10.8	11.5
16	ケヤキ	6.5	6.8	－	10.0	7.4	8.4	－	11.5
17	アカマツ	44.9	52.2	－	54.1	23.9	27.1	25.2	28.2
18	ケヤキ	9.1		8.3	9.0	6.2	9.6	7.9	19.6
19	ウワミズザクラ	15.3	13.6	14.5	16.0	8.8	10.0	11.1	11.2
20	ミズキ	17.3	17.1	17.7	18.9	17.4	9.3	7.8	8.0
21	ケヤキ	6.0	6.4	6.6	7.0	10.8	4.6	4.3	4.8
22	コナラ	5.0	4.8	5.5	6.0	4.3	4.4	4.6	4.8
23	ケヤキ	6.5	6.8	－	5.5	7.4	8.4	－	4.7

出典：2009-2012年の調査結果より、泉作成

Ⅴ－３ 「谷二ラボ」活動について

テーマ：谷二（やに）ラボ

～小学校教員志望学生の科学実験に関する実力向上と小学生の科学への興味喚起の機会としての放課後実験教室～

【目的】

①小学校教員をめざす学生が指導的立場で小学生とともに実験をする経験を積むこと、

②学生が実験内容の選定から安全な実験教室の運営までを行う経験を積むこと、

③学生の自然科学の素養を高めること、

④理科実験教室への参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討することである。

【概要】

谷村第二小学校で放課後に小学生を対象とした理科実験教室（通称「谷二ラボ」）を平成23年度からはじめた。実験教室の内容選定や準備、当日の進行は学生が中心になって行い、上記目的①～③の達成を目指す。参加した小学生を対象に、アンケートやインタビューを行い、理科実験教室への継続的参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討する（目的④）。同時に、指導的立場で参加した学生に対する効果も検討する。

【平成24年度の報告】

谷村第二小学校で、放課後に小学生を対象とした理科実験教室を行った。

第１回

6月6日　「スライムをつくろう」

参加者：小学生38名、大学生8名

第２回

8月1日　「紫外線～色が変わるビーズで工作～」

参加者：小学生39名、大学生6名

第３回

10月31日　「砂糖水の虹」

参加者：小学生20名、大学生8名

各回とも、参加した子どもたちの反応はよく、実施する大学生側としても手ごたえを得られた。なお3学期に一度実施することを計画していたが、小学校と当方の都合があわず、残念ながら3回どまりとなった。

本年度参加した学生は主に4年生で、意欲的かつ意識的に活動に参加し、目的①～③について一定の成果を収めた。活動を通じた彼（女）らの感想は、「実験をする上で、指導者が最も実験内容を理解していなければならず、準備段階でつまずくことも多い。しかし、子どもの学びを深めるために、みんなで伝達方法を考え、試行錯誤していきながら、自らの理科の授業に繋げていきたい。」というものであった。

なお、山梨県富士・東部地域教育事務所から声がかかり、平成24年度南都留地域教育フォーラム第2分科会「連携を通して興味・関心を育てる」に、山森が助言者として、学生が提案者として参加し、「谷二ラボ～小学生と小学校教員志望大学生が一緒に楽しむ科学実験～」と題した報告をした。

参考URL:

平成24年度南都留地域教育フォーラム分科会一覧
http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ft/h24forumbunnkakai.html

平成24年度南都留地域教育フォーラム第2分科会提案書①「谷二ラボ～小学生と小学校教員志望大学生が一緒に楽しむ科学実験～」
http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ft/documents/2-1tsuru24.pdf

（文責・山森美穂）

（付）2012（H24）年度地域交流研究センター担当教員

杉本　光司	情報センター教授	地域交流研究センター次長 地域情報教育担当
佐藤　　隆	初等教育学科教授	地域交流研究センター次長 発達援助部門担当
畑　　潤	社会学科教授	地域交流センター通信編集長 フィールド・ミュージアム部門担当
坂田有紀子	初等教育学科教授	フィールド・ミュージアム部門担当
鳥原　正敏	初等教育学科教授	地域美術教育担当 フィールド・ミュージアム部門担当
品田　笑子	センター特任教授	地域教育相談室担当
北垣　憲仁	センター特任教授	フィールド・ミュージアム部門担当
久保田　浩	学生課長補佐	地域交流研究センター事務局
本田　祐士	センター担当事務職員	地域交流研究センター事務局

2012（H24）年度地域交流研究センター運営委員

福田　誠治	副学長	鳥原　正敏	広報委員長
西本　勝美	初等教育学科	坂田　有紀子	初等教育学科
寺門　日出男	国文学科	ヘイミッシュ・ギリズ	英文学科
前田　昭彦	社会学科	重冨　惠子	比較文化学科
小林　正人	学生課長	小俣　昌寛	企画広報担当
池谷　廸久	市民代表（都留市まちづくり支援センター長）		

2013年9月22日　発　行

編　集　者　　都留文科大学地域交流研究センター

発　行　者　　都留文科大学
〒402-8555　山梨県都留市田原3-8-1
電　話　0554－43－4341

印　刷　所　　有限会社　印刷エトリ
〒402-0052　山梨県都留市中央2-7-24
電話　0554－43－3451